朝日選書
157

# 朝鮮と日本のあいだ

金 三奎
高崎宗司

長 璋吉
安 宇植

金　三奎　長　璋吉
高崎宗司　安　宇植

# 朝鮮と日本のあいだ

朝日選書 157

# 目次

# 朝鮮と日本のあいだ

# I

# 個人史の中の朝鮮と日本

金　三奎

## 1

先頃、作家のソルジェニーツィンが『仔牛が樫の木に角突いた』という自叙伝を書きました。いまアジア的な表現をもってすれば、これを蟷螂(とうろう)の斧とでもいうことができそうです。私の一生などというものは、樫の大木に仔牛の角どころではない。まさに、蟷螂がおのれの斧をふりかざして、巨大な竜車に立ち向かった。そんなふうな気さえいたします。

きょうの集まりの案内用の葉書きには、私が以前『人間の世紀』に書きました、「民族問題との出会い」の一節が引かれております。私の一生は中途半端な生涯であった。革命家にもなれず、サラリーマンにもなれなかった。ただ自分の良心を大事にして、その良心の声を伝えようと努力してきたのだと……。実はそう書いたあとで、私自身、はたと思いついたことがあったのです。それは、良心の声は天の声であり、天の声は人の声だということであります。人すなわち天である。アジアには昔から、この敬天の思想があり、その思想が人間を尊重する敬人の思想へと移っていったのです。ちょうど、

あの李朝末期に東学党の乱が起こり、これは日清戦争の端緒になるわけですが、東学の原理とは、人すなわち天という考え方だったのです。そうか、東学を創始した崔済愚も同じことを考えていたのかと。こんなことを申しあげると、なにをいまさらとお思いでしょうが、ともあれ、私はこれに気づいたわけです。アジア的な人間尊重の思想、これこそ、私は人間性の極致を指すものだと思います。そしてそれは、朝鮮近代の夜明けへとつながっていく。あの無為無能で横暴をきわめた両班階級に対して、つねに虐められ苦しめられてきた百姓たちが、この人間尊重の思想に目覚め、それによって立ちあがったのが東学の乱であった。つまり、朝鮮の近代への胎動とは、この人間の尊さに目覚めることだったのです。ただし、目覚めかけたその時は同時に、日清両国の軍隊が朝鮮の地であい争う時でもあった。こうして、近代化への第一歩は、不幸にも踏みにじられてしまったわけです。そんなことをいろいろ考えあわせながら、いま私の半生をふりかえってみますと、けっきょく、そうした朝鮮近代化への苦悩が中心軸をなしている。まるで太陽の周りをめぐっている惑星のようなもので、私自身はただ、ぐるぐる回っていたにすぎないような気がいたします。

それで、この東洋的な人間尊重の考え方を西洋でいえば、ゲーテなどは、畏敬の思想と結びつけているのですね。ピーティズムといいますけれども……。有名なゲーテの言葉に、〝汝と同等なる者、汝の上なる者、汝の下なる者に対して、つねに畏敬の念をもって対しなさい〟というのがあります。『ウィルヘルム・マイステル』の中に出てくる一節です。朝鮮の場合に話を戻しますと、李朝中期の有名な儒学者に李退渓という人がおります。この李退渓もゲーテと同じようなことをいっています。

教育の根本は敬畏にある。相手を尊敬し、相手の人格を敬うことが、教育のすべてなのだと……。この思想を通ることによって、ついには東学にいたる。近代化へと向かった朝鮮固有の精神史の流れとは、そういうものではなかったのだろうか……。これから皆さんに、私自身のまことに拙ない体験談を聞いていただく前に、現在の私の心境といったものを、少し語らせていただきました。

私が生まれたのは一九〇八年、日韓併合の二年前にあたります。つまりソウルに日本の統監府がおかれた二年後です。全羅南道の黄海に面した港町に木浦（モッポ）というところがあります。この木浦から少し内陸部にはいった場所に、月出山という山があるのです。この山は一名小金剛山とも呼ばれていて、奇岩絶壁の景勝地なんです。ところで、月出山は表と裏で景色が非常に違うのです。裏側は木々がうっそうとしております。その反対側、つまり奇岩絶壁の多いほうのふもとに、霊岩（ヨンアム）という小さな町があります。私はこの片田舎で、地主の三男坊として生まれました。そう三奎という名前は、三番目の奎ということで付けたのかもしれません。父は私が五歳の時に亡くなりましたが、子供たちのために相当な財産を残してくれました。私の家は両班ではありません。まあ一所懸命働いて、父は産をなしたのでしょう。小作米が年に千石あがったといいますから、ちょっとした素封家ではあったわけです。長兄の鳳奎（ボンキュウ）は私より十五歳年長ですから、二十歳で家長となったことになります。そんな事情もあって、長兄は遺産をもらって家を継ぎ、八歳上の中の兄敏奎（ミンキュウ）と私とは、金銭的には何不自由もなく大学教育を終えることができたのです。私が東京へ留学したのが一九二一年、大正十年の時でした。です

から、ちょうど十二年間を、故郷の霊岩で暮したわけになります。

田舎での生活は、別にどうってこともない平々凡々としたものでした。あの当時のことですから、私も五歳頃になると、近くの漢学の塾、書堂に通って千字文を習いましたよ。七歳になって、今度は普通学校へ入学したのですが、私は一番年の若い入学者でした。普通学校というのは日本の小学校にあたります。総督府が朝鮮人用につくった学校です。クラスにはずいぶん年上の者もいて、サントゥといって日本のチョンマゲですね。そういう髪をしていた人もたくさんいました。で、校長は浅沼という日本人だったのですが、はさみを隠しもっていて、そのチョンマゲを切っちゃうんです。そんなふうにして、みんなを坊主頭にしていた光景が、いまも目に浮かびます。そう、こんな経験もございましたね。どんな用事だったか忘れましたが、何人かで夜道を歩いていたら、一町ぐらい離れて、私たちと平行に二つの目玉をランランと光らしてトラがついてくるのです。私たちはみんなで大声をあげて歌をうたったり、わいわい騒ぎながら歩きました。そうすれば、トラのほうでも警戒して、私たちのそばにはやってこられないからです。けれども、トラは決して獲物をあきらめたんじゃない。一定の間隔を保ったまま、私たちのあとをずっとつけてくるのです。尾行してくるトラの両の目が、二つの赤い玉のように輝いていました。

一九一九年には有名な三・一独立バンザイ事件が起こります。私が普通学校の四年生になった時でした。その日が何日だったかは忘れましたが、四月のことで、五日ごとに立つ市日でした。私たちは朝礼のあと、急に走りだしたんです。いっせいに校門を飛びだすと、田んぼのあぜ道をもういっさん

に走りました。途中、畑の隅に隠してあったカマスがあって、中には太極旗（韓国の国旗）がたくさん詰めこまれていたのです。太極旗が各々に手渡され、私たちはそれを打ちふりながら、〝大韓独立万歳（テハントクニプマンセー）〟を叫びました。そのまま霊岩の城外を一周して市場にはいっていくと、群衆が私たちに呼応して独立万歳を叫んでくれました。ところが、すぐに警察官がやってきて、私たちはみんな警察に連行されたわけです。私たち普通学校の生徒は、警察の庭の一隅に立たされていたのですが、そこからは、六角棒を格子にした留置場が丸見えです。みると、大勢の大人たちが閉じこめられていました。みんな霊岩では名のある人たちばかりです。上の兄の鳳奎もそこにいました。取調べ室からは、人間を殴るにぶい物音と悲鳴が聞こえてきました。まだ小学生だった私たちの目には、それはなんとも異様な光景でした。あの時は本当に放心したような気持でしたね。やがて昼すぎ頃、校長が引き取りにやってきて、私たちは学校へ連れ帰されたわけです。それから一人一人呼び出され、校長の取り調べが始まりました。なにしろ全部の生徒が参加したのですから、とても時間がかかります。私が呼びだされたのは夜になってからでした。なにを聞かれ、なんと答えたのか、まるで憶えていませんが、家に帰った時の母をはじめ家族一同のほっとした表情だけは、いまでも強く記憶に焼きついております。

　このことはあとになってわかったことですが、霊岩におけるバンザイ事件の首謀者は、実は私の仲兄だったのです。その頃、霊岩からソウルの京畿高等普通学校にはいった人間が二人いて、兄はその一人でした。高等普通学校というのは、日本の旧制中学にあたるわけです。兄はソウルで三・一独立万歳を目撃し、故郷に帰ってくるともう一人の学生と一緒になって、霊岩での決起を組織したのでし

た。お蔭で兄は、大邱（テグ）刑務所に八カ月ぶちこまれました。この頃はまだその程度の軽い刑ですんだんですね。しかし、出獄してきた兄は、もはやソウルの学校へは戻れません。そこでやむをえず、東京へ留学することになったのです。私は普通学校の五年を修了し、日本の中学校を受験する資格ができました。ソウルへ出るか、東京へ行くか、選択の道は二つあったのですが、けっきょく、一足先に日本へ赴いた中の兄を頼って、東京に行くことを決めました。ですから、三・一バンザイ事件が、結果的には私をして日本へ留学させる因縁みたいなものになったわけです。考えてみますと、運命の糸というものは、不思議な働きをするものだと思います。そして、私が東京へ着いたのが、大正十年の二月二十二日でございます。いまだにその日のことを忘れません。東京駅の駅頭に降りたつと、雪が降っていました。信玄袋というのが昔ありましたでしょう。それをぶらさげて、兄の敏奎や郷里の先輩たちの暖かい出迎えをうけたのです。

こうして私の東京生活が始まります。そして、三月にはすぐ試験を受けて、私は海城中学校へ通学することになりました。あの学校は、いまは新大久保駅の近くにありますが、その頃は、現在の農林水産省のある場所にあったのです。海軍省の裏手で、府立一中と隣り合わせでした。翌年、海城中学二年の時に、七年制の東京高等学校が新しく設立され、一年と二年を同時に募集したのです。私は二年生のほうに応募して、運よく合格することができました。そんなことで私は、高校入試の苦しみを味あうこともなく順調に高等学校を終え、一九二八年、昭和三年の春に、東大の独文科にはいったわけです。

関東大震災があったのは大正十二年の九月一日ですが、あの時にはずいぶんいろいろな体験をいたしました。私がまだ中学三年の時でしたけれども……。私が入学した東京高等学校は、尋常科と高等科とに分かれていて、前者が中学、後者が高校というふうになっていたわけです。ちょうど東京高等学校は、新校舎を中野のほうに建設中だった時分で、バラック建ての臨時校舎が神田の一ツ橋にありました。いまの学士会館の場所にあったわけです。当時の私は、法政大学の学生だった仲兄と一緒に、九段下の今川小路に住んでいました。しもたやの二階を借りて下宿生活をしていたのです。夏休みで郷里の霊岩に帰省し、東京へ戻ってきて、たしか二、三日たったかたたない頃だったと記憶しております。

その時はカバンを買おうと思って、私は神保町のスズラン通りへ出かけたんです。兄は昼寝をしていたので、一人で下宿を出ました。カバンを買って店から表へ出ると、とたんにぐらぐらっときたんです。目の前に救世軍の五階建ての建物があったのですが、それが一ゆれするたびに、上のほうから一階ずつ落ちてくる。これはえらいことになったなあ、と思いました。自転車で通りかかった人が、上から崩れてきた建物の破片のために、血だらけになってしまいました。私のほうは、なんとか電車通りまで出たのですが、間の悪いことに新築中の洋服屋があった。丸太で組んであった足場が、突然崩れ落ちてきたのです。よけるひまなどありゃあしません。横倒しにされたままで、少しのあいだじっとしていたのですが、どうなったのかなあと思って体を動かしてみると、うまい具合いに足が抜けました。幸い怪我をせずにすんだのです。そこで立ちあがって、神保町の四ツ辻まで行くと、大勢の

人間が九段坂に向かって走っていくのです。私も一緒になって走りました。途中今川小路を通るので、自分の下宿へまずいってみようと思いました。

ところが、今川小路の一帯は、家が全部倒れていて、どこが自分の下宿なのか皆目わからない。それでも、屋根づたいになんとか見当をつけて、やっと捜しあてました。横倒しになっている自分の室にもぐりこんでみると、兄の姿がみえません。足でどんどん踏んでみたのですが、なんの反応もない。なんとも情けないような気持で、荷物などもちだす気にもなれません。私は書きためていた詩の原稿と、読みかけていた『ニール河の草』という本をもって、そこを離れました。どうにも仕方がないので、私は九段坂の上までいって、手すりにつかまり、下から登ってくる人たちをぼんやり眺めていました。そうしたらですね、兄がはだしのまんまで、坂を駆けあがってくるではありませんか。私は中途まで走りおりて、兄に飛びつき抱きあって泣きました。昼寝をしていた兄は、私が買物にでかけたあと風呂屋へいったんだそうです。そこで地震に見舞われた。だから、小倉の学生服をひっかけただけで、あわてて風呂屋を飛び出したんだそうです。そんなわけで、兄と二人で九段坂上にいたんですが、夕方頃、郷里の先輩である韓晛相(ハンヒョンサン)と出会いました。この人は古いアナーキストで、いまも健在で日本におりますが……。ともかく、三人一緒にかたまって、その日は九段坂の上で夜を明かしたわけです。凄愴な光景でしたね。東京中が真っ赤に燃えあがっている。中天には三日月がかかっていましたが、真っ赤に焼けた鎌のようでした。

明け方になって、韓さんの知合いが神楽坂にいるからというので、私たちはとりあえず、そこへ出

向きました。一眠りして十時頃に起きると、朝食の仕度がしてありました。私と兄が食事をすませていると、そこの家の主人が、韓さんになにごとか耳打ちしているんです。たずねると、ここいらはどうも〝物騒だ〟というんですね。その時には、私も兄もなんのことだかわからなかったのですが、すでに朝鮮人迫害のうわさが伝わってきていたわけです。その家の主人は、中野の知人のところへ避難するようにすすめてくれました。礼をいって、とにかく表通りに出ると、ちょうど中野方面へ行くバスがあった。私たち三人はそれに飛び乗り、中野で降りました。あの当時、無我愛運動という宗教活動をしていた伊藤証信という人がおりました。この人が中野の自宅に無我苑という修養場を設けていたんです。私たちが避難するように勧められた場所がそこでした。伊藤さんは親切な方で、裏庭の一角にゴザを敷いてくれたので、私たちは、しばらくはそこで休息をとりました。私たちの他にも、ずいぶんたくさんの避難者がきていました。そのうちに、このあたりも〝危ない〟ということがわかってきました。〝朝鮮人狩り〟のことを私が知ったのは、実はこの時でした。それで、伊藤さんは、下高井戸に住む江渡狄嶺（えとてきれい）さんのところに行くようにと……。あそこならば、君たちも安全だろうというのでした。

この江渡さんは本名を幸三郎といいますが、私の命の恩人です。皆さんはあるいはご承知ないかもしれませんが、江渡さんはトルストイ主義者で、東大を中途退学してしまった人です。お茶の水女子高師を出た関村ミキさんという女性と結婚し、武蔵野の下高井戸で百姓生活を送られた方です。

ともあれ、避難先について、私たちにはなんのあてがあるわけではありません。夕方近くなって、

私たち三人は下高井戸へ向かいました。私も兄も手ぶらでしたが、韓さんには荷物が少しあった。それに棒を通して兄と韓さんが持ち、私はそのうしろからとぼとぼついていきました。田んぼのあぜ道を歩いていったんです。できる限り人のいない道を選んだからです。日がほとんど傾いた頃になって、やっと下高井戸に着きました。でも困ったことには、肝心の江渡さんの家がみつからないのです。そこは小川が流れていて、私たちが小さな橋を渡ろうとすると、〝どこへ行くんだ〟と、トビ口を手にした消防隊員たちから誰何(すいか)されたのです。江渡狄嶺さんのところへ行きたいのですが、家がわからなくて困っているんです。そう答えると、消防隊員たちは急に親切になって、私たちを江渡さんの家まで案内してくれました。三人が朝鮮人だということを、たぶん彼らは気づかなかったのだと思います。

そんなふうにして、江渡さんの家にたどり着いた時分には、もうとっぷりと陽が落ち、あたりは真っ暗でした。伊藤証信さんの紹介ということもあったのでしょうか、江渡家では心よく私たちを迎え入れてくれました。その時には、江渡さん自身は子供の看病で出てこられず、奥さんが私たちを別棟のお堂に案内し、蒲団を敷き蚊帳(かや)をつってくれました。このお堂は〝可愛御堂(かあいみどう)〟といって、幼くして亡くなった長男を憐み、建立したものだということを、あとで聞きました。私は床にはいったのですが、うつらうつらしていて、あれは何時頃だったでしょうか。夜もだいぶ更けた頃でした。突然、太鼓の音と鬨(とき)の声が起こり、あっちへ行った、こっちへ行ったと、大きなどよめきがあったのち、一発の銃声が響きました。追いつめられた同胞が、殺されたんだ……。私は隣りに寝ていた兄に、思わずすがりついて泣きました。

その夜以来、私たち三人は奥の室に移され、江渡さんから、外出一切まかりならぬという厳命を受けました。まあ一種の軟禁状態で、私たちは三カ月をすごしました。江渡さんのところは、まったくの水呑み百姓で、苦しい生活をしていました。だけれども、本はずいぶんありました。私たちが閉じこめられた奥の室が、その書庫だったので、いうならば、図書館で毎日暮しているようなものでした。私はいまだに、江渡さんのところで食べた麦飯のうまさを、忘れることができません。

江渡さんの家にかくまわれたまま、三カ月がたち、たしかもう十二月にはいっていたと思います。東京高等学校の生徒監をやっていた近藤兵庫先生が訪ねてきたんです。そして、いつまでもお世話になるわけにはいかないし、世の中も平穏になったからというので、同窓生で下宿旅館をしている家を紹介され、私はそこへ移りました。まもなく冬休みになったので、霊岩に帰ったのですが、それまで家にはなんの連絡もできませんでした。ですから家のほうでは、私と仲兄のことを、ほとんどあきらめていたといっていました。朝鮮アメを売りながら、芝中学に通っていた友人がいたのですが、彼は行方知れずのまま、ついに消息がとだえてしまいました。例の〝朝鮮人狩り〟にまきこまれて、殺されてしまったのでしょう。私自身は江渡さんのお蔭で、直接には恐ろしいおもいをしたことはありません。虐殺事件のことも、むしろあとで知らされたようなものでした。

大正十二年当時は、アナとボルの運動が盛んでした。権力者のほうでは、彼らの動きを恐れ、警戒したのだと思います。社会主義者の活動を未然に防ぐため、戒厳令を布き、民衆の動揺をそらす目的で、朝鮮人を悪者に仕立てたのです。〝朝鮮人が井戸に毒薬を放りこんだ〟といったデマを流しまし

た。また朝鮮人が虐殺されただけでなく、無政府主義者の大杉栄夫妻も殺されました。要するに、権力者が使う常套手段だったんですよ。このことは、現在では公然の秘密になっていますが、当時の険悪だった世相をふりかえると、いまでも鳥肌がたちます。

しかし、大震災は私にとって、決して不幸だけをもたらしたわけではありません。江渡夫妻とめぐりあえたこと。それは私に、はかりしれない人生の糧を与えてくれました。私は江渡さんを通して偉大な人格を、夫人を通して聖なる母の慈愛を知りました。江渡夫妻は現在もなお、私にとって心の父であり心の母です。私は一九五一年に、韓国から日本へ亡命してまいりました。その時、まっさきに行ったのは、江渡さんの家でした。ところが江渡さんは、敗戦の前年に亡くなっておられたのです。ミキ夫人は健在でしたが六年前に逝去されました。

さて、私は一九二八年、昭和三年の春に東大にはいり、三一年に卒業するわけです。この時代は、二八年に三・一五、翌年に四・一六という、日本共産党に対する全国的な大弾圧が行なわれたことでもわかるように、マルクス主義がもっとも盛んな頃でした。東大に新人会が生まれるのは大正七年のことですが、私が入学した当時は、すでに新人会の段階を越えておりました。つまり、大正デモクラシーを引き継いだ形の穏健な社会改良主義ではなく、マルクス主義というラジカルな革命思想が、もうわーっという勢いで前面に出てきていたのです。学内には、反帝闘争をすすめようとする学生たちのいろいろな研究会、読書会があって、積極的な実践活動がなされていました。共産主義青年同盟、

あるいは反帝同盟が、各大学に結成されていました。それで、私が東大にはいり、まっ先に関係したのが、この反帝同盟だったのです。それでは、この時期に、なぜ私がそれほどまでにマルクス主義に魅かれていったのか、そうした私個人の思想遍歴といったものを、少し遡った形で申しあげてみたいと思います。

先ほどお話ししたように、私は大正十年に東京へ留学し、中学生活を送るようになった。まあ、その頃になりますと、年齢的にももの心がついてくるわけですね。世の中の動き、また自分の生き方といったことについて、幼いなりの思索が始まります。なにか非常に重苦しい圧力みたいなものが、精神の内部にたえずつきまとってくるのです。それは、私自身がそうなるというよりも、むしろ、環境がそうさせるということもありました。たとえば、私は夏休みになると、かならず郷里の霊岩に帰省していました。すると、帰省した一介の中学生が、しょっちゅう刑事に見張られ、監視されるわけです。そうなりますと、なにもわからぬままに、非常に重苦しい気持に襲われてくるのです。関東大震災時の朝鮮人虐殺という衝撃も、精神の底に暗い淀みとなっていました。いったいどうしたらよいのか。どうしたら国を独立させることができるのか。だんだんと、そうした自分のおかれている現実を、真剣に考えざるをえなくさせられてしまうんです。

私は中学時代にはトルストイに魅せられ、その人道主義、人間愛に、心の眼を開かれました。封建的な身分制度、因循な倫理観……。そういうものが、自分のいままでの世界から、うろこが落ちるように消え去っていく。それは私の心を、爽やかにしてくれる心地よいショックでもありました。そし

て、私は詩を書くようになり、高校時代はドイツ文学を耽読しました。ゲーテやシルレルから始まって、ヘッセやトーマス・マンと読みすすんでいったのです。しかし、重苦しい孤独感は依然去りませんでした。いまから考えますと、私が文学を志したのは、一種の逃避だったように思いますね。将来の自分の身を考えて、とにかく官吏みたいなものにはなりたくない、という気持ですね。だから、文学をやるんだと……。文学が好きで好きで志すというよりも、やはり逃避の意味合いが強いものだったと思います。けれども、人間性に対する基本的態度といいましょうか、そうした変わることのない情念の源のようなもの、それを私は、文学を通して教えられたのだ、と信じています。

中学・高校時代を通じて、私に強い影響を与えた友人には、李東碩(イートンソク)という順天(スンチョン)出身の男がいました。彼は仲兄とは京畿高等普通学校の同期生で、三・一独立闘争に参加したのち、危険を避けるために一時満州に逃れ、その後東京にきて早大の独文科にはいったのです。彼は私を、実の弟のように可愛がってくれました。一緒に下宿生活を送ったこともあります。彼は何々主義者というよりも、一個の志士といったタイプの男でした。朝鮮の歴史に精通していて、よく忠臣烈士の物語を聞かせてくれました。また、きれいなハングルで小説を書いて、よく聞かせてくれたのです。そのお陰で、私は当時、崔南善が主宰していた週刊紙『東明』の懸賞作文に応募し、当選したこともありました。私がトルストイやドイツ文学を読むようになったのも、李東碩兄の感化が大きかったのかもしれません。彼は、他人をだますよりはだまされたほうがまだましだ、とよくいっていました。正義感の強い清い心を持った男でした。

それからもう一人、どうしてもあげなければならない友人は、清水幾太郎氏です。彼とは東京高等学校の高等科の時から、ともに学ぶようになりました。私は尋常科から進級したけれども、彼は独協中学から試験を受けてはいってきたのです。二人とも背が高かったので、机を並べて坐るようになったのが、親しくなるきっかけだったように思います。末っ子のぼんぼんだった私に較べて、彼はそう裕福でない商家の長男として育ったせいか、その時分から、私などよりははるかに苦労人でした。彼は独協出身ということもあって、ドイツ語の実力は群を抜いていました。高校時代にもう、ジンメルの『社会学』など、社会学に関するぶ厚い原書を次々に読破していました。彼は私と親しかったために、ずいぶん迷惑をしているんです。家宅捜索なども受けたことがある。

私は刑務所から出て困っていた頃に、レーヴィン・シュッキングの『文学趣味形成の社会学的考察』という本を、『文学と趣味』と改題して翻訳出版したことがあります。これは一九三六年のことですが、その仕事も彼が世話してくれたものでした。そうですね、彼は高校時代から進歩的な本をよく読んでいました。そういう彼の社会に対する批判的な姿勢が、けっきょく、彼を東大に残らせなかったのだと思います。アカデミックな学者然としておさまるには、彼の学識はずっと深く鋭かったわけです。彼が戦後、平和運動家として花々しい活躍をするようになったのも、私にはしごく当然のことに思えます。そして、六〇年安保闘争の時、彼は日本共産党と思想的に訣別するわけですね。いまの彼の在り方についても、私なりに理解しているつもりです。私は清水幾太郎氏を通じて〝友〟の心を教えられました。

読書遍歴をもう少し続けますと、私は大学にはいって、ヘーゲルを読むようになったのです。学校の授業で私がもっとも興味をひかれたのが、紀平正美教授の講義で、ヘーゲルの『精神現象学』でした。私はヘーゲルによって弁証法を理解し、しだいにマルクス主義に触れていくわけです。最初に『共産党宣言』を読んだ時の感激は、いまでも忘れません。まさにこれだ！　と思いました。だんだんマルクスやレーニンというふうに読んでいって、マルクス主義がわかりだしてくる。するともう、がぜん勇気が湧いてきちゃったんです。朝鮮を独立させる思想とはこれだ！　というわけですね。私は高校生までは、重苦しい孤独感にさいなまれながら、ひたすら文学書にかじりついていた。それがマルクス主義と出会うことによって、いっぺんに世界が明るくなったのです。そして、実践活動の中に踏みだしていく。つまり、簡単にいえば、文学青年が行動する人間へと、変貌していくわけです。

このあたりの事情は、ちょっと説明が必要ですね。とくに若い皆さんたちは、スターリン批判やハンガリー事件などをご承知なわけですから……。あの時代の朝鮮のインテリたちが、まあ私の場合にはそのタマゴだったわけですが、マルクス主義に対した気持というものは、ほとんど憧憬にすら近いものがあったのです。これは革命ロシヤやコミンテルンについても同様です。現在の若い皆さんたちからみると、少々おかしいような気がするかもしれませんが、そうした時代の風潮といったものを、あらかじめ理解しておいてください。

私が東大にはいった頃、東大には朝鮮人学生が三十名ほどいて、いままでで一番多いといわれていましたね。それで、大学の最初の一年間は、私は大変真面目な学生でした。大学三年間で二十一単位

とれば卒業できるのです。それを一年で十一単位もとってしまったんですから……。そのかわり、二年と三年はすっかりさぼりまして、ろくすっぽ学校にも出なくなりました。話の前の部分で、学内にいろいろな読書会が組織されたと申しあげましたが、私も自然とそういうものに参加して、要するに〝革命的に〟なっていったわけです。当時、『インタナショナル』という雑誌を出していた高山洋吉氏の家で、読書会がもたれていました。読む本はなにかというと、スターリンの『レーニン主義の基礎』なんです。これをドイツ語で輪読します。マルクス主義叢書というのが、ドイツで発行されていて、この本はその中の一冊だったんです。

高山洋吉さんとの関係では、こんなこともありました。一九二八年十二月に、コミンテルンが、日本官憲の弾圧にあって壊滅状態に追いこまれていた朝鮮共産党に対して、テーゼを出したことがあるのです。その内容は、これまでのようなプチ・ブルジョア知識人の党ではなくて、労働者や農民と結びついた堅実な組織方法をとれ、派閥闘争をやるな、といったふうなものでした。これは俗に、十二月テーゼと呼ばれているものです。この十二月テーゼは、朝鮮共産党の事実上の壊滅状態を指摘した個所が、一部では、コミンテルンによる朝鮮共産党の除名だと誤解されたこともあり、当時は相当物議をかもしたものだったのです。私はたまたまドイツ語版の『インプレコール』をみていて、十二月テーゼが載っていることを知りました。その訳したものを、高山洋吉氏に渡して目を通してもらい、雑誌に載せていただいたことがあります。

ところで、私がそうした左翼系の読書会や反帝同盟に参加するようになったのは、東大生だった朝

鮮人の先輩が一人いたからでした。それが私より一年上で、美学科に籍をおいていた金斗鎔(キムトゥヨン)なんです。彼は温厚な人柄で、色白の小さい男でしたが、革命的情熱に満ち溢れたエネルギッシュな活動家でした。金斗鎔は現在北朝鮮におりますけれども、その消息についてはなにもわかりません……。その彼が、朝鮮プロレタリア芸術運動を推し進めるために、無産者社という文学団体を組織したのです。そしてここに、在東京の朝鮮人大学生や朝鮮の若いインテリたちが結集しました。朝鮮戦争休戦後に北で処刑された林和(イムファ)、北でいまも生きている金南天(キムナムチョン)、それから、李北満(イーブクマン)、韓載徳(ハンチェドク)、舞踊家崔承喜(チェスンヒ)の夫安漠(アンマク)といった者たちが同志の面々でした。私も無論同人に加わって、元気いっぱい活動していたわけです。

そうこうしているうちに、翌年の一九二九年十一月、朝鮮では光州学生運動事件が起こります。この事件の発端は、ごくささいなことだったのです。列車で通学中の朝鮮の女学生を、同乗していた日本の中学生がひやかした。それがもとになって、朝鮮の中学生と日本の中学生とが殴り合いになった。すると、日本の警察官が、朝鮮人の学生だけを弾圧したんですね。その一方的なやり方に反撥して、朝鮮人学生たちはストライキに突入する。これがまたたくまに光州(クワンジュ)市から朝鮮全土に波及し、植民地奴隷教育反対運動として、非常に大きな反日闘争になっていったわけです。

私はその頃、霊岩出身留学生の東京での委員長だったので、みんなを集めて相談し、さっそく激励のビラを送ったんです。あの時分には円本といって、一円で買える全集本がたくさん出ていました。そこで、日本文学全集の一冊を買い求めて、中をくりぬき、そこへビラを詰めて郵送したわけです。

在東京霊岩留学生の署名入りで送りました。そうしたら、すぐに朝鮮から東京の警視庁に照会がきた。たしか三〇年の二月、学年末の試験最中だったと記憶します。当時の私は早稲田の弁天町に下宿していたので、早稲田署に引っぱられ、始めて留置場の体験をしました。まあ最初だったし、隠し立てしないでやったこともあって、情状酌量したのでしょう。二週間ぐらい泊められただけで出してくれました。出てくると、まだ受けられる試験が四科目だけ残っていた。三年になって卒業論文を書く資格をうるためには、二年で十五単位とっていないとだめなのです。私は一年のうちに十一単位もとってしまっていたから、あと四単位とれば進級できるわけです。私の気持としては、大学など卒業しなくてもかまわないと思っていたのですが、まわりが卒業したほうがいいというので、一夜づけの勉強をやって、なんとかその四単位をとりました。

私は大学三年の時、無産者社の委員長になりました。それまで委員長だった金斗鎔が、在日朝鮮人労働組合を日本労働組合全国協議会（全協）に解消させるための活動で多忙になったため、私がそのあとを受け継ぐ形になったのです。無産者社からは『プロレタリア芸術』という小雑誌を発行していたのですが、そう四、五冊ぐらいは出しましたでしょうか……。ところで、私が委員長になってまもなく、文学団体である無産者社に、大きな政治問題がもちこまれてきたのです。それは、朝鮮共産党再建という問題でした。

簡単に事情を申しあげますと、一九二七年に、第三次朝鮮共産党が検挙されました。この時の党は、のちにＭＬ党（マルクス・レーニン党）と呼ばれるようになります。このＭＬ党の幹部の一人に韓偉（ハンウィ）

健（コン）という人がいて、彼は保釈中に上海へ亡命したわけです。そして、上海で『階級闘争』という雑誌を出しながら、同志を養成し、朝鮮共産党再建の準備にとりかかります。これが〝朝鮮共産党再建協議会事件〟といわれるものになっていったのです。三〇年の春頃から、韓偉健は本格的な活動にはいり、オルグを各地に派遣しました。一隊は満州よりソウルの工業地帯である永登浦（ヨンドウンポ）にはいり、組織活動を開始する。他方、もう一隊は船で横浜と神戸に上陸し、東京へ集結してくる。この韓偉健が日本へ送った使者が、無産者社に連絡をつけにきたわけです。

私が会ったのは、高景欽（コキョンフム）、金致廷（キムチジョン）、黄鶴老（ホワンハクノ）ら四名でした。金致廷はオルグ活動に優れ、高景欽は理論派で、金民友（キムミンウ）、車石東（チャンソクトン）などのペンネームで、当時幾つかの論文を発表しています。それで高景欽たちは、朝鮮共産党再建に関する出版活動を、無産者社を通して行ないたいと、委員長であった私に要求してきたのです。私はこの要求を受け入れました。当時の日本は、治安維持法が布かれ、それなりに厳しい政治状況ではありましたが、朝鮮国内と比較すればはるかに自由がありました。原書でならば、マルクス主義の文献はたいてい読めましたし……。

どうにもならなくなったのは、三一年の満州事変以降ですね。この当時はペケペケ（××）やマルマル（〇〇）を活用しながら、一応どんな文書でも出版することができました。無産者社では、高景欽らの論文を掲載したパンフレットを発行した。「マルマル（〇〇）ペケペケ（×××）再建のために」というふうにして出したわけです。これが「朝鮮共産党再建のために」であることは、その筋の人間ならすぐわかるはずなのですが、とにかく、合法的な形で出版できたのです。ただし、発行

すると、新聞紙法違反のかどで、責任者が二十九日間拘留されるのです。私は委員長ということで大事にされ、韓載徳と安漠は早大に、金南天は法政大に通っていたので、けっきょく、浪人生活をしていた林和と李北満が、かわるがわるこの二十九日間のブタ箱生活をしてくれました。

私たちは、この朝鮮共産党再建について記したパンフレットを、方々にばらまきました。また、朝鮮国内にも送りこんだのです。輸送方法としては、直接郵送したものもありますが、夏休みに帰省する学生たちの蒲団の中にしのばせたりもしました。そんなふうにやっていたのですが、三〇年の段階では、東京においてはべつだん困ったことも起こらなかった。官憲のほうでは見逃すというより、泳がせる形できっと見張っていたんでしょうね。やがて、無産者社の同人たちは、韓載徳を留守番役に東京へ残して、みんな朝鮮へ帰っていきました。林和や金南天らは、ソウルでカップ（朝鮮プロレタリア芸術同盟）の活動にはいっていったのだと思います。

ここでちょっと私の個人的なエピソードを話しますと、実は私は大学の卒業証書をもらっていないのです。といいますのは、翌三一年の春に卒業式があったわけですが、特高が張っているというのです。私は事前にそれがわかったものですから、卒業式にはでなかった。そんなことで、とうとう卒業証書をもらいそこねてしまいました。でも別に、地下生活をしていたというわけではありません。危ない場所にはあえて近づかなかっただけで、向こうが私を捕まえる気なら、すぐにでも逮捕できたはずですから……。

で、私は大学を出たあとも、しばらくは東京にいました。そうしますと、霊岩の伯兄のほうから、早く帰国するように催促があるわけです。私のほうとしても、例の党再建協議会の問題もあり、一度はソウルへ出向く必要があった。おそらくそれが、三一年の五月か六月だったと思います。まず郷里の霊岩にいった。そして、隣郡に住んでいる金持の友人から、なにがしかの資金を引き出そうと試みたわけです。私は自分の真情を吐露すれば、当然いくばくかの資金は提供してくれるに違いないと思っていました。しかし、よくよく考えてみれば、出すわけがないですよ。なんとも甘っちょろい〝革命家気取り〟だったんですな、その頃の私は……。まあ、そんな道草を食いながら、ソウルへ着いたのが六月の末頃だったと思います。ソウルには、党再建協議会の活動を地下で進めている連中がいました。その連中と会って、いろいろ話し合ったりもしました。しかし、朝鮮国内の状況の厳しさというものは、ききしにまさるものでした。具体的な活動などなかなかできうる事態ではないのです。お互いの情報交換ぐらいしか、実際にはやれませんでした。

ともあれ、ソウルでは、林和や金南天や李北満ら無産者社の同志たちと再会でき、嬉しかったですね。東大門外に住んでいる友人がいて、私はソウル滞在中は、ずっとこの友人の家に寝泊りしていました。そう、かれこれ一月ほど、ソウルにはいましたかね。夜になると、毎日のように、無産者社の同志や友人たちと、鍾路(チョンノ)の裏通りへ出かけ飲み歩いたものです。なにしろ若くて元気がいいし、いたって呑気なものでした。そして七月に、私は東京へ帰ってきました。

ところが、あとでわかったのですが、これが実に間一髪だったのです。東京の警視庁は、私たちを

見逃していたのですが、朝鮮のほうではそうではなかったのです。京城の治安当局はすでに、党再建協議会弾圧のために、大がかりな捜査網を張りめぐらしていた。私たちが日本から苦心して送った党再建のパンフレットも、もちろん治安当局の手に押さえられていました。私が朝鮮を離れた直後に、ソウルにいた連中は林和を始めとして、全部鍾路警察署に逮捕されたのです。そして、捕まえた連中を徹底的に拷問で締めあげたんですね。その結果、無産者社の委員長は金三奎で、東京の再建協議会に関してある程度の事実が判明する。しかも捕まった人間たちは、自分たちはなにも知らんというふうだったのです。

当時、鍾路署には三輪というすご腕の特高警部がいた。鬼警部と呼ばれ、朝鮮の共産主義者で、この男に悩まされなかった者はいないとさえいわれていました。この三輪警部が部下の須藤という男と、他に二人の刑事を引き連れて、はるばるソウルから東京へと乗りこんできたのです。あの頃、朝鮮には森浦という、これも有名な思想検事がいたのですが、その令状を持参して……。そうなれば、東京のほうだって放っておくわけにはいかない。警視庁の内鮮課が動いて、ただちに手配が張られた。

私が逮捕されたのは、たしか八月二十三日だったと記憶しています。留守番役をした韓載徳と約束があり、彼の家で会うのは危ないと思って、高円寺のある喫茶店で落ち合うことにしていたのです。その店へ一歩はいったとたん、両脇をがっちりとつかまえられた。これではもう観念する他はないですよ。その時、私を逮捕した男は、これも有名な朝鮮人の特高刑事でした。私は杉並署にもっていかれました。私の他には、韓載徳、高景欽、黄鶴老が逮捕されましたが、金致廷だけはうまく検挙を逃

れました。私は夏だったのでユカタのままでした。差入れがいっさい許されなかったのです。それで、ユカタ姿に手錠をかけられて、ソウルの鍾路署まで連行されました。現在と違って三日がかりの長い道中だったのですが、いま考えても、まことにぶざまな格好だったと思います。

私がソウルに連行され、西大門刑務所に移監されたのが、十月初旬頃ではなかったかと思います。東京で捕まった四人のうち、韓載徳を除いた三人が西大門に収容されたのです。それからまるまる三年間、私は刑務所暮らしを送りました。出所したのが一九三四年八月で、執行猶予五年の判決を受け釈放されたわけです。私が移監された時は、未決監がいっぱいだったために既決監の独房にいれられました。既決監には一棟二棟三棟とあって、私たちは三棟でした。既決囚を隔離する目的でしょうか、二つの既決房の間に、未決房がはさみこまれる形となっていました。そして、既決囚はたいてい三人一組で収容されていて、昼間は封筒張りや網を編む仕事をやらされていました。私の独房の広さは、一坪ほどのものでした。中央にゴザが一枚敷かれていて、部屋の中央に坐るように命令される。目の前の鉄の扉には、看守ののぞき穴があり、壁に寄ると叱られます。壁をたたきあって連絡するのを防止しようとするわけです。それから、便器、洗面器、やかん、かけ蒲団一枚、掃除用のほうきとちりとり。生活用品はこれで全部です。狭いながらも、ちょっとした文化住宅だと思いましたよ。

私がなぜ既決監に入れられたかといえば、前年の三〇年五月に、間島で五・三〇事件といわれている大規模な抗日武装闘争が行なわれ、その検挙者で未決監が満員になってしまっていたからなんです。間島五・三〇事件では、日本領事館や警察署が襲撃され、警察官を含むたくさんの日本人が殺されて

おります。この武装蜂起の計画には、中国共産党との提携があったことを、研究者たちは指摘しています。当時の中国共産党を指導していた李立三路線下での、過激な一揆主義の影響があったわけです。皮肉なことに、中国では李立三路線は失敗しますが、この間島における朝鮮共産党指導の決起だけは、一時的にせよ成功裡に終わったといわれています。もちろん、その後に日本側の大弾圧があり、五百名を越える逮捕者が裁判のために朝鮮に連行されたわけです。私は半年ほどして、未決監に移されたのですが、周囲はほとんど全部、この間島事件の逮捕者たちでした。私の予審が遅れに遅れて三年もかかったのも、その大量逮捕者の審理に手間どったせいだと思います。

私が独房にいれられた、最初の晩の感想を申しあげましょうか。私がまずびっくりしたのは、監房全体が家鳴りするぐらいに、壁通信が行きつ戻りつすることでした。ところが、それが実に音楽的なんです、リズミカルでね。ああこれこそが、同志との意思疎通の道なんだなあと思いましたよ。だいたいカナタラ〔日本語のアイウエオにあたる〕の順番で打つぐらいのことは、私も聞いて知っていました。すると隣りの房から、タンタン、タンタンタンタンタンタンタンと七つ打ち、次にタン、タンタン……と七つ打ってきたんです。考えたら、これが〝誰か〟という意味になる。そこで考え考え、〝キムサムキュウ〟と打ったら、向こうがえらく喜んじゃって、ドンドコドンドコ壁をならしました。今度は私のほうから〝誰か〟とやった。そうしたら、河弼源(ハピルウオン)と崔星煥(チェソンファン)なんです。二人ともML党の党員で、私も名前だけはよく知っていました。これは余談ですが、寺尾五郎著『三十八度線の北』という本をみると、崔星煥が北朝鮮での案内役を務めていることが書かれています。一九五九年の話なの

ですが……。
　翌日の朝、私は運動場に出されました。一日五分ぐらい運動をさせるのです。私が運動場に出て、ふと壁のほうをみると、河弼源と崔星煥が、塀に手をかけ飛びあがって私をみて会釈しているのです。だが、まずいことに看守にみつかって、そくざに引きたてられてゆきました。私も運動を終え呼ばれて行くと、二人はもう後手に縛りあげられて、ひっぱたかれている。みているのがつらいぐらいでした。私のほうは未決囚だから、殴るわけにいかなかったらしい。とたんに、看守が大声でいった。なにを通報したか！　この通報という言葉が初耳で、私は始め意味がよくわからなかった。しばらくして、なにも通報していない。一所懸命運動していただけだ。本当になにも通報してないか！　なにもしていない。私がそういったら、河弼源さんが大きな歯ぎしりをするのです。がんばれってことなんだな、と直感しました。本当か！　本当です。よし、帰れ！　それで、私は自分の房に帰ってきました。
　二人はそのあと、何日間か手錠をはめられっぱなしでいました。飯を食う時もそのままで食べる。それが罰則なんです。私はそくざに転房させられました。そこで、よし今度は私のほうからというので、隣りに向かって〝誰か〟とやった。そうしたら、隣りの房の住人は、ML党の幹部崔益翰(チェイクハン)でした。とにかく、この壁通信ほど、獄中のなぐさめになったものはありません。始めは相当たどたどしかったのですが、そのうちに私も要領をおぼえた。それで毎晩のように、タンタン、タンタンと、看守に教わった〝通報〟ばかりしていました。

監獄は〝私の大学〟だった。そんなふうないい方がよくされますが、私の場合にも、同じようなことがいえそうです。私は東大での三年間のうち、一年間は真面目によく勉強しました。けれども、あとの二年間は、集会から集会へと飛び歩いたり、反帝闘争だとかなんだとかといって、忙しいままに過してしまった。学生ということでは、この二年間は前にもいったように、まったくのさぼり学生に終始したわけです。その空白を、私は独房生活でとりかえしたともいえます。

文字通り、思索と反省の三年間でした。哲学書から宗教書、科学書から文学書と、ずいぶん本を読みました。道元の『正法眼蔵』なども、ああした環境だったからこそ、精読できたような気もいたします。とくにドイツ観念論を、これは原書ならば、安心して向こうがいれてくれるということもあったのですが……。カントからヘーゲル、ヴィンデルバンド、リッケルト、ヘルマン・コーエンまで、系統だった形で読破したことは、その後の私にはずいぶん役に立ちました。普通の生活をしていたのでは、とてもできないことです。私は夢の中でカントと論争したことがあるんです。あれは、いままでも忘れません。カントの文章というのは、一頁ぐらいピリオドがないままに続くのです。その一頁が、そっくり夢の中にでてきます。そして、ここの関係代名詞がどうだとか、こうだとか、といって、カントと論争しちゃうんですよ。本当に不思議な経験でした。

まあ、私は未決にいましたから、差入れの融通がなにかときいたのです。郷里の家からは、毎月二十円の金を送ってくれていた。金さえあれば、勝手に好きなものが食べられたわけです。あまり運動をしませんから、差入れの金で購うのは、一日一回ですみます。差入れの食事を、私は最初の頃は朝

昼晩の三回食べていた。だけど、とてもそんなに食えるもんじゃない。胃がもたれてしまって、日が暮れると就寝なんですが、寝苦しくてどうにもならない。そこで、刑務所のメシを朝晩の二回にし、一回だけ差入れのものを食べるようにしたのです。ところで、刑務所の三度のメシというのは、満州アワにニワトリのえさ用の割りゴメと大豆がまざった奴なんです。これを型で押して配るんです。しかし、これが馴れてくると実にうまいんです。当時は一食が二十銭ほどだったから、一月間、差入れの食事を食べても六円ですむ。残った十四円を、私はほとんど本代にあてていました。目録をとりよせてもらって、朝鮮にない本は、手紙を出して東京から送ってもらったりもしました。したがって、私はひもじい想いもしなかったし、好きな読書もできたし、けっこう楽しくやっていたのです。もっとも、未決囚だから、こうした自由な振舞いができたということもありますね。

若かったことも、環境への順応が早かったのかもしれません。ソウルの冬の寒さといったら、実際ひどいものです。暖かい全南（全羅南道）で育った私にはこたえました。寒さが針になって、体の中に突きささってくる。でも、体のほうが馴れてきて、次の年には、それほどにも感じなくなってしまうのです。零下二十度になると、洗面器の水が、目の前でみるみる凍っていくのがみられます。これはとても美しい光景でした。その頃の心境というものは、社会へ出たいという気持もあまりなかった。出れば出たで、またいろいろやらなくてはならない。それに、シャバはどうせ大きな監獄ではないか。こっちは小さな監獄で、その点からいえば、どれほどかわりばえがあるというのだ。それなら、ゆっくり本でも読んでいようって……。そういうふうな気持でしたね。

ただ、私にとって悲しかったのは、東京で一人だけ検挙をまぬがれた金致廷が、新たに朝鮮に送りこんできた同志たちがいたのですが、これが活動中、いっせい検挙されたという知らせを獄中で聞いたことでした。金致廷は、前に話したように党再建のために上海からもぐりこんだ一人ですが、逮捕を逃れ、日本に残り日本共産党の協力をえて、党再建工作に奮闘していたのです。金致廷はオルグを朝鮮全道に派遣したのでした。けっきょく、彼の工作は実らなかった。しかも三二年の秋には、金致廷自身が日本で逮捕されてしまったのです。ひどい拷問を受けて取調べ中に発狂し、松沢病院に収容され、ほどなくして病院内で死去したという。私はこの金致廷のことを想うと、いまでも胸が痛みます。それから、私たちと一緒に逮捕された黄鶴老も、独房生活の淋しさに負けたためか精神異常をきたし、病気保釈となったのち死にました。

一九三四年八月に、私は西大門刑務所を出まして、一月ぐらいは郷里の霊岩で休養しました。そして、十月には、また東京へ出てきたのです。それまでの私は、生活のことなどほとんど考えなかった。学生時代は無論のこと、刑務所にはいっている間も、家からずっと仕送りを受けていた。私は大学二年の時に結婚しまして、翌年には長男が生まれている。だから、妻と子供のいる東京へ戻ってはきたものの、これからいったい、どうやって三人が飯を食っていくのか。これが大問題だったのです。そうですね、私は勝手気ままにやってきましたし、それまで妻には、どれだけ苦労を強いたかわかりません。しかし、これは私事にわたりますから、それ以上は申しあげません。

それで、郷里にいた間に家の事情もよくわかった。そうそう面倒をかけさせるわけにもいかなくなったことが……。といいますのは、いつまでも兄のすねを齧じっているのが、いいか悪いかということより、そのすねのほうが、もう齧じれない状態になっていたのです。話の始めに申しあげましたように、私の家は父が早く亡くなり、長兄が相続して、親代りのようになっていた。長兄はいろいろな事業に手を出したのです。その思いつきもなかなかよかった。それなのに、なにをやっても成功しないんです。そりゃあそうでしょう。二人の弟がよくないのです。仲兄は三・一蜂起をやるし、末弟の私は治安維持法で刑務所にはいった。こんな札付きの弟が二人もいるような家が、あの頃の朝鮮で、どんな事業に手を出したって、うまくいくはずがなかったのです。要するに、長兄はいろんな事業をやればやるだけ、先細りになっていったわけです。

東京へ出てきた私は、本気で自活の道を考えました。翻訳を一所懸命やったわけです。けれども、原稿料は安く、菊判のドイツ語の本を一頁訳して、一円だったはずです。一日三頁訳すのが精いっぱいです。しかも、そんな仕事もたまにしかない。これでは私一人なら食えるかもしれないが、親子三人ではとうてい無理です。当時、大学卒の普通のサラリーマンの初任給が、五、六十円ぐらいだった時代です。食堂の定食が朝十二銭、昼と夜が十五銭だったでしょうか。清水幾太郎氏のお世話で、レーヴィン・シュッキングの翻訳本を出したのが、この頃だったんです。当時は妻も働きに出ていたのですが……。

まあ、そんなふうにして、なんとかやっていた時に、金斗鎔にさそわれて、朝鮮芸術座に関係した

わけです。大学の時の反帝同盟や無産者社の場合もそうだったし、私は金斗鎔とは、考えてみると縁が深いんです。もちろん、そんな仕事は金にはなりません。私はレパートリー選定部に籍をおいていました。実際に芝居をやるほうの連中がはりきっていて、レパートリーが決まると、築地小劇場などを借りて練習したりしていたわけです。その朝鮮芸術座が、三六年十月に弾圧されます。そして、金斗鎔と私は、また一年間ぶちこまれちゃったんです。この時は金斗鎔だけが起訴され、私は起訴猶予ですみました。

満州事変以降、状況がだんだん悪くなっていき、三七年には日中戦争の発端となった蘆溝橋事件が起こります。この段階では、朝鮮人が朝鮮語で演劇活動を行なうことが、もういけないということだったのです。朝鮮では南次郎のもとに、皇国臣民化がどんどん進められていた。だから、朝鮮語で演劇運動をやるなどというのは、もっての他であるというわけです。演劇活動を通じて独立運動をやるのではないか。それが弾圧の理由でした。もっとも、これは全然うそというわけではありません。朝鮮芸術座に集まった連中は、みんなそうした鬱勃(うつぼつ)たる感情を当然もっているのだから……。しかし、朝鮮独立のために、具体的にいまなにかをしようという計画があったわけではなかったし、互いに励まし合う意味で朝鮮芸術座に集まっただけのことなのです。金のない連中が集まって、それでも、たまには公演もしたし、いまから想うと本当に呑気なものでした。よくあんなことをやっていたと思いますよ。

この時、私がもっていかれたのは世田谷警察署でしたが、留置場の一年というのは刑務所に三年い

るよりもつらかった。ただ、拘禁生活にはすでに馴れていたし、どういう理由だったのか、看守がとても親切にしてくれた。その点は非常に得をしました。留置場にはいった半年ぐらい、達磨の面壁九年を気取ったわけでもなかったのだが、私は座禅を組み続けた。もうどうにでもなれって気持でしたから。ところがどうしたことか、そのことに看守がえらく感心しちゃったんです。

ある日、私に少し〝運動〟しないかというのです。あの中での〝運動〟というのは、掃除をしたり弁当を配ったりすることなんです。私は一人じゃあとてもできないから、助手がほしいといったら、看守も承知してくれた。ちょうど外語大の学生二人がはいっていたので、この二人を助手にしました。そして、三人で弁当を配ったり掃除をしたりして、時々は便所で煙草をすったりしました。家から金を差入れてくれていたので、夜になると、その金で大福とかお菓子とかを買ってきてもらう。あの中にいると、無性に甘いものが食べたくなるんですね。そう、焼きトリまで食べたこともありました。だから、後半の半年間は、ずいぶんわがままのしっぱなしだったわけです。いい看守でした。外語大の学生の名前は忘れましたけど、一人は水野といいましたか、おっとりした男でしたね。あの二人、いまはどうしているのでしょうか。

けれども、三七年の七月に、例の蘆溝橋事件が起こり、その号外の鈴の音が留置場の窓越しに聞こえてきた時には、本当に〝万事休す〟と思いました。ああこれで、おれも牢屋からは当分出られそうにもないと……。そうあきらめ切っていたところが、運よく起訴猶予になってシャバへ出ることができた。したがって、嬉しいというよりは、ちょっと妙な気持でした。

ともあれ、留置場を出た私は、心身ともにふらふらのありさまで、しばらくはなにもする気が起こらなかった。それでも、二、三カ月たちますとなんとか気をとり直して、今度は商売を始めてみようと考えました。といって、私は口下手な上に愛想もないときている。持ち物といえば蔵書しかないから、やるとすれば古本屋ぐらいだろうと……。そこで、東京高等学校の恩師亀尾英四郎先生のところへ相談に行きました。亀尾英四郎先生は、エッケルマンの『ゲーテとの対話』を訳された人ですけれども……。すると亀尾先生は、私の希望に賛成してくれた上で、こういわれたのです。商売というものは簡単にできるものではない。一銭一厘を大事にする気持を持たなくては、うまくいくものではない。君は大学出だから、かえってそういう面が欠けているのかもしれんのだ。どうだろう、せっかく本屋を始めたいというのなら、ここは思い切って街頭商人からやってみてはどうか。夜店に出て本を売ってみるんだよ。

私も亀尾先生の忠告をもっともだと思いました。よし、夜店に立つことにしようと。そう決心したのですが、どうせ売るのは自分のもっている堅い本なのだからと考えて、夜店へ出る場所は本郷ということに決めました。夜店はテキ屋が仕切っていますから、伝手（つて）を求め、その親分を紹介してもらって、にわか作りの街頭本屋になりました。内心は多少不安だったのですが、けっこうよく売れました。売りものが私の本なので、案外珍しいものがあったせいなのかもしれません。最初の一日がとてもよく売れたんです。それで、すっかり気を良くしてがんばりました。たしかその年の冬から春にかけてだったと思います。

こうして、三カ月ほどの現場経験を踏んだ上で、私は三八年の春に、早稲田の穴八幡神社の崖下にある、小さな家を一軒借りることにしました。二階を住まいにし、一階を古本屋にしたわけです。青原書房と名乗ったのですが、この名前は、亀尾先生がつけてくださったものでした。それから、二年近くこの古本屋を続けましたか……。けれども、うまくいきませんでした。商売のほうは、なんとか〝武士商売〟なりにはやっていけたのですが、別のほうから支障が生じてきたのです。それは商売ですから、客に『赤旗』や『インタナショナル』でもなんでも頼まれれば、いやとはいえませんでしょう。そういう雑誌を読む学生などには、こっちだって、やはりシンパシーもありますし……。私の店で本を買った学生が家宅捜索を受け、その本のことで特高が店にやってくる。そんなことがあるたびごとに、一、二週間はブタ箱行きなんです。古本屋をやりながら、実は思想運動をやっているのだろうと……。一度〝注意人物〟のレッテルを貼られた人間は、当時はもうなにをやってもだめなんですね。どこまでもつきまとってきます。職業とはいえ、権力側のその執念深さには、私もほとほと感心させられましたよ。

そういうふうでしたから、長兄が経営している金山の手助けをしてほしいとの知らせがきた時は、渡りに船でした。とりあえず妻に店をまかせて、私はすぐ朝鮮へ飛びました。そして、半年ほどやって一応の目安がついたところで、四〇年の正月に、妻と子供四人を連れ朝鮮へ帰ったわけです。古本屋のほうは、大学時代に反帝同盟の同志であった有賀勝夫妻にそっくりゆずり渡すことにしました。その後、青原書房は二年ぐらい続いたのではないかと思います。というのは、太平洋戦争にはいった

頃、有賀勝氏は特高に逮捕され、拷問のために死去したと聞いているからです。夫婦ともに熱心な活動家でしたから、最後までレジスタンスを続けたのでしょうね。有賀勝氏は節操のある本物のマルクス主義者だった、と私は思っています。

長兄が始めた金山というのは、黄海の海辺にある海際里（ヘジェリ）という場所にありました。木浦からポンポン蒸気で三時間もかかります。私は家族を木浦に住まわせ、自分は鉱山の現場で働きました。鉱内深くもぐりこんでハッパをかけたりするんです。あの時は痛快でしたね。金はそれほど出なかったのですが、まあなんとか、採算をあげる程度にはやっていけたのです。金をとるやり方は、いたって単純な手工業みたいなものでした。鉱夫が掘り出した鉱石を臼に入れ、機械でこう、バタンバタンと突いて砕くのです。砕いた鉱石に水銀を流しこむと、これが金を吸うんです。あとで金を吸った水銀をとり出し、これをもう一度精製すると、品質の高い黄金がえられるわけです。水銀の沸点は金に較べてずっと低い。だから、熱して水銀を蒸発させれば、あとには金が残ることになるのですね。鉱山の向こうはすぐ海でしょう。私は暇な時には、ひねもす黄海を往きから帆船を眺めて楽しんだものです。それはまるで、心をなごませる一幅の美しい絵のようでした。しかし、太平洋戦争にはいると、産金事業はいっせいに整備されてしまいました。

そんな時に、大阪に住んでいた友人がやってきて、牧場を一緒にやらないかというのです。私はそれを引き受けました。たしか、四二年の秋頃だったと思います。私は江原道の原州（ウォンジュ）で牧場を始めたんです。牧場といっても飼ったのはブタです。子ブタを購入して、南部江原道一帯の農家に預託する。

成長したブタは、その時の価額で買いあげます。百姓のほうでは、少しの手間で小遣い稼ぎができるというので、とても喜んでくれました。そんなふうだったので、日本の敗戦の日まで、私も家族も、肉と米には不自由することなく暮しました。したがいまして、一九四五年八月十五日の解放の時、私はブタ飼いをしていたということになります。

## 2

A　金三奎先生が反帝同盟の一員として活動されていた頃、朝鮮人学生の中には、民族主義者というのは、あまりいなかったんでしょうか。

いや、共産主義者自体が民族主義的なんですよ。朝鮮の共産主義運動の第一の目標は、民族独立なんですから。民族が独立もできないでいて、階級闘争を云々しても始まりませんわね。一九一九年の三・一独立蜂起の頃は、独立宣言に署名した三十三名の顔ぶれをみても、本当にこちこちの民族主義者たちばかりです。しかし、その後の抗日闘争を通じて、それがだんだんと移っていくのです。たしか、日本に共産党ができるのは、一九二二年の七月だったと思います。朝鮮の場合は、海外で共産党が結成されたのは、それよりずっと早い時期です。沿海州や満州に移住した朝鮮人は、ロシヤ革命によるボルシェヴィズムの直接的な影響を受けるわけですから。李東輝(イートンヒ)などの初期の共産党がそれです。ただ、朝鮮国内で共産党がスタートするのは、一九二五年なんです。この第一次共産党が弾圧を受け

てつぶされ、翌年、第二次共産党ができる。有名な六・一〇万歳事件という大衆デモを組織したのが、この第二次共産党です。そしてまた、これがつぶされ、二七年に、先ほどお話ししたML党による第三次共産党が結成されるわけです。つまり、この時分になりますと、もう独立運動に対するヘゲモニーは、民族主義者の手から共産主義者の手に完全に移っているのです。当時、もっともよく活動したのは、やはり共産主義者たちです。だから、くりかえすようですが、朝鮮の共産主義者のモットーというのは、第一に日帝を打倒し、朝鮮独立を実現することだったのです。すなわち、共産主義者自体が、非常に民族主義的であったということですね。

B　朝鮮共産党再建運動の中で、日本の共産党員がそれに協力する。そういうことは、具体的にありましたか。

一般的にいえば、それ相応の援助は当然あったでしょう。しかし、当時の組織活動というのは、非常に秘密を要したのです。たとえば、街頭連絡一つにしても、五分と違わなかった。五分前にきて五分後になったら、そのまま帰ってしまうんです。日本共産党との連絡はありました。ありましたけれども、それは、前にも申しましたように、金致廷が主にやっていた。彼が日本共産党から、どういう援助を受けていたか、私は聞きもしなかったし、知ろうともしませんでした。お互いに必要もないことは知るまいというのが、同志間の原則だったからです。それは、もし逮捕されれば、ひどい拷問を

受ける。知っていれば吐いちゃいますよ。知らなければ、いくらたたかれたっていえないわけでしょう。だから、自分の領分以外は関知せずということです。直接連絡と上と下の連絡しかしない。あの頃は、そういう時代でした。

C　そういう危険な活動を続けていく中で、自分たちの独立、朝鮮の独立はできるのだという感じを持っていらしたのですか、当時……。

とんでもない。そんなことは考えませんでした。とにかく、これが正しいからやるんだ。そういう気持だけでしたね。私たちの運動で、日帝が倒れるとも思っていなかったし……。だけども、朝・日のプロレタリアートが団結して、ぜひとも日本帝国主義を倒さなければならないのだ。それだけを真面目に考えて動きました。金斗鎔なんかも、そういうことを一所懸命やったわけです。あの当時、まあ、いまもそうかもしれませんけど、日本にいる朝鮮人労働者というのは、自由労働者が多かった。朝鮮人単独で闘ってもどうしようもない。だから、その自由労働者の組合を、日本の全協に解消しようじゃないかと……。朝鮮共産党のブランチである日本総局も、それ以前にメンバーが捕まっていましたし……。一国一党の原則は、そこから出てくるんですよ。一国一党の原則に従って、日本にいる朝鮮共産党員は、日本共産党に加盟すべきであるし、組合運動もまた、日本の全協と一緒にやるべきだと。これを金斗鎔は、当時盛んにやっていたんです。すなわち、日本と朝鮮のプロレタリアートが

提携して、がっちりと手をとりあって日帝を倒すのだと……。それができるか、できないか。そんなことは考えない。ただ、それが正しいと思っていた。非常に純情な気持でね、本当に純情そのものだったと思います。

私が失望したのは、むしろ刑務所にはいってからでした。刑務所にはいると、取調べの過程で、同志たちのそれまでの生活が全部出てくるんです。ぼろがみんな……。そこで私は失望するんです。おれが一所懸命やったのに、この連中は、あんな不真面目な生活をしていたのか。ですから、刑務所を出てからの私の態度には、ある変化が起こったのです。口先でどんなに革命的なことをいっても、私は信じない。その男の生活が、本当に革命に価する生活なのかどうか。それを見届けないうちは、私は信じない。同志とは思わない。刑務所を出たあとで、そうした気持が非常に強くなっていることに、私は気がつきました。これが共産主義者に対して、私が初めて味あった失望でした。そして、第二の失望が解放後に訪れるわけですが、きょうはこのことについては、範囲外ですので触れません。ともあれ、あの当時は、非常に純情な気持でやりました。本当に命を張っていたんですからね……。

D　一九三一年夏に、ソウルで林和や金南天たちが逮捕されますね。金三奎さんの逮捕ともつながる、このカップの第一次検挙と共産党再建協議会の関係なんですが、文学史の記述をみると、林和たちはカップの運動の結果として、情勢の悪化にともない逮捕されたように書いてあります。それから、林和や金南天たちが東京にいた頃、第三戦線というのがあったというのですが、ご存じでし

ようか。メンバーは無産者社の同人と同じなんです。

カップと再建協議会は、直接的な関係はないんです。むしろ、こんなふうに考えたらどうでしょうか。林和や金南天たちは、東京において無産者社の同人であった。他方、再建協議会の上海からの使者は、無産者社を通して、いろいろな宣伝活動を行なった。高景欽はあの当時、ペンネームを使って、無産者社発行のパンフレットにも書いたし、『インタナショナル』などの雑誌にも執筆している。つまり、カップと再建協議会とは無産者社という媒体の上では、重なりあうということだと思います。ご指摘の第三戦線という名前は、私は存じません。しかし、それはたぶん間違いなく、無産者社のことを指しているのだと思います、メンバーが同じだとすれば……。これをカップと呼ぶわけにもいきません。だから、第三戦線という名前を仮りにつけたのではないですか。実をいえば、無産者社自身のプロ文学活動というのは、たいしたことをしていないわけですよ。一、二冊、雑誌を出したぐらいでね。党再建協議会事件に巻きこまれた結果、有名になってしまったんです。また、帰国した無産者社の同人たちが、林和や金南天たちのように、非常に優秀なメンバーだったということがある。彼らがソウルで活躍することによって、無産者社のかぶがあがったわけですね。

E　カップと再建協議会とは直接的なつながりをもっていなかった。それに関連してですが……。金三奎さんの場合には、無産者社を代表する形で、再建協議会とのコンタクトをとられたわけです

ね。ということは、そのことを、林和たちには知らせなかったということですか。

そうです。林和や金南天たち、彼らは文学者でしょう。文学者の立場にいて、それ以外のことは、あまり知らなかったわけです。だから、自分たちは無産者社という場所で、プロ芸術の研究などをやりました。党再建なんて、とんでもありません。自分たちはなにも知りません。捕まった時に、彼らはそれで通ったんですよ。事実、潜入してきた再建協議会の連中は、私だけに打ち明けてくれたわけです。つまり無産者社の他の同志たちは、事実上なにも知らなかったのです。先ほども申しあげましたように、当時の運動の仕方というのは、そういうものでした。自分に関係したこと以外は、知ろうともしなかった。なまじ知っていれば、特高にたたかれて吐きますからね。林和たちのほうも、私になにも聞かなかったし、私のほうでも、彼らを関係させなかった。高景欽たちにしても、彼らはやはり文学関係の方面で働いたほうがいい。そう思っていたんじゃないですか。もちろん、ある意味では林和たちは知っていますよ。ほら〝オヤジ〟が動き出した。あの頃は党のことを〝オヤジ〟と呼んでいました。非常に信頼あるものとしてね。で、自分たちはなにをなすべきかと。みんな、それぐらいのことは考えます。お前は国へ帰って、ああやれこうやれ、ということではなく、そこは自発的にやりますよ。そのぐらいの自覚は、当然みんなもっていましたから……。

E　林和や金南天たちと、当時の日本の文学者たちとの関係はあったんでしょうか。

組織的にどういうことがあったのかは知りませんが、接触があったのは、いわゆるナップ（全日本無産者芸術団体協議会）関係の人たちですね。中野重治、窪川鶴次郎、村山知義といった……。そうした人たちとは、しょっちゅう付き合っていたと思います。おそらく、林和や金南天たちにとって、無産者社における活動よりも、そういう日本のナップ関係者との交友のほうが、影響がずっと大きかった。彼らにとっては、文学の上で非常に役立っているのだと思います。私の個人的なことをちょっと話しますと、これはもう一九三六年のことなんですが、ナウカ社発行の『文学評論』に、私は「張赫宙論」を書いたことがあります。この原稿に目を通してくれたのが、中野重治さんです。

D　朝鮮芸術座の弾圧の時には、作家の金史良も捕まっていますが、金史良との関係については、どうでしょうか。

私は当時の金史良を知らないのです。朝鮮芸術座にはいろいろの部がありました。けれども、全員が集まるということは、めったになかったのです。やはり、警察の目がうるさいですからね。金史良はあの頃、小説をどしどし書いていましたし、そんなに熱心に会合に出てきたとも思いません。その頃の金史良については、私にはまったく記憶がないのです。ところが、あれは一九四三年頃だったかなあ。私が江原道で牧場をやっていた時だから。ソウルに用事があって、弁護士の友人のところへ立ち寄った時、たまたまそこに金史良がきていました。それで、お互いにやぁーとかいって挨拶しあっ

た。名前はお互いに前から知っているんだけど、実際に付き合ったことがなかった。始めて名前を名乗りあったのが、その時でした。考えてみると、金史良は私にとって直系の後輩なんですね。彼は私と同じ東大の独文科ですから。彼はあの頃、平壌(ピョンヤン)にいて、なにかの用事があって、ソウルへ出てきていたのでしょう。愉快に話し合ったように思うのですが、さてなにを話したのか。もうなにも記憶がございません。金史良に関する私の思い出というのは、たったそれだけです。

F　崔承喜について、なにか思い出がありますか。

あれは大正末か、昭和初年頃だったと記憶しています。私がまだ中学の後学年か、東京高等学校時代だったと思いますね。朝鮮の舞い姫を見にいこうということで、兄貴たちに連れられて、帝国ホテルの演舞場へ出かけたことがあったんです。その舞い姫が崔承喜で、たしか踊ったのが「ペールギュント」でした。非常に美しかったことは、いまでもよく憶えています。彼女がデビューしてそうそうの頃だったんですね。そののち崔承喜は、ソウルで安漠と結婚している。安漠とは無産者社の同志でもあり親しかったのですが、私は個人的には、崔承喜と会う機会がありませんでした。安漠は北京で四五年の解放を迎え、延安の独立同盟と連絡をとって、北朝鮮へはいっていった。その後、安漠と崔承喜は一時、ソウルに帰ってきたことがあったのです。しかし、解放直後の混乱期でもあり、踊りをおどれるような状況ではありませんでした。また、皇軍慰問といったこともあって、ソウルでの彼女

の評判はよくなかったのです。そうした事情のところへ、北からのさそいがあって、二人は北朝鮮へ去っていったわけです。

E　朝鮮芸術座の事件で、同じように検挙されている詩人の金竜済（キムヨンジェ）については、ご記憶がございますか。

朝鮮芸術座時代の金竜済については、私は個人的なつきあいがありません。彼はずっと日本にいて、詩を書いたりしていたわけですね。その間、私は一度も会ったことがないのです。むしろ、彼に会ったのは戦後です。それも釜山（プサン）で会っている、たった一回……。朝鮮戦争の時のことです。なんで会ったのか、なにを話したのか。なにも憶えていません。しかし、彼が私に対して、非常になつかしそうに話しかけてきた。その彼の話しっぷりについてだけは、いまも憶えています。金竜済は日本の皇民化政策が進む中で、いわゆる〝文筆報国〟をやったわけね。御用雑誌の『緑旗』などにいろいろ書いていた。それはあの時代に、なまじっか文筆を持っていたら、協力させられますよ。しかも、彼はなかなか才能もありますしね。その〝文筆報国〟のことが私の頭の中にあった。だから、彼をあまり歓迎しなかったんじゃあないかなあ。私のほうでは、朝鮮芸術座時代の彼を知らないから、思い出深い人間というふうな感じはないわけです。ともかく、金竜済が朝鮮芸術座に関係していたことについては、きょう皆さんから始めてお聞きしたようなしだいです。きっと彼のほうでは、朝鮮芸術座時代の

私を知っていて、昔の仲間という気持だったのかもしれませんね。もしそうだとすれば、少々気の毒なことをしたように思います。

## 3

一九四五年八月十五日の解放以後のことにつきましては、現在では、韓国の歴史にしても、あるいは北朝鮮の歴史にしても、すでにたくさんの本が書かれております。したがって、そうした系統だった歴史的事実に関しては、私がここで、改めて説明する必要はないように思います。ただ、解放前後から、私が日本へ来た五一年の秋まで……、正確にいいますと、九月二十三日に私は日本へまいりましたが、この間の時代というものは、本当に激動期でありました。そして私は、その渦中にあって、混乱と苦難に終始した韓国の世相を、目のあたりにしたわけです。そこできょうは、私が身をもって経験したいろいろな出来事、また、それにまつわる幾つかの四方山話といったものを、むしろエピソード風に話してゆきたいと思っております。

朝鮮が解放されることを、私が知ったのは、八月十二日のことでした。前回のお話の中で申しましたように、私はその頃、江原道の原州(ウオンジュ)でブタの牧場をやっていました。たしか、その一日か二日前頃に、私はちょうど用事があってソウルへ出向き、十二日の夜に宋鎮禹(ソンチンウ)さんの家に寄りました。宋鎮禹さんは『東亜日報』の二代目の社長だった人です。四〇年八月に、『東亜日報』が総督府の命令で廃刊せしめられたあと、まあ、一種の浪人生活を送りながら、宋鎮禹さんは来たるべき時に備えていた

わけです。私と宋鎮禹さんとの出会いというのは、金俊淵（キムチュンヨン）の紹介によりました。彼は第三次共産党の書記長だった男で、東大の先輩でもあるし、同じ郷里の霊岩（ヨンアム）出身でもあり、私の親戚にもあたっていた。この金俊淵が、宋鎮禹さんと非常に懇意にしていたのです。そうした関係から、私は宋鎮禹さんと親しくなり、ソウルへ出かけた時には、いつでも家へ寄ることにしていました。

で、十二日のその日に、宋鎮禹さんのところへ行きますと、戦争はもうお終いだといわれたんです。この頃になると、総督府は敗戦の事態に備えて、治安維持を委嘱できる人間を物色していた。そして、白羽の矢を宋鎮禹さんに立てて、交渉にきたのです。それが十二日の晩ではなかったかと思います。宋鎮禹さんは、自分はとてもその任ではないといって断わった、ということでした。皆さんはラウレルという人を知っていますか。日本の占領時代に、フィリピンで大統領の地位にあった男です。フィリピンが米軍の手で解放されたあと、ラウレルは日本の協力者ということで、監獄に放りこまれています。つまり、もうすぐ日本が負け、連合軍が朝鮮へはいろうというのに、なにもラウレルの二の舞いをやる必要はないではないか。宋鎮禹さんの肚の中には、そういう考えがあったのだと思います。

宋鎮禹さんが要請を断わったあと、次に誰を選ぼうかということで、総督府は金俊淵のもとへ相談にきた。けっきょく、呂運亨（ヨーウンヒョン）に話が持ちこまれたわけです。呂運亨は幾つかの条件を出した。たとえば、刑務所にいる全政治犯を釈放すること。また、放送新聞などの機関を譲り渡すことなど……。その条件を総督府側が呑んだものですから、彼はこれを引き受けました。八月十五日の早朝、呂運亨は総監官邸に赴き、交渉が成立したといわれております。そして、解放となった翌日の十六日、呂運亨

は建国準備委員会を発足させたのでした。三十六年もの長い間、植民地支配下で苦しんできたのです。建国準備委員会の発足がラジオで発表され、事が進められていくに従って、これに対する朝鮮人一般の同調というものは、大変なものでした。そのうちに、各郡に建国準備委員会の支部が生まれる。もう非常な勢いで、運動が広まっていきました。

ところで、この間に宋鎮禹さんのほうは、どうしていたかといいますと、そうした動きには同調せず、ひたすら国民大会準備委員会の組織編成に取り組んでいました。宋鎮禹さんの考え方は、こういうものでした。われわれが解放になれば、まず第一に国民大会を開かねばならない。その場において、今後の国の方針を決めるべきだと。建国準備委員会のほうは、呂運亨、安在鴻(アンチェホン)などの知名人が中心になり、治安維持にあたる保安隊をつくって、旧日本の各機関を接収したり、財産を没収したりして、着々と体制を整えていきました。要するに、一つの政治勢力、権力機構をつくる上では、先手攻勢という面において、呂運亨たちの動きは、非常に効果があったと思います。そういう具合いで、解放後のソウルは、異なった二つの政治路線が鎬(しのぎ)を削り始めていたわけです。

そこへもってきて、八月下旬になると、全羅南道の光州(クワンジュ)でレンガ工をやりながら潜伏していたという、有名な朝鮮共産党の書記長、朴憲永(パクホンヨン)がソウルへ上ってくる。朴憲永はあとで南朝鮮労働党、南労党の党首になりますが……。そして、この朴憲永の指導のもとに、がぜん共産党再建の活動が精力的に展開されていきます。もっとも、共産党自体も、当初は二派に分かれていました。解放直後、ソウルにいたいわゆる合法的存在といいますか、転向した者もいたわけです。また、そうでなくても、な

にがしかの活動をやっていた人たちですね。こういう連中が集まって、いち早く党を復活させたんです。このグループは長安派と呼ばれていました。ソウルに長安ビルというのがあり、そこで最初の会議を開いたからでした。そのあとに朴憲永がやってきて、別個に党再建の活動を始めたわけです。朴憲永派はコン・グループという名前で呼ばれました。コミュニスト・グループの略だと思います。そういうふうに、共産党は共産党で、いろいろな派閥抗争があり、その調整が進められていったのです。

宋鎮禹さんのほうは、国民大会準備委員会を押し進め、連合軍がソウルへはいる日を期して、国民大会を実現させようという構想を抱いていました。連合軍といっても、もちろん実質的には米軍が中心ですけれども……。その主力部隊の到着は九月九日でしたが、先遣部隊は、すでに二日前の九月七日にソウルへはいっております。米軍がやってくれば、軍司令官始め首脳部は、第一に朝鮮自身の現状を知ろうとして、いろいろ調査するはずだ。そういう予想を事前に立てて、宋鎮禹さんは、幾つかの手を打っていったわけです。初代社会部長官となった任永信(イムヨンシン)という女傑がいます。彼女は梨花女子大の総長をやり、その後中央大学総長を勤めて、現在はもう引退されましたが……。任永信はアメリカに留学した人で、たしか哲学博士の称号を持っているはずです。この任女史を朝鮮ホテルのウェイトレスに入れ、その他にも、英語の堪能な女性を複数配置しておいた。そうしておけば、米軍の将校たちが朝鮮ホテルを訪れた際、きっと交渉のきっかけができる。という想定のもとに、宋鎮禹さんは、いわば水も漏らさぬ手配をし、手ぐすねひいて待ち構えていたわけです。

そして、九日には、軍司令官ジョン・ホッジ中将がソウルにはいる。韓国では、ハッチというふう

に呼びましたが……。ホッジはすぐに、朝鮮の事情を詳しく知りたいと思った。で、いったい誰に会って聞いたらいいのか、ということですね。宋鎮禹さんの事前工作は見事に効を奏した。朝鮮ホテルでの交渉がきっかけとなり、任女史はもちろん、宋鎮禹さんの名前を挙げる。そんなわけで、ホッジ中将と宋鎮禹との会見が決まったのです。そこで宋鎮禹さんは、のちに初代外相になった張沢相（チャンテクサン）、彼はイギリスへ留学したことがあり、無論のこと英語はペラペラです。それにもう一人、のちに内務部長官を勤めた尹致暎（ユンチヨン）、やはり英語が達者な男でした。この両名を通訳に連れて、ホッジに会った。

会見にあたって、宋鎮禹さんが第一に強調したことは、李承晩（イースンマン）と金九（キムグ）を国内に呼んでもらいたい、ということでした。当時、李承晩のアメリカにおける評判というものは、あまりいいものではなかったのです。アメリカ国務省も、李承晩に対しては、二の足を踏んでいる向きがあった、といわれています。アメリカ側は、李承晩が韓国へ帰ることに、あまり好感を持っていなかったのです。ともあれ、宋鎮禹が李承晩や金九らの帰国を強く主張した理由は、次のようなことでした。植民地時代、国内にいた人間は、多かれ少なかれ総督府の政治に協力して、生きてきました。総督府が国民誓詞を斉唱しろといえば、みんなで斉唱しました。神社参拝をしろといえば、参拝もしました。ですから、いまさら国内にいた人間が、大衆の面前に出て、われこそは愛国者でございます、そんな大きなことを誰がいえますか。そういうことをいえる人は、刑務所にいた人間か、海外で独立運動をやっていた人たちだけです。この人たちならば、大衆の面前に出て、われこそは愛国者でございます、だから、私のいうことを聞きなさい、ということがいえます。そういう事情ですから、李承晩や金九をぜひとも帰国

させてほしいのです。彼らは長い間海外にいましたから、国内の問題はわからないかもしれない。しかし、実際の仕事はわれわれがやります。いずれにしても、われわれの代表として、一生を独立運動に費してきた人間が必要なんです。そういう人間をシャッポにかぶらなければ、政治はできません。大義名分が立たなければ、政治はできません。宋鎮禹さんは、非常に強硬にホッジを説得したのです。それでホッジ中将も、ついに合意し、本国へ連絡をとった。こうして、亡命先の米国から、李承晩が帰ってくることになりました。

李承晩がソウルにはいったのは十月十六日のことです。帰国するやいなや、李承晩は中央政庁で、彼一流の〝愛国者演説〟をぶったわけです。それから、金九、金奎植（キムキュシク）らの、重慶臨時政府の要人たちが帰国してきました。これが十一月二十三日で、ソウルは雪が降っていました。一行は、上海でチャーターした三台の飛行機に乗り組み、帰途についたのです。相当な人数でした。空港は大変な歓迎ぶりだったことを、記憶しております。臨時政府の一行は、帰国に際しては一つの組織にまとまっていたのですが、まもなく分裂してしまいます。内部にいろいろな派閥があり、これがそれぞれに自己を主張する形で、ちりぢりになっていったのです。とはいえ、李承晩・金九らの帰国により、今後の韓国の行方を左右する〝大立者たち〟は、政治の表舞台の上に、すべて一堂に会したといえましょう。これは少し余談になりますが、李承晩や金九らの帰国後の面倒、生活上のいっさいの手配は、宋鎮禹さんがあたられたのです。それはもういたれりつくせりでした。その後の韓国政治の動向を想うと、私にはいまだになぜか、そのことが、大変に皮肉なことのような気がいたします。

話をまた、左派の建国準備委員会のほうに戻しますが、八月下旬にソウルに上ってきて活動を開始した朴憲永は、すぐに呂運亨と手を結んだのです。そして、九月六日、京畿女子中学の講堂において、共産主義者熱誠者大会を開催し、朝鮮人民共和国樹立を宣言しました。主席李承晩、副主席呂運亨、国務総理許憲(ホホン)、内務長官金九……。そういった大物の顔ぶれをすべて並べたてて、鍾路(チョンノ)の和信百貨店の壁に張り出したわけです。それをみて私は、非常なショックを受けました。いったい政府というものが、こんなふうに、たった一晩ぐらいの間につくれるものなのだろうか。何千人の〝熱誠者〟が集まったかはしらないが、勝手に人民共和国発足を宣言し、これをもって、新しい政府機関であるとする。しかも、その政府首脳部を任命したのは、呂運亨や朴憲永です。いったい誰が彼らに、任命権をゆだねたというのであろうか。このやみくもに政治権力を握ろうとする、呂運亨らの強引なやり口に、私は深い疑惑と不信をおぼえました。

当時の私の立場は、前に述べた宋鎮禹の政府構想に近いものでした。つまり、できる限り各界の人材を集めて、国民大会を開く。この国民大会を基にして、国民の代表者を選び政府樹立を図ることです。要するに、呂運亨や朴憲永たちの考え方は、とにもかくにも自己の権力機構をつくっておき、アメリカ軍がはいってきた時に、これを一つの既成事実として押しつける。そういう意図だったのだと思います。

ところが、ソウルに着いた米軍のほうは、独自の政治方針をもって韓国人にのぞんできたわけです。すでに八月中に、ソ連軍は平壌(ピョンヤン)にはいっており、北のほうでは、着々と彼らの政治路線が進められつ

つあった。米軍側の態度には、この影響もむろんあったはずです。日付けを追って説明しますと、九月六日に、朝鮮人民共和国樹立が宣言され、九日に米軍がソウルへはいる。そして、十九日には、米軍政が正式にスタートするわけです。スタートにあたって、米軍政府は声明を発表します。すなわち、政府を代行するような、いっさいの民間団体や組織は認めない。南朝鮮における唯一の政権は米軍政府であり、それ以外のいかなる権力機関も、これを認めないと……。当然、この米軍政府の声明に対して、共産党を中核とする人民共和国派の左翼は、激しく反撥しました。その頃、米第二十四軍の司令部が、バンド・ホテルに置かれていたのですが、ここへ毎日のように左翼のデモ隊が押しかけ、抗議行動が繰り拡げられたわけです。

一方、九月十六日には韓国民主党が結成され、宋鎮禹がその首席総務の任につきます。二十四日には、安在鴻を中心に国民党が発足する。また、米軍政府の方針をみて、呂運亨は方向転換をはかり、十一月十一日に朝鮮人民党の結成に踏み切ります。さらに、帰国した金九らが韓国独立党をつくる。そうした経緯をたどりながら、米軍政下にあって、韓国では多くの政党が相次いで生まれていった。そして、軍政以後に訪れるであろう政権の奪取をめざして、深刻な対立抗争に明け暮れていったのです。

ここで私個人の話を申しあげますと、朝鮮人民共和国樹立が宣せられた直後、かつての同志であった林和(イムファ)と会い、話し合ったことがあります。当時の林和は、朴憲永と緊密な関係にありましたから、林和を通して、朴憲永のあまりにも性急な行動に、ブレーキをかけようと思ったのです。けれども、

林和は聞きいれませんでした。二人の間には、すでに深い思想の溝が生じていたのです。私は自分の道を選ぶと彼に告げ、その年の十二月『東亜日報』が復刊されるのを機会に、入社することにしました。ただ、この会見が林和との最終の別れになりました。ご存知のように、林和はその後、北朝鮮政権の要職につきましたが、朝鮮戦争休戦後の五三年八月に、米帝のスパイという汚名をきせられ、李承燁らとともに粛清されてしまいましたから……。

そこへもってきて、十二月二十七日に、モスクワで行なわれた米英ソ三国外相会議の決定として、朝鮮を向こう五カ年間、信託統治するというニュースが伝わってきたのです。このニュースがもたらしたショックは大変なものでした。日本が敗れ去ったいま、朝鮮はただちに独立するのだと、誰でもが思っていたからです。しかし、最初は熱烈に反対していた共産党が、信託統治に賛成するという局面が出てきて、左右対立はいっそう激しくなり、韓国の社会はますます混乱の様相を深めていったのです。

それで、信託統治案の内容はといいますと、全朝鮮を代表する朝鮮臨時政府を成立させ、この政府を米英中ソの四カ国が、いわば後見役として指導していくというものでした。具体的に臨時政府を、どのような形で樹立させるかといえば、南北の軍政府、つまり、米ソの代表が、三週間以内にソウルで会談して決める。これが臨時政府樹立に至る準備段階であり、三相協定の付属条項として定められていました。そして、四六年の一月十六日に、スチコフ大将がソ連側代表として、ソウルへやってくるのです。米ソ両国の会談は、二月六日まで約三週間にわたって行なわれました。なにしろ、全朝鮮

の臨時政府をつくるわけですから、三十八度線の軍事境界線をどうするのか、郵便物の交換、人の往来はどうしたらよいかなど……。解決しなければならない、いろいろな問題があったわけです。

さて、米ソ会談が続けられているこの期間、ソウルばかりではなく、南朝鮮全体をゆるがす、非常に大きな政治のうねりが生じていたのです。いうまでもなく、それは信託統治反対という叫びでした。もうすぐにも、われわれは独立するんだと思っていたところへ、まるで冷水を浴びせられるような形で、突然に信託統治が持ち出されてきた。したがって、民族感情としては、どうしても容認できない。韓国人の心情として、それは当然だったと思います。共産党の場合も、当初は信託統治反対だったのですが、ソ連がこれに賛成している以上、反対することができず、急遽賛成に切りかえました。解放後、急速に勢力を延ばしてきた共産党は、この信託統治賛成によって、ある種の停滞と失望感を生じさせ、党員自身の中にも、少なからぬ動揺が起こったようでした。ともあれ、共産党を除いた韓国のすべての政党が、信託統治反対を主張しました。

ところで、宋鎮禹さんの場合はどうかといいますと、冷静に事態を受けとめていました。信託統治実施のニュースが流れた、二日後の十一月二十九日早朝、宋鎮禹さんは金九のもとへ赴きました。金九は信託統治反対の最強硬派でした。宋鎮禹さんは、一日中説得にあたったのです。金九さん、信託統治を受けましょう。これを受けなければ、朝鮮の統一はできません。いまの時点では、米ソが決定した信託統治に逆らって、朝鮮の独立を達成することはできません。五年間という期間は長いようですが、すぐに経ってしまいます。宋鎮禹さんは、中国の孫文を非常に尊敬しておりました。孫文は一

九二四年に発表した「建国大綱」の中で、国家建設の過程を、軍政期・訓政期・憲政期の三つの時期に分けているのです。軍政期とは革命的独裁の期間であり、やがて憲法が布かれ、近代的な市民社会が生まれる。孫文は当時の中国がおかれている状況を考慮して、この両者の間には、訓政期という過渡期の期間が必要である、と考えたのです。つまり、憲法が実施される以前に、一つの段階を設け、これを国民を訓練する期間、訓政期と名付けたわけです。

宋鎮禹さんは金九に向かって、この孫文の考え方を伝えたのでした。金九さん、信託統治期間を、朝鮮における訓政期にしようではありませんか。われわれは長い間植民地支配下にあって、独立国の国民としての訓練をしたことがありません。ですから、この信託統治期間を、国民教育の訓練期間とする。すなわち、訓政期にしようではありませんかと……。もう口をすっぱくして説得したのですが、金九は頑として応じませんでした。

その日私は、たまたま宋鎮禹さんの自宅におりました。夕方になって、帰宅した宋鎮禹さんは、疲れきった表情で長嘆息をつきました。ああ、少し早かった！　それが一日中説得にあたった、宋鎮禹さんの悲痛な結論でした。そして翌日、宋鎮禹さんはピストルで狙撃され死ぬわけです。もし私も一緒に泊っていたら、当然殺されたでしょう。殺した男は、金九が放った刺客でした。

宋鎮禹の死は、解放後の韓国にとって、取り返しのつかぬ損失であった。そう私は思っています。なぜならば、李承晩や金九に、あえて苦言を呈しえたのは、宋鎮禹さんただ一人だったからです。李承晩にしても金九にしても、自分が大統領に、副大統領になろうと思っている人間です。宋鎮禹さん

のように、地位や顕職を求めず、自分は表面に立つことなく、ひたすら地道な仕事を推し進めていける人間。しかも、対立する相手に対しても、あくまで情理を尽くして説得にあたり、その調整をはたしうるような存在は、他には誰もいませんでした。その宋鎮禹さんが斃れてしまったのですから、要するに、ブレーキを欠いた車と同じことですね。信託統治反対の波は、滔々として南朝鮮全土を、燎原の火のように拡がっていきました。

こうした南朝鮮の状況を、北からきたソ連軍政府代表のスチコフは、ソウルにあってつぶさに目撃したのです。これでは、信託統治による朝鮮の統一は、とても望めない。臨時政府の成立は至難であると。スチコフは、即座に判断をくだしたのだと思います。米ソ会談は具体案の協議にはいれぬままに散会します。そのたった二日後の二月八日、北朝鮮臨時人民委員会が成立し、金日成(キムイルソン)が委員長の地位についているのです。おそらく、北に戻るやただちに、スチコフは金日成に向かって、人民委員会の発足を命じたのでしょう。名称は臨時と名乗っていますが、これは明らかに、独自な政府機関の創設です。つまり、ソ連側はこの段階で、すでに全朝鮮の統一臨時政府をつくることを、断念したとみなせるわけです。発足した北の人民委員会は、土地改革を始めとして、重要産業の国有化、労働令の発表など、次々に新しい政治方針を打ち出し、自らの体制を固めていきました。一方、南でも同じ八日に、右派の李承晩・金九らが大韓独立促成国民会を結成。これに対抗して、左派は十五日に、朝鮮民主主義民族戦線を成立させます。朝鮮は南北分離の様相を、しだいに明白にしていく中で、韓国内の左右対立も、いよいよ激しさを増していったのです。

朝鮮がこのような混迷状態にあった三月二十日、第一回米ソ共同委員会がソウルで開催されます。ソ連側の主張は始めから、信託統治に反対する団体は、臨時政府樹立の構成メンバーからはずす、協議の対象としないという線を、はっきりと出してきたわけです。これに対して、アメリカ側は、いや、それは言論の自由に反すると反駁する。アメリカ側としても、先のモスクワ三相会議で信託統治を決めているのですから、信託統治反対の動きについては、心よく思っているわけではない。しかしながら、ソ連側の要求を呑んで、信託統治反対の勢力を排除すれば、アメリカの立場、地盤がなくなってしまいます。韓国における錚々（そうそう）たる右派の連中は、すべて信託統治反対であり、賛成しているのは、左派の共産党だけだったからです。そこで、アメリカ側は、言論の自由という建て前論で、ソ連側に対抗したわけです。けっきょく、米ソ共同委員会は意見が折り合わず、五月六日にいたって決裂してしまうのです。

そして、五月十五日に、共産党紙幣偽造事件というのが起こりました。この事件は、紛失した紙幣の元版を使って、共産党がニセ札を印刷したというものです。事件関連者として、共産党幹部十四名が逮捕される。この紙幣偽造事件は、実は共産党弾圧の謀略だった、という説がありますが、詳しい事情は私にはわかりません。次いで、三日後の十八日に、共産党機関紙『解放日報』が停刊させられます。二十三日には、民間人の三十八度線越境が禁止になる。ここにおいて、南北の分裂は決定的となり、米軍政府の共産党排除の線が、はっきりと出てくるわけです。さらに、七月にはいってすぐ、ソウルのソ連領事館が撤収されております。

このソ連領事館のことで、ちょっと余談を申しますと、太平洋戦争時代にも、ソウルにはソ連領事館があったのです。ソ連と日本は中立条約を締結していましたから……。当時のソ連領事はサブシンという男で、たしか朝鮮に関する本を書いております。解放後まもなく、サブシンがまだソウルにいた頃、私は彼に会ったことがあります。宋鎮禹さんが、ある金持の邸へサブシンを招待して、一晩ご馳走したことがあったのです。その時にサブシンが酒に酔って、思わず口をすべらせてしまった。ソウルにおける自分の権限がいかに大きいかを、誇示したい向きもあったのでしょう。俺が口をきけば、朴憲永といえども……。そういうふうな口振りでサブシンが語ったことを、いまでも憶えています。

それで、宋鎮禹さんが、なぜサブシンを招待したかといえば、あくまでも、米ソの両方をおんぶしていかなければ、朝鮮の統一はできない。そうした見通しに立った上での、宋鎮禹一流の布石の一つだったわけです。米ソをおんぶするぐらいの気持がなければ、真の朝鮮独立は難しい。これが、宋鎮禹さんの変わらぬ持論でした。その意味でも、宋鎮禹さんは先見の明をもっていた、本当の政治家だった、と私は思います。宋鎮禹亡きあとの朝鮮の動向は、米ソをおんぶするどころではない。北はソ連におんぶし、南はアメリカにおんぶしてしまった。南北分裂の根本の原因は、そこに生じたといってもよいでしょう。

さて、七月二日に、ソ連領事館がソウルを引揚げてしまったあと、ほどなくして、左派の人民党党首呂運亨と、右派の金奎植との間で、左右合作の話し合いが行なわれます。日を追ってエスカレートしていく左右対立の激化を、なんとか緩和しようとする試みだったわけです。アメリカの軍政府にし

ても、左右両派の抗争を沈静化したい意向は強かった。北が着々として体制固めをしているのに、南だけが混迷状態を続けていたのでは、対外的にも困るからです。そこで、左右両派の中で、比較的柔軟な姿勢にある、呂運亨と金奎植に働きかけた。金奎植は重慶臨時政府の要人だった人ですが、非常に温厚な人柄で、教養も高い人でした。米軍政府の意向もあって、両者は話し合いにはいったのですが、成果はえられなかったようです。なにしろ、左右の対立抗争が激しくなっていく最中であり、そうした中間派の動きというものは、なかなか実りません。理性的な判断よりも極端な行動のほうへ、人心がなびいていってしまうんですね。一種の時代の勢いというものなのかもしれません。そんなふうに、多少の流動状態はありましたが、結果は左右両派の分極化が、いっそう進むだけでした。

九月五日に、人民党・新民党・共産党の左翼三党の合同が発表されます。新民党というのは、中国の延安にあった朝鮮独立同盟が、帰国したのちに、そう改称したのです。新民党の中心勢力は北にあったのですが、南にも支部の形でグループがいたわけです。要するに、南朝鮮にあっては、米軍政府の政策もあり、いわゆる右派の政権体制がじょじょにできあがっていく。これに対抗していくためには、やはり左翼も大同団結しなくてはならない。そういう事情もあったでしょうし、北の動きに対応せんとした側面も指摘できます。北においては、八月二十八日に共産党と新民党が合併して、北朝鮮労働党が結成される。つまり、北に先手を打たれてしまったので、南のほうでも、左翼の三党が一緒にならざるをえなかったという……。しかし、南朝鮮労働党、普通は略して南労党といいますが、これが結成されるのは十一月の末のことです。どうして、合併がそれほど遅れたかといいますと、三党

合同の発表がなされた直後に、朴憲永、李舟河(イーチュハ)ら共産党幹部の逮捕令が出されたからでした。
南朝鮮では、こうした共産党への弾圧に対して、抗議のゼネストが巻き起こります。九月下旬には、鉄道労働者のゼネストがあり、十月にはいると、慶尚北道の大邱(テグ)で〝人民抗争〟が開始される。警察署が占拠されるなど、大邱は一時無政府状態にまでなり、抗議行動は大変な盛り上りをみせます。軍政のほうは、戒厳令を布いて鎮圧に乗りだす。この時の暴動では多数の死傷者が出ました。そして暴動の波は、さらに南朝鮮各地へ波及していきました。ここにいたって、左翼勢力は、その全力をあげての抗争に突入していったわけです。逮捕令を受けた朴憲永は、ほどなくして北朝鮮へ逃れ、黄海道の海州(ヘジュ)を根拠地にして、南への指導を行なったといわれています。
いずれにしても、米軍政府が朴憲永らに逮捕令を発したことは、左翼勢力への訣別を告げる最後通牒でもあったわけです。もはや左右合作もなにもありはしません。南における共産党の存在は、非合法とみなされ、党員たちは地下にもぐってしまいます。十一月下旬になって、南労党が結成されましたけれども、事務所などにがんばっているのは、人民党・新民党系の連中だけで、旧共産党員たちは、全部姿を消していました。そして、左翼との完全な決裂と同時に、過渡立法議院が開かれ、軍政から民政への移行が発表されます。過渡とはいっても立法院ですから、各地方より代表委員が選ばれ、その数はたしか、九十名ぐらいだったと記憶します。この立法院で、四七年の一月十五日に、信託統治反対の決議がなされたわけです。いかに南では、反信託統治一本で固まってしまったかが、これでよくわかると思います。二月五日、呂運亨とともに建国準備委員会を始めた安在鴻が、初代民政長官に

任命されました。こうして、南における民政への移行は、曲りなりにも成立をみたわけです。もちろん、南労党への弾圧は引き続き行なわれ、これに対する反撃が、ゼネスト・暴動の形で頻発し続けました。

他方、目を転じて、北のほうはどうかといいますと、二月二十一日に、第一回北朝鮮人民会議が開催されています。ここで、北朝鮮人民委員会を正式に承認する。つまり、南と比較すると、こうした面では、北のほうがはるかにちゃんとした体制固めができていたわけです。

とにかく、四七年の二月段階で、北には共産主義政権が、南にはいわゆる自由主義政権が誕生しておりますす。その意味では、南北の分裂は決定的な状態に、逆戻りのできない地点にきてしまっていた。そういえるように思います。ところで、五月にはいると、第二回米ソ共同委員会が、ふたたびソウルで開かれるのです。これは、朝鮮の分割が固定化されていくことに対して、国際的にも国内的にも、依然多くの批判が生じていたからです。それで、会議を開く前に、米ソもいろいろ話し合いをして、合意点を捜そうとしました。たとえば、いままで信託統治に反対していても、今後反対しなければ、統一臨時政府参加の協議対象にする。そうした妥協案を用意して再開したのですが、もう事態は進むところまで進んでしまっている。そんな小手先の妥協案では、どうにもなるものじゃあない。七月には、場所を平壌に移して、米ソはなお話し合ったのですが、けっきょく、物別れに終わるしかなかったのです。しかも、悪いことには、七月十九日に、左翼の調整役でもあった呂運亨が、暗殺されてしまうのです。

当時の騒然たるソウルの雰囲気を思いかえしてみますと、その年の八月十五日に行なわれた解放式典の一情景が、いまなお強く印象にとどめられています。南山（ナムサン）で催された式典には、米ソ共同委員会の代表も列席しました。アメリカ側代表のブラウン少将が、演壇に立って挨拶したのです。まあ、民主主義の立場、あるいは言論の自由といったことを、しきりに強調したわけですね。そうしたら、突然ヤジが飛んだのです。そんな民主主義が韓国のどこにあるか！　まったくそのとおりでした。ブラウンは真っ蒼になって、非常に怒りました。この時の模様を記した論文が、雑誌『世界』に載っていたと思います。たしか「南朝鮮の運命を決した夏」といった題名でした。その論文によれば、八・一五解放式典をみて、朝鮮の南北分割の悲劇を予感したかのごとくに書かれている。だから〝運命を決した夏〟なんですね。

しかし、そのずっと以前に、南北の分裂は始まっていたのです。四五年の暮れに信託統治の決定が出て、これに反対する叫びが、南朝鮮全土に澎湃として起こった。その時点で、統一臨時政府樹立はもう難しかったのです。四七年の段階では、くりかえしますが、それがだめだということは、すでに決定されていたと思います。米ソ共同委員会は開かれましたが、これはむしろ申しわけ的なもので、われわれはこれほどまでに努力しました、そういう態度を外に示すものでしかなかった。米ソ双方ともに、統一朝鮮が達成できるという希望をもって、共同委員会に臨んだわけではなかったのです。要するに、朝鮮の分割を合理化するといいますか。どうにも仕方がありませんということを、まるでみんなに理解させるために、開いたようなものだったのですね。

米ソ共同委員会が行き詰ったのち、九月十七日に、国連総会が開かれました。この国連の場で、アメリカのマーシャル国務長官が、朝鮮問題を提訴したのです。もはや米ソ双方の力だけでは、朝鮮問題はとても解決できない。国連の力で解決してもらいたいと……。ソ連の強硬な反対をよそに、米国の提案が通ります。そして、十一月十四日、臨時朝鮮委員会設置案が、四十三対六の絶対的多数で採択されたわけです。国連派遣の朝鮮委員会の監視下で、全朝鮮の選挙を実施し、統一政府樹立を実現するというのが、設置案の具体的内容でした。

翌年の四八年一月八日、国連朝鮮委員会のメンバーがソウル入りをします。当初、委員会は九カ国で構成されていたのですが、ソ連圏のウクライナが参加せず、ソウルにきたのは八カ国でした。まあ、いろいろ会議があって、協議が尽くされたのですが、国連朝鮮委員会には、始めから障害が横たわっていたといえます。第一の障害は、北との問題でした。国連での決議にソ連が反対したのですから、北はむろんのこと、朝鮮委員会の要請を拒否しました。したがって、全朝鮮の選挙というものは、もともと実現不可能だったんですね。しかも、それだけではなく、南朝鮮においても、困難な問題にぶつかってしまった。左翼が北の立場に同調して、ボイコットの態度に出たのは当然ですが、右派の内部からも、強力な反対運動が起こってきたのです。国連朝鮮委員会は、北の拒絶にあったため、南朝鮮だけの単独選挙という線を考えたのですが、これに対して、金九・金奎植らが反対意見を表明しました。単独選挙に賛成したのは、李承晩と韓国民主党でした。このように、韓国内の意見さえ二つに分かれているので、国連朝鮮委員会としても、処置に困ってしまったわけです。

そこで、委員会の代表であったインドのメノンは、ここに至っては、国連小総会に図る他はないと判断しました。メノンはニューヨークに戻り、国連に向かって、朝鮮の実状を訴えたのです。その結果、二月二十六日に開かれた国連小総会は、有名な〝可能地域における選挙〟という決議案を可決する。説明するまでもなく、北は〝不可能地域〟なのですから、これは要するに、南朝鮮単独選挙実施案ということですね。そして、来たる五月十日に、国連の監視のもとに、選挙が行なわれることになったわけです。

この決議案可決を聞いて、左翼勢力は全面的にこれを拒否し、激しい抗議行動を起こします。また、単独選挙に反対を表明していた金九は、南北協商会議の呼びかけに応じて、平壌に行きました。南から平壌へ乗り込んだ面々は、金九、金奎植、趙素昂（チョソアン）といった、かつての重慶臨時政府のメンバーたちでした。北のほうは、それまでは反動金九だとかいって、盛んに批判を浴びせていたのですが、そういう宣伝をいっさいやめ、非常に歓待したわけです。しかし、政治上の面では、金九たちは完全に利用されただけのようでした。四月十九日から開かれた平壌の南北協商会議で決まったことといえば、南朝鮮単独選挙反対、米ソ両軍撤退、朝鮮民主主義臨時政府樹立といったことです。それは、北がこれまでに主張してきたスローガンを、羅列することに尽きていました。金九はじめ他の面々も、たいした発言はなにもできず、共産主義者たちの剣幕に押しまくられたのです。非常にみじめな状態で、彼らは南に帰ってきました。同行した人間の中には、身の危険を感じて、逃げるようにして帰ってきた連中もおりました。

そうした多少の紆余曲折はありましたが、五月十日に、国連監視下の総選挙が行なわれます。七月一日、国号を大韓民国と決定し、十七日には憲法が発布される。二十日、国会が李承晩を初代大統領に選出します。そして、八月十五日の解放記念日を期して、大韓民国が正式に発足するのです。これに対して、北のほうは、九月八日に憲法を採択して、金日成を首相に選出。翌日の九日、朝鮮民主主義人民共和国樹立を宣言する……。かくして、南北分割の総仕上げが行なわれたというわけです。

しかし、大韓民国は発足しましたけれども、韓国内の騒乱はやむことなく続くのです。八月十五日の建国式典には、マッカーサーが来韓しておりますが、この返礼として、十月十九日に、李承晩が東京へ向かいました。ところが、その翌日に、全羅南道の麗水（ヨスー）・順天（スンチョン）地区で、軍隊の反乱事件が起こるのです。反乱を起こした軍隊は、済州島（ジェジュド）討伐の派遣軍でした。四月の始めに済州島で、単独選挙反対の武装闘争が発生し、警察の力では、とうていこれを鎮圧することができなかったのです。済州島には漢拏山（ハルラサン）という標高二千メートルに近い山があります。レジスタンス側は、この漢拏山を根拠地にしていて、追えばそこへ逃げこんでしまう。手薄な警察力では、どうにも手がつけられなかった。そこで、軍隊を送るより他に道がないということになり、済州島鎮圧軍が編成された。鎮圧部隊は麗水に集結し、船で済州島に出発しようとした。その日の明け方に、反乱が起こったのです。軍隊内にいた南労党系の軍人たちが、リーダーシップをとって蜂起したわけです。ただちに、政府軍の大部隊が討伐に向かい、やっとのことでこれを制圧しました。この時の騒ぎでは、死傷者四千名を越えたといわれ、大変な状況だったのです。討伐は一応成功しますが、追われた反乱軍の一部は智異山（チイサン）に逃げこん

でしまいます。智異山は全羅南道と慶尚南道の境にある、非常に険しい山です。いまでもうっそうたる森林地帯であり、人跡未踏のところもあるのです。智異山には、現在でもトラがいるという話です。済州島の武装闘争は、十一月にはいって完全に鎮圧されますが、智異山にもぐりこんだ反乱軍は抵抗を続けます。今度はゲリラ隊と化して、神出鬼没をくりかえしていました。

そんなふうに、非常に不安な状態が、ずっと続くのです。李承晩政府が樹立されてからというもの、治安上の不安は去ることがありませんでした。単独選挙に反対した南労党と、金九の率いる韓国独立党が一緒になって、陰に陽にゆさぶりをかける。同時に、ゲリラ活動も盛んに行なわれる。ですから、李承晩政府の予算の七割近くは、治安維持対策で費されてしまうわけです。これでは、政府とはいっても、ほとんど開店休業の状態です。民政などはなにもできなかった。韓国政府のやることは、治安対策に終始するありさまでした。人心は恟々として、身の置きどころに苦しむような悲惨な状況でした。だいたい四九年いっぱいは、治安上の不安が続きました。そして、五〇年の三月二十七日になって、やっとソウルで金三竜と李舟河が逮捕されるのです。二人は、南労党の韓国内における最高指導者でした。この時点で、南労党がつぶれるわけです。いずれにしても、金三竜・李舟河が逮捕されるまでの、韓国の治安状態というのは、文字通り紊乱状態と呼べるものでした。当時〝昼は大韓民国、夜は人民共和国〟とさえいわれるぐらいだったのです。

それでは、私自身のエピソードを一つ、申しあげることにします。それは、五〇年の三月二十二日

付で、私が『東亜日報』に書いた社説（注）のことです。当時私は、主筆を務めておりました。「不安と絶望を一掃せよ」というのが、社説の題でした。ただいまお話ししましたように、李承晩政府樹立後、共産党への治安対策、南労党弾圧は熾烈をきわめるわけですが、同時に、人権がさまざまな形で蹂躙されるのです。〝赤〟とさえいえば、調べもろくすっぽやらずにしょっぴく。そして、拷問する。人を殺しても、あいつは〝赤〟だから殺した、といえばそれですんでしまうのです。そういう大変な時代でした。だからこそ、私は「不安と絶望を一掃せよ」と題したのです。私はこの社説を書いてからというもの、いつなんどき、つかまえられるかわからない。三月のソウルはまだ寒いですから、ぶちこまれても困らないように準備をして毎日出社しました。治安当局も逮捕のつもりでいたらしく、各新聞社の論説委員を探訪して、あの社説をどう思うかといったことを、聞いて歩いていました。また、いわゆるその筋らしき連中が、東亜日報社の内外にうろうろしていて、それとなく目を光らせている。非常に緊張した雰囲気でした。

社説が載った二十二日の午前十時頃に、公報部から出頭命令がきました。ほら、おいでなすったという感じでしたね。私はすぐに辞表を書いて、社長に提出しました。公報部長官からのじきじきの呼び出しなので、社長と私と編集局長の三人が連れだって、公報部へ出かけました。編集局長だった張(チャン)仁甲(インカップ)は、六・二五動乱の時に北へ拉致されて、いまだに消息がわかりませんが……。出頭すると、公報部側がいうには、海外にも大きな影響力のある『東亜日報』が、こういう社説を書いてくれては、困るじゃありませんか、と抗議を受けたわけです。私は答えました。くさいものに蓋(ふた)をしたところ

で、問題が解決するわけではないでしょう。同席した編集局長が盛んにとりなしてくれたりしたので、それだけですみました。最後に公報部長が、きょうは『東亜日報』の幹部と、意見交換ができてよかったとか……。お世辞をいわれて、帰社しました。

けれども、内務部関係の内部探索は依然として続きました。どんな事情があったのか、幸いなことに逮捕命令は出ませんでした。でも、李承晩系統の与党筋からは、検察側に相当な圧力がかかったようでした。三月三十日になって、裁判所出入りの記者が伝えてきたのです。明日、呉制度検事が、あなたに会いたいといっていましたと……。呉制度は有名な思想検事です。覚悟していましたから、出向いたわけです。呉検事は自分で直接調べないで、書記にやらせました。その質問がふるっているんです。まず、あの社説は私自身で書いたのか、それとも、よそからの誘いがあって書いたのかと。文章を読んでみたらわかるでしょう。他人から書けといわれて書いた文章か、自身の心底からの叫びであるかは、一目瞭然ではないですか。私はいまだかつて、人から、こういうふうに書けとかああいうふうに書けとか、そんなことをいわれたことはありません。書記のつぎの質問は、あの社説を読んで、一般の人はどう思うでしょうか、というんです。一般の人がどう思うかどうかは、私にはわかりません。しかしながら、こういう反応はございましたと。実は、四月一日が『東亜日報』の創刊記念日なんですが、この記念日のために、副大統領の李始栄さんが七言絶句を寄せてくれたのです。その際に李始栄さんは、三月二十二日の社説を読んで、大変心強く思った。国民がみんなこういう気持であれば、韓国はなにを憂うることがありましょうか。今後ともますます健闘してもらいたい。そうい

う激励の意味の祝辞が届いていたのです。私はこの話を書記に紹介して、政府の要人が、かくのごとく共感の意を示してくれたことに対して、非常に嬉しく思いました、とやりました。書記の三番目の質問はこうでした。北はどう思うでしょうかと。北は非常に恐怖を感じるでしょう。大韓民国には、これほど言論の自由があるのかと思って……。それでは、外国はどう思うでしょうか。韓国が自らの民主化のために、懸命の努力をしているのだと思うでしょう。まあそんな具合いで、適当な返答をして、受け流していました。

すると、書記は最後に、どうして辞表を出しましたか、というんですね。当局側の調べは、そこまで行き届いているのか、と思いましたよ。私は答えました。たしかに、あの社説については行きすぎじゃあないかという意見もありました。しかし、私は何度も読みかえしましたが、少しも行きすぎだとは思いません。それで、私にわかったことは、自分の精神がいま非常にエキサイトしている。『東亜日報』は大新聞です。そんなにエキサイトした精神状態では、大新聞の主筆は務まりません。そう感じたので、私は辞表を書きましたと……。調べが終ったあとの、書記の話しぶりがまたふるっていました。実は、私もあの社説を読んで、あなたは大変大胆な人だと思いました。そこで、ぜひ一度お目にかかりたいと思っていたのです。きょうは、こういう形でお目にかかり、はなはだ恐縮のいたりです、と。そんなやりとりがあり、あとは一緒に昼食をご馳走になって、帰ってきたわけです。

あの頃の私は、年がら年じゅう、主筆の室に閉じこもって、いろいろのニュースを聞いたり、各種の新聞に目を通したりすることが仕事でした。そして、韓国の世相をじっと眺めていますと、ある種

の鬱積した感情が、どうしようもなく募ってくるのです。そこで、自分なりに考え抜いた上で、私は「不安と絶望を一掃せよ」という社説を書いたのです。私が自分の心に感ずるもの、純粋に感ずるもの、それは同時に、すべての人が感ずるものである。この心と心が通じあうところに本当の世論が形成されるのだということを、この時にしみじみと痛感しました。新聞社の社説というものは、読者のみんながいいたいことを代弁するものだ。みんなが心の奥底で感じていることを、ずばりその通り代弁できるか、できないか。そこが一番大切なのだということを……。

そうこうしているうちに、この年の六月二十五日、南北動乱、いわゆる朝鮮戦争が勃発したのです。はじめ三十八度線での衝突を聞いた時は、私などはあまり気にもとめませんでした。というのは、当時はしょっちゅう射ち合いがあり、小競合いを繰り返していたからです。この日の衝突も、いままでの小競合いに毛の生えた程度のものだろう。そうたかをくくっていたわけです。他に、もう一つの事情もありました。六月二十五日は日曜日だったのですが、二日前の二十三日からこの日までの三日間、第一線の将校たちに休暇命令が出ていた。時の韓国軍参謀総長は蔡秉徳（チェビョントク）といいましたが、第一線指揮官の慰労をかねて、三日間の休暇を与えたのです。蔡秉徳は日本の陸士を出た砲兵出身の男ですけれども……。そんなわけで、二十四日の土曜日、ソウル市街は休暇の兵隊たちでいっぱいでした。たまたまその日に、竜山（ヨンサン）の陸軍将校クラブが開設されたということもあった。将校連中は、夜っぴいて飲みあかしていた。連中の一部は、仁川（インチョン）にまでくりだして、飲んでいたのだそうです。ソウルの街が兵

隊の姿で溢れているさまを、私は目撃しております。翌朝早く、三十八度線で銃火が交わされる。ラジオを始め、あらゆる広報機関が緊急召集を呼びかけたわけです。ソウルにいた兵隊たちは、トラックであれ、乗用車であれ、ありとあらゆるトランスポーテーションを利用して、前線へ前線へと駆けつけていきました。私は、その騒々しい光景も目撃しております。

ですから、朝鮮戦争の勃発に関して、南が攻めこんだので、北はそれを受けて反撃した。そういう説がいまだにありますが、どこの国の軍隊が、自分たちの首都を、三日後に取られるような戦争を始めるでしょうか。二十五日に戦争が起こって、二十八日の朝、ソウルの市民が目を覚ましたら、もう赤旗がなびいていたというんですよ。前日の夜中には、すでに北の先頭部隊は、ソウル市内に突入しております。そんなバカげた戦争を、どこの国の将兵が始めるでしょうか。しかも、第一線の将校たちは慰労休暇で、戦闘配置を離れていたのです。だから、北の攻撃は、まったくの奇襲攻撃に等しかったわけです。南北動乱に際して、南北のどちらが先手をとったかは、あまりに明瞭だと、私は思います。

二十六日の朝になって、近所にいる友人が、私の自宅へ飛びこんできました。政府はすでに水原（スウォン）に移ったそうだ、というんです。いや、そんな話は聞いていない。私はまだ半信半疑でした。確かめてみようということで、金性洙（キムソンス）さんのところへ電話をかけました。金性洙さんは『東亜日報』の初代社長で、のちに副大統領にもなった人ですが……。ところが、留守です。社長のところへも連絡しましたが、やはり不在です。これはどうもおかしいと。そう思っているところへ、ちょうど、社からの迎

えの自動車がきました。途中で専務の家に寄って、社長の家には行かず、まっすぐ出社することにしました。そこではじめて、事態が深刻なことを知ったようなありさまでした。とにかく、新聞を出せるような状態ではありません。私は専務に、預金はどのくらいあるかと聞き、全部おろしてくるようにいいました。最低限度一ヵ月分でもよいから、社員たちに給料を渡してほしいと。社長が不在なので、私は社長代行として、そういう処置をとったわけです。それから、各自自由行動をとるように命じました。

一応のとるべき処理をし終わって、私が主筆室に坐っていると、専務の甥にあたる男が偶然にやってきたのです。彼は北京大学を卒業し、北京で長く暮らしたことがあり、中国の事情に詳しい男でした。あなたはどうして、のんきにこうしているのか。ぐずぐずしている時ではないでしょう。いま思えば、彼は中国での体験で、内戦の際にどのような事態になるかが予測したのかもしれません。どうもこうもないじゃないか。汽車は全部出てしまっている。朝七時に釜山（プサン）行きの急行が出て、後続の列車はもうなかったのです。妻子はソウルの自宅にいるのだし、いまさら歩いて、全南の郷里へ行くわけにもいかないだろう。そう私が答えると、彼がいいました。いや、婦女子は残っていてもかまわないんだ。しかし、あなただけは行かなくちゃあいけない。水原に政府が移ったというのだから、水原まで行ってみてはどうか……。なるほど、それも一理あると思い、私は彼の忠告に従うことにしました。

六月のソウルは暑いので、私はその時白服を着ていたのです。そこで、自宅へ引きかえし、普通の

背広に着換え、洗面道具一式をぶらさげて、単身水原へ行くことにしたわけです。ちょうどうまい具合いに、私は本を一冊出した直後でしたので、印税の金を二十四、五万ぐらい持っていました。また家には、郷里から送ってきたお米が、五、六俵ほどあったのです。それから、四月頃に、友人が一トラック分の薪(まき)を届けてくれたことがあり、使いやすいようにと割ったので、家中が薪だらけになってしまっていた。私は考えました。金も米も薪もある。十万ぐらいの金を家内に預けておけば、当分は食うには困らないはずだと。とにかく、家でじっとしていなさい。下手に動くな。私は二、三日したら、きっと戻ってくるから。そう家内にいって、家を出たのでした。まったく、私は迂闊だったのです。その時になってさえ、事態がどう進むかを、それぐらいの安易さでしか、考えていなかったのですから……。

私はその足で、もう一度社へ出向きました。すると、社長がひょっこり現われたので、一緒にソウルを出ることにしたわけです。この頃になると、ソウル北方の議政府(イチョンブ)の方角から、大砲の音が殷々(いんいん)と轟き、上空にはソ連製のヤク戦闘機が飛びかっていました。ヤクはミグの出る前のもので、非常にスピードの早い戦闘機です。車に乗りこんだのは、社長夫妻に私と常務の四人で、腕時計をみると、午後二時を指していました。漢江大橋を渡る際に、ヤクの機銃掃射を受け、車を降りて、一時難を避けるようなこともありましたが、やがて水原に着きました。お腹が空いたのでうどんを食べ、食堂を出たのが四時だったと記憶しています。ラジオの放送があって、アメリカが戦争に介入することを正式に決めた、というニュースを流していました。これでもう大丈夫だ、という気持がしました。水原の

知合いの家へ寄ると、その広い家が避難民たちでいっぱいです。坐るところもないような状態です。

これではしようがないので、また一行は車に乗って、天安まで下りました。途中で、国会議員の申翼熙さんと副議長の張沢相さんの乗った車と出会いました。二人の車は私たちとは逆に、ソウルへ向かおうとしていました。どこへ行くのかと聞くので、天安まで行きますと答えると、もう事は解決したんだから、このまま一緒にソウルへ帰ろうという。米軍の戦争への介入が、二人にとっては、事が解決したというふうに思わせたのでしょうね。あなたたちは国会議員なのだから、ソウルへ早く行きなさい。こっちは野人です。ゆっくり行くことにしますよ。そんな返事をして、私たちは天安まで下りてきた。その頃になって、雨が降りだしてきました。

ご承知のように、天安は温泉町なんです。ところが、雨に濡れた町並みがひどく薄汚なく感じられて、泊る気持がしませんでした。そこで、駅へ行ってみたのです。駅長が出てきていうには、大田へ行く下りの貨物列車がありますよ。よかったら利用してください、とすすめてくれました。ひとまず、自動車はソウルに帰すことにして、一行は貨物列車に乗り移ったわけです。列車が走りだしてしばらくすると、ひどいどしゃ降りになってきました。大田に着いた時には、もう夜中でした。ふとホームをみると、国防部長官の申性模が真っ蒼な顔をして、駅長室へはいっていくのがみえる。ふだんなら声をかけて話でもするんでしょうが、そういう雰囲気ではない。非常に興奮した様子で、深刻な表情だったのです。まあ、申性模は国防の責任者だから、戦局の模様を知っていたのでしょうね。

とにかく、ものすごいどしゃ降りです。どこへも行くことができません。仕方なく、待合い室で時

間をつぶしていました。そのうち喉が渇いたので、社長が駅長室にお湯をもらいにいった。社長がいったほうが、待遇がいいだろうってことだったのです。案の定、旅客主任がわざわざやかんをさげて、お湯をもってきてくれました。礼をいって、四人がお湯を飲んでいると、旅客主任がいいます。これから、釜山へ発つ汽車があるから利用されてはどうですか。この汽車が出てしまえば、あとはありませんよ。一行は相談した上で、釜山へ行くことに決めました。私としては心外でした。なにも釜山くんだりまで行くつもりで、家を出たわけじゃあないわけです。妻子をソウルに残してきていますし……。だから、なんとも奇妙な気持でしたが、自分一人残るわけにもいかない。けっきょく、私も釜山へ行くことにしたのです。汽車に乗って一眠りし、目を覚ますと、まだ同じ大田なんです。汽車は動いていなかったんですね。明け方になって、やっと汽車が動き出し、釜山へ着いたのが二十八日の午後三時半頃でした。

釜山には、社長の奥さんの実家があるので、とりあえずそこへ行って夕飯を食べた。ところが、ラジオをひねると、平壌なまりの放送が聞こえてくるではありませんか。あの時は、がーんと頭を殴られたような気がしました。ソウルはすでに、北の軍隊に完全占領されていたのです。放送の内容を聞いていると、言論人はみんな、ひっくくられるようになっていることもわかりました。あの晩ほど、私は後悔したことはありません。一晩まんじりともできませんでした。自分の妻子に対して、本当に申し訳ないことをしてしまった。悲痛な気持が募ってきて、もうどうにもならないのです。悶々の中で一夜を明かしました。

翌日になって、私は先に避難していた人たちを、訪ねることにしました。金性洙さんや金俊淵さんに会えば、いろんな状況がわかると思ったのです。二人の居処は、治安局へ行けば知れると考えて、警察部長に会いに行きました。そんなふうにして、他の人たちとも連絡がとれ、それから、釜山における、私の三カ月間の避難生活が始まったわけです。

この避難時代に、私は釜山で出ていた『民主日報』という新聞の面倒をみました。当時釜山には、政軍局釜山分室という政府機関があったのですが、これが『民主日報』を、とりつぶしてしまうという話なんです。どうしてかと聞くと、そこの編集長が〝赤〟だという。それなら、私にまかせてほしい、といった経緯があって、私は、『民主日報』の顧問をやりました。その時の私の日課なんですが、午前中はアメリカ公報部の（USIS）へ出かけます。公報部の壁には、戦況なり世界のニュースなりが張りだしてあるので、これを見てまわってメモする。次に政訓局へ出向き、戦況をたずねる。二カ所の取材をすませると、だいたいお昼頃になります。そこで、みんなが集まっている旅館へ赴き、そこの広間で、一日の経過報告といったものを一席ぶつ。要するに、私は釜山避難時代に始めて、第一線記者の真似事をやったようなわけです。

さて、戦争のほうは、九月十五日に、米軍の仁川上陸が行なわれます。そして、たしか九月二十一日だったと記憶しますが、LSTが始めて、釜山から仁川へ出航することになった。その時に、『東亜日報』から私、他に『京郷新聞』の社長と国会議員が二人、あとは公報局長と写真班の計七名が、

ＬＳＴに乗船して、釜山を出発したのです。民間人としては、最初のソウル入りをしようとする一行でした。四、五日かかって、二十六日の朝、まだ薄暗いうちに仁川に着きました。ところが、盛んに艦砲射撃をやっている。仁川の旅館で待機することになったのですが、すごい家鳴りがするのです。ずしんずしんと砲声がこだまし、そのたびに家全体がゆれる。とてもじゃないけど、話などしていられません。不安で不安で仕方がないようなありさまでした。二十六日、二十七日の二日間は、艦砲射撃が続き、ソウルへはいれなかったのです。ジープで漢江南岸の永登浦あたりまで、偵察隊が出向いてくれます。状況をみて、はいれるかはいれないかを判断するためでした。二十七日の夕方、偵察から帰ってきた人が、もう麻浦の付近では、漢江に橋を架け終わりつつある。明日ははいれるだろうというんです。

二十八日の朝、私たちは勇んでジープ二台に分乗し、ソウルへ向かったわけです。仁川からソウルまでは、八十キロあまりあるんですが、ソウルの市庁室にはいって、時計をみると十二時十五分でした。ちょうど一時間十五分かかっている。ジープはすごいスピードで突っ走ったのです。ソウルにはいったとたん、私はその無惨さに愕然としました。西大門一帯は、完全に瓦礫の原です。この破壊の大半は、米軍がソウル奪回を図った際に生じたものです。飛行機による爆撃と砲撃とを、徹底的にやったんですね。とにかく、めぼしい建物などは全然残っていません。なんともみじめな光景でした。

私は『東亜日報』に行ってみることにしました。その当時の『東亜日報』は、以前『京城日報』の社屋だったものを、臨時に使っていたんですが、煉瓦造りの建物は全部破壊されていました。柱が数

本残っているだけでした。『東亜日報』へ向かう途中、私は社員たちをどうやって集めればよいかと、心配していたのです。けれども、行ってみると、ちゃんと貼り紙がしてあった。『東亜日報』の社員は第二工場へ集まれと……。すぐに第二工場へ飛んだのですが、集まっている社員たちをみて、私はびっくりしました。みんな蒼白な顔なんです。北が占領していた期間、彼らはソウルのあちこちで、じっと隠れていたんです。見つかれば、ひっぱられますからね。だから、陽にあたっていなかったのです。負傷してびっこをひいている者もいました。その時には十人ぐらい集まったのですが、いろいろ話をして、夕方の五時に散会したのです。通行制限時間が六時までだったからです。

私の自宅はソウル北部の敦岩洞(トンアムドン)で、そこから歩くと、一時間ばかりの距離です。私が行こうとすると、とめるんですね。あの付近は、今朝まで射ち合いがあった。まだ危ない。今晩はよそで泊って、明日行きなさいと……。いや、ここまできて、行かない手はない。私はそういって、社員の一人と一緒に、家へ行くことにしました。で、自分の家に着くには着いたのですが、こわくて、門が開けられないのです。もしかすると、家族はいないかもしれない。釜山にいる間に私は、長男が北の義勇軍に徴用されたという話を、伝え聞いておりましたし……。しばしためらったのち、勇をふるって家にはいった。そうしたら、家内はちょうどおかゆをたいている最中でした。私は長男の名を呼びました。すぐに家内がいいました。国連軍が入城したというので、見にでかけたんですよと……。私ははじめて安堵しました。みんな生きていてくれたわけです。長男は大学一年生でしたから、義勇兵にひっぱられる年頃だったのです。そこをどうやって逃れたのか、北の占領下で家内が見聞きしたことなど、

たくさん積もる話がございます。しかし、そんな話をしておりますと、夜が明けてしまいます。
その後、ソウルを奪回した国連軍と韓国軍は、三十八度線を越え、敗退する北朝鮮軍を追って北進しました。十月十九日には、北の首府平壌が陥落するわけです。十月二十五日に、米軍が各新聞社の編集局長と主筆を招待し、平壌と咸興(ハムホン)を案内してくれたことがありました。実をいうと、私はその時に始めて、この北朝鮮の二大都市をみたのです。学生時代に行く暇がなかったわけではありません。要するに横着で、ソウルへはしょっちゅう行くくせに、平壌にまで足を延ばそうとしなかっただけです。一行は平壌から、さらに北方の前線を視察しました。中国軍の参戦は、前線から引き返す時に知りました。この時には、途中の順安(スンアン)に米第八軍の司令部があり、司令官から話を聞いたりして、一度ソウルへ戻りました。というのは、平壌と咸興の間には高い山があって、エア・ポケットがあるので、直接飛行機が飛ばせないのです。それで、ソウルからまた、咸興へと飛んだわけです。咸興に着いてみると、米第十軍がさらに北へ向かって、盛んに進軍している最中でした。そして、十月二十六日には、韓国軍の一部が鴨緑江(アプノッカン)に達しています。国連軍の意気が、一番上っている時だったんですね。このすぐあとに、共産軍の総反撃が開始されるわけですけれども……。
私がこの招待視察の際、一番印象に残っているのは、平壌の旅館の女主人から聞かされた話でした。戦争が始まることは、私たちには、もうとっくの昔にわかっていた。それなのに、韓国はいったいなにをしていたのですか。そういわれて、私たちは、本当にぎゃふんとまいりました。つまり、北では戦争に対して、万端の準備を整えていた。それにひきかえ、南のほうは、あまりにだらしがなかった

ではありませんか、というわけです。この女主人の言葉が、いまでも私の耳に強く残っております。

十一月になると、北方の戦線においては、中国軍が全面的に姿を現わしてまいります。戦局はふたたび傾いて、南側が不利になり、十二月にはいると、ソウルは慌しい空気につつまれてきました。十二月五日に、北側は平壌を奪回し南下を開始するわけです。先の六月の場合には、政府が黙ってソウルを撤退してしまったので、多くの犠牲者が出たのです。とくに若い青年たちは、北の義勇軍に徴用され、さんざんひどい目にあった。市民たちも、北のやり方がどういうものかは、今度は骨身に沁みてわかっていた。とにかく、避難できる人は全部避難させなさいと。政府も今回は、そういう方針でのぞみ、市民たちを事前に避難させた。私も前の経験でこりていたので、妻子は十二月末に釜山へ発たせました。また若い青年たちは、第二国民兵という名目で、慶尚南道の晋州(シンジュ)や馬山(マサン)へ送った。つまり、韓国の南端のほうに避難させてしまったのです。国会でもそのために、わざわざ二百億ウォンの予算を組みました。

報道関係者のほうは、内務部と相談の上、最後の列車でソウルを引き揚げることに決めたのです。その時の内務部長官は趙炳玉(チョビョンオク)でした。彼は後年李承晩と大統領選挙を争っている途中で、病気にかかり、アメリカのウォルター・リード陸軍病院へ手術にいって、そこで死んでしまいましたが……。ですから、言論人は全部一緒に引き揚げるという前提のもとに、最終時点まで、ソウルに踏みとどまることになったのです。

そして、五一年の一月四日、迫りくる共産軍の再突入を前にして、政府がソウルを撤退する。その

日の最終列車に、残っていた言論人全部が乗って、無事避難したわけです。私個人のことを申しあげますと、編集局七名と職工七名、たった十四人だけを残しておいて、『東亜日報』の社員全部を、それ以前にソウルから避難させました。私は残った十四人とともに、最後までとどまり、新聞を出し続けたわけです。一月四日の最後の引き揚げを前にして、私はみんなに頼みました。各自荷物があって悪いけど、持てるだけの紙を持っていってくれ。紙さえあれば、私は新聞を出す自信がある。私がそういったのは、実は『東亜日報』の紙が、倉庫に梱包したまま山のように積んであったのですが、野党系の『東亜日報』ということで、軍部が紙を疎開してくれないんです。仕方がありません。各人が持てるだけの紙を、持っていこうということにしたのです。荷物の上にばらの紙を乗せて、釜山まで運びました。

社長は動乱が始まる前に、国務省の招待でアメリカへ渡って留守でしたから、先に釜山に避難していた専務に会って、新聞をどうするのか、とたずねた。専務の返事はそっけないものでした。お金がないから新聞は出せません。銀行も貸してくれません。それでは、私にまかせなさいといって承知してもらいました。私は、社員たちを全部集めました。ここに、ソウルから持ってきた紙が三十三連ある。これを売って、みんなに分けることにしますか。それとも、この紙をもとにして、新聞を出しますか。諸君の要求どおりに、私は動くことにします。すると、みんなが新聞を出しましょうという。私はさらにいいました。しかし、そのかわり月給はないよ。もし新聞が売れたら、それを皆に分けてあげます。話がきまって、新聞を出しはじめたわけです。

私は、その時にいったんです。決して他の新聞と競争しようと思うな。残念だが競争できる状態ではないんだ。だから、競争を超越しろと……。私自身も、言論人として、本当に書きたいことだけを書くつもりだ。諸君も、国民に本当に報道したいことだけを書いてくれ。玄関ダネなんかもってくるな。紙面もそれほどない。国民に、心底伝えたいと思うものだけを書いてほしい。実際、そういう気持で、私は新聞を出しました。他の新聞は、みんな夕刊を出すだろう。地方新聞もそうだし、ソウルからきた連中も夕刊を出す。他がみんな夕刊を出すのなら、『東亜日報』は朝刊を出そう。私が社員たちに、朝刊を出すことを告げたのには、それなりの目算があったからでした。夕刊を出すためには、正午の十二時が記事の締切りになる。そうしなければ間にあいません。朝刊の場合ならば、午後五時が締切りになる。だいたい午前中というものは、ニュースがあまりないものなのです。午後からよいニュースが、どんどんはいってくるんですね。したがって、朝刊は遅いようでいて、ニュースが早いんです。私は、社説を毎日のように書きました。よくあれほど書いたと思っています。若かったんですね。本当に書きまくりました。

そうこうしているうちに、だんだん新聞が売れるようになってきた。売り子たちが、あしたの朝の『東亜日報』！　と呼び声をあげると、あれは、ソウルの『東亜日報』じゃあないかと……。しだいに、読者がついてくるようになったのです。最初二千部からスタートしたものが、たちまち、四千から六千へと増える。五月頃には、なんと一万五千部にまでなっていました。タブロイド判の、ちっぽけな新聞だったのですが……。

この年、戦争は共産軍の攻勢に始まり、春頃になってやっと、国連軍が反撃に転じます。三月十四日、ソウルが再度奪回されるわけです。やがて、戦線は膠着状態となり、一進一退を繰り返す。そして、南北互いに〝勝つ手〟を見出せないまま、十月下旬には、一応の停戦になるのです。もっとも、私は九月二十三日に、日本へ移っていましたので、戦火の一時やんだ朝鮮の地を、目撃することはできませんでした。そうした戦争の帰趨とは別に、韓国内の政局は混迷状態を続け、手のつけられないようなありさまだったのです。要するに、李承晩政権の腐敗堕落ですね。李承晩自身の時代感覚を欠いた、権勢欲むきだしの独裁者ぶりも、それに輪をかけたといえましょう。私はこれに対して、ちっぽけなタブロイド判の『東亜日報』でしたけれども、徹底的にたたきました。

実際、たたかずにはいられないぐらい、醜悪な事件が次から次へ続出したのです。具体的に申しますと、二月二十一日に、居昌(コチャン)事件が国会で暴露されます。三月二十九日、国民防衛軍疑獄事件。四月一日、居昌事件調査団襲撃事件……。その他にも、いろいろな事件が起こりました。

居昌事件というのは、この年の一月か二月の初め、まだ戦局が非常に不利だった頃、韓国軍が慶尚南道居昌郡神院里(シンウオンリ)の住民五百七十二名を、虐殺した事件です。居昌郡は地図をみていただければおわかりのように、智異山・徳裕山(トクユサン)・伽耶山(カヤサン)の間にある山村地帯です。この地帯は、共産ゲリラ部隊がよく通る場所にあたっていた。ゲリラ隊は神院里にやってくると、村民にご飯をたかせたり、食料や水をもらったりしていた。これはやむをえません。武装しているゲリラの要求を拒否することは、神院里の住民にできるわけがない。この事実を知った韓国軍が、あの神院里は〝赤の部落〟だといって討

伐に赴いた。老若男女五百七十二名の村民を、部落の小学校に集めておき、機関銃を掃射してこれを殺害した。あまつさえ、犯行の痕跡をくらますため、死体にガソリンをかけて焼いてしまったのです。この恐ろしい事実を、居昌郡出身の国会議員である慎重睦(シンチュンモク)が、二月二十一日の国会で暴露したわけです。もちろん、大変な騒ぎになりました。国民を守る義務のある国軍が、反対に、国民を虐殺してしまったんですから……。

軍や政府のほうでは、なんとか事を隠しとおそうとしたのですが、国民の憤激がおさまらない。とうとう、国会、内務部、法務部、軍部の合同調査団が編成され、現地調査に向かうことになったのです。ところが、あくまで事実を隠蔽したい軍部は、国軍の一個中隊をゲリラ部隊に仕立てて、ひそかに現場近くに伏せておいたのです。なにも知らない国会議員たちが近づいた時、突然銃火を浴びせた。威嚇射撃ですね。そのため、調査団は神院里の現地へ行くことができず、仕方なく帰ってきた。これが、居昌事件調査団襲撃事件というものです。当時の釜山地区憲兵司令官金宗元(キムチョンオン)と、国防部長官申性模とがしめしあわせて、このニセゲリラ襲撃という隠蔽工作をやらせたのでした。

三月二十九日に、国会で暴露された、国民防衛軍疑獄事件というのは、前に話した、南方に集団疎開させた第二国民兵のことなのです。五一年の一月から二月頃は、戦況が悪く、共産軍は水原あたりまで、南下していました。それで、このままでは危険だからというので、第二国民兵を済州島に疎開させることが決まった。済州島で、国民防衛軍としての訓練をほどこす計画だったのです。そのため、晋州や馬山にいた第二国民兵を、全部釜山へ集結させたのです。ところが、どうしたというのでしょ

う。釜山に着いた第二国民兵たちは、まるで幽霊のようでした。ふらふらして、足元もおぼつかない。やせ衰えて、見る影もない姿です。人家の軒によっちゃあ、水をくれとか、パンをくれとかいっている。どうみても、乞食の群としかみえない。これが、われわれの第二国民兵なのか。二百億ウォンの予算はどうしたのか。第二国民兵は、ちゃんと生活しているはずではなかったのか……。

当然、国会で問題となった。そして、調べが進むにしたがって、驚くべき事実が判明したのです。第二国民兵の指揮監督にあたっていた幹部五名が、大金を横領していた。親玉は金潤根（キムユンクン）という准将でした。光熱費・被服費・食費など、彼らはあらゆる諸経費をピンハネし、ために、千数百人の第二国民兵が死亡していました。横領が発覚した時には、二百億ウォンの半分近い金が消費されてしまったあとでした。彼らが着服した金の一部は、国防部長官申性模に渡り、さらに李承晩の手に渡った。そういう、うわさが、飛びかったりもしました。横領した幹部五人は、その後、銃殺に処されましたけれども……。

とにかく、居昌虐殺事件、調査団襲撃事件、国民防衛軍疑獄事件……。どれ一つをとっても、生やさしい事件じゃありません。むしろ、考えられないような事件です。私は言論人の一人として、それを黙ってみてはいられなかった。もう全力をあげてたたきました。すると、脅迫状がくる。爆破するという警告が届く。そんなものはかまわなかった。やるなら、やってみろという気持でした。政府のほうでは、私をつかまえたかったらしい。その筋からの圧力もかかりました。私は検事の令状を持っ

てこいといったんです。そうでもなければ、こっちは忙しくてつきあっている時間がないんだと……。私だけではない。『東亜日報』のみんなが、協力し合って闘ったのです。いま思うと、よくがんばったものだと思います。

私自身は、そうした緊張した毎日を続けていたのですが、五月九日になって、李始栄副大統領が辞表を提出します。李承晩の独裁政治に抗議したわけです。事態はそこまで進んでいました。先にあげた三つの事件でもわかるように、軍部の横暴、腐敗堕落は目にあまるものがあった。その元兇は国防部長官の申性模です。しかし、李承晩はなんらの手もくださない。申性模が李承晩の忠臣だったからです。そのどうにも筋のとおらないやり方に、李始栄副大統領もサジを投げたのです。李始栄さんは、もう歳も歳だったし、これ以上、李承晩と付き合うのは我慢ができなくなったのです。李朝時代の儒者を偲ばせるような、本当の両班(ヤンバン)出身の人でしたから……。それで、李始栄さんが辞めたので、次の副大統領には誰を推すかと。国会は金性洙さんを推しました。金性洙さんのほうは、とんでもないということで、釜山から鎮海(チンヘ)へ逃げてしまった。しかし、政治の局面がここにいたれば、次の大統領は金性洙さん以外にはいない。もう李承晩にはこりごりした。国民は、みんなそういう気持だったのです。次の大統領になるのだから、この際は副大統領で登場してほしい。議員たちは金性洙さんのところまで押しかけ、盛んにすすめた。そして、会議を開いた結果、金性洙さんも折れて、副大統領になることを承諾したのです。私は、その場に同行しただけだったのですが、私を同行した人には、魂胆があったらしい。副大統領就任の辞を書くよう頼まれて、さっそく筆をとらされたことがありました。

まあ、私の韓国における言論人としての活動は、そこらへんまでが、限界だったように思います。まもなく、アメリカから社長が帰国し、『東亜日報』内部にも、さまざまな問題が生じてきたのです。私自身のレジスタンスは、その後も続きましたけれども……。

ある朝、新聞をみると、私の書いた社説が削られているんです。これはどういうわけですか。聞きただすと、いろいろな事情がわかってきました。私の社説で批判された政府高官が、なんと金性洙副大統領に訴えたというのです。社説の内容を、誰かが事前にその政府高官に密告したかは、わかりませんでしたが……。そういう経緯があって、金性洙副大統領の家で、社長と専務を呼びだして相談した。けっきょく、あの男はいっても後へはひかん奴だから、黙って削るより仕方があるまいと……。

この無断削除以後、私は社説を書きませんでした。なぜならば、私は『東亜日報』の主筆であり、編集局長だったのです。そうである以上、『東亜日報』の紙面の全責任は、私が負っているのです。前に話した、三月二十二日の社説の時も、同じようなことがありました。私が社説を書き、ゲラが出てきたあとで、社長が私のところへ飛んできた。この内容で大丈夫か、行きすぎではないか、というわけです。そこで、私がなにか一言いえば、社説は削られてしまったでしょう。私は黙っていました。もちろん、私自身としては、当たり前のことをいっているだけで、少しも行きすぎだとは思っていないから、黙っていたのです。帰宅の際社長と一緒に帰ったのですが、車中でも、私は一言も話しませんでした。そんな一幕もあったのです。いずれにしても、主筆なり編集局長なりというものは、いわば新聞全部の筆政をまかされているものなのです。社長といえども、あえて口出しをしないのが常識

です。まして、無断削除などは論外の行為です。そういう根本が犯されたのですから、社説など書く気がおこるはずもありません。同時に、やる気もなくなったわけです。

そこでやむをえず、私は高在旭（コジェウク）さんに、あとを頼むことにしました。高在旭さんは、私が編集局長の時は主筆であり、私が主筆の時は、編集顧問だった人です。その後、社長になり、会長になり、名誉会長となられた。韓国ＩＰＩ（国際新聞編集者協会）の委員長もやられましたが、四、五日前に亡くなられました。私は喧嘩ばかりしている野人でしたが、高在旭さんは温厚な紳士でした。私は高在旭さんに会って、ピッチャー交代の時期であることを話し、承諾してもらったのです。この年の八月末に、私は妻子を東京へ発たしてあったのです。妻子がどういうふうに暮しているか、いっぺん見に行ってみたい。しばらくは、東京にいるつもりです。私は高在旭さんに、そう告げたのでした。

そして、九月二十三日に韓国を離れました。釜山から少し離れた場所に、水営（スヨン）という飛行場が、その時分あったのです。臨時の飛行場でした。そこから、羽田へ向けて飛びたったわけです。日本はちょうど、サンフランシスコ講和条約が調印された直後でした。羽田に着くと、そこには爽やかな秋晴れの空が広がっていました。

私が渡日するにあたって、時の韓国政府がよくパスポートを出したものだ、と思われるかもしれません。これには事情があるのです。実は五一年三月末に、私は新聞の資材購入を理由に、旅券申請をして許可されていたわけです。その時には、まだ李承晩政権と私との関係に特別な変化があったわけではありません。旅券の有効期間は六カ月だったので、期限が切れるギリギリに、私は韓国を発った

ことになります。あとで私の出国を聞き、政府当局は非常にくやしがったそうです。だから、私が言論闘争を始めてからのちであれば、李承晩政府は当然、私にパスポートなど出さなかったと思います。たまたま、そうではなかった時期にパスポートをとっておいたことが、私に幸いしたのです。

私は九月二十三日に出発しましたが、本当は、その前日に発つ予定だったのです。飛行機が故障ということで、一日延びてしまったのです。ともあれ、機上の人となった私の胸中は、憮然たるものがありました。私は韓国の民主化を願った。だが、その希望は空しかった。私はたしかに、李承晩政府の独裁政治を、言論でもって攻撃し続けた。しかし、私はいま敗れ去って、祖国の地を離れようとしているのだ。現下の朝鮮は、南北に別れて、骨肉を食む戦争に明け暮れている。その時、私は一つの課題を自らに課しました。現在の朝鮮には、南も北も希望がない。いったい朝鮮民族が、希望をもって生きられる道は、どこにあるのだろうか。私は国を離れて、国の運命を考えてみようと……。それが、日本に向かうに際しての、私自身に課した課題だったのです。

東京にきて二、三カ月間、私は一所懸命勉強しました。翌年の五二年の正月になって、ようやく、私には一つの結論が生まれました。それは、中立化による朝鮮の統一ということでした。統一しなければ、朝鮮民族が希望をもって生きる道はない。現在のように、南北が対立抗争し、殺し合いをやっていれば、共倒れになるだけだ。本当に朝鮮民族が、希望をもって生きようとするのなら、統一を達成する以外にはない。統一を達成するためには、朝鮮を中立化することだ。なにも米ソ日中は、朝鮮民族の民族自決権に反対しているのではない。米ソ日中は、統一された朝鮮が、一方の勢力に片よる

ことを恐れているだけなのだ。つまり、朝鮮がアメリカの勢力圏にはいれば、満州とシベリヤが不安であるし、逆に、朝鮮がソ連の勢力圏にはいれば、日本の国防が不安になる。だから、統一された朝鮮が、東西いずれの勢力にも属さない、中立化した朝鮮になれば、米ソ日中が朝鮮の統一に反対する理由は、消滅する。すなわち統一朝鮮の生きる道は、中立国になることなのだ。中立化を、統一朝鮮を実現するための大前提、プレ・リキジットとしなければならない。これが、私自身が考え抜いた末の結論でした。

最後に、話が前に戻りますが、私個人の亡命について、少し触れておきたいと思います。私が渡日する際のパスポート取得の経緯は、先ほど話しましたが、私は自ら望んで亡命客となったわけではないのです。来日してからの私は、当時の韓国駐日代表部が、私の旅券の更新期間を二カ月間に切ったので、そのつど代表部に出かけて更新を繰り返していました。ところが、五二年三月に、私が旅券更新を申請すると、旅券を紛失したという理由で更新を許可しなかったのです。その頃、韓国内の政局は、政府と国会が激しい対立状態にあった。李承晩政府としては、私の帰国を、好ましく思わなかったのだと思います。

その後に李承晩は、国会議員の逮捕を含むさまざまな弾圧を行なって、七月四日には、強引にお手盛りの憲法改正を行ない、自己の独裁体制を固めてしまったわけです。私は李承晩のやり方に、激しい怒りを感じました。日本の報道記事を読むと、現地特派員がいないというハンデもあり、正しい事情が記されていない。私は共同通信のインタビューに応じ、韓国の政局について、真相をぶちまけま

した。この時のインタビューが新聞記事になり、それを読んだ李承晩は大変怒ったということです。十月に外人登録の切り換えがあり、私はパスポートが必要となりました。そこで、駐日代表部へ出向くと、旅券の交付を拒否されたのでした。原因は例のインタビュー記事にありました。したがって、その時点で私は、李承晩政権により、いわば正式な亡命客にされてしまったわけです。

4

G　日本敗戦直後、朝鮮にいた日本人のことですが、どんな状態だったのでしょうか。

南では、あまりトラブルはなかったようですね。日本人自身が、自粛するという気持も強かったですし……。ソウルなどでは、すぐに引き揚げ者団体をつくり、じょじょに日本へ帰還していきました。私は江原道の原州で解放を迎えているわけです。まあ、原州みたいな田舎では、郵便局の貯金を渡すの、渡さないの、といった話があっただけでした。国へ帰る人なのだから、預けてあるものは全部渡してあげなさい。そして、知り合いだった日本人には、できるだけ早く引き揚げなさい、ここに長くいたってしようがありませんよ。私はそんなふうにいいました。原州では当時、私はわりあい発言権がありましたので、ひどいまねはさせなかったし、預金なども全額渡すようにさせました。解放前の朝鮮には、どこにも日本の神社があったわけです。天照大神を祀ったものね。そこへ火をつける奴がいたんです。夜中に消防車に乗せられて何回も、放火現場にいったこともありました。原州にあった

神社は、街からは少し離れた場所にあった。もう、恨み骨髄に達してたんでしょうね。神社参拝とか、皇国臣民の誓詞とか、いろんなことを、解放前にはやらされましたから……。放火することによって、長い間の鬱憤を晴らしたわけですね。そんなことぐらいで、原州での日本人は、わりと平穏に引き揚げていきました。

原州全体で、日本人の数は百名ほどだったと思います。要するに、警察があって、署長以下何人かの警官がいる。地方裁判所の出張所があり、判事と検事がいる。あとは小学校と郵便局ですね。それから、種畜場が一つあり、ブタの品種改良などをやっていました。ここの場長が高橋さんという人で、非常によい人でした。私はブタの牧場をやっていたこともあって、よくお付き合いしました。他に、旅館を経営している人がいましたね。めぼしい日本人というのは、それぐらいだったでしょうか。しかし、そうした少ない人数ですが、原州を支配できる大事なポジションは、日本人がその全部を占めているわけです。警察・裁判所といった官のものから、民間の銀行・旅館といったものまでを……。ですから、南の場合は、悪いことをした人以外は、比較的優遇されて帰っていますよ、日本人に対する同情もあってね。

それに較べて、北からくる日本人たちはみじめだった。ほとんど着の身着のまま、みんな食うや食わずで逃げるようにしてきている。南のほうでは、三十八度線を越えたところにテントを張って、そうした北からの越境者を受け入れるようにしていました。ソウルには、日本人引き揚げ者を収容する場所が、特別に設けられてあった。それは、お寺を利用したものでした。そこで、共同生活をしなが

ら、米軍政府に手続きをとり、順番に引き揚げていったわけです。引き揚げ者の総責任者が穂積真六郎といい、有名な法学者穂積八束の息子だった人です。彼は総督府の殖産局長を勤めたこともあり、人間的にも立派な人だったといわれています。穂積氏は、一番最後に引き揚げておりますね。

H　解放後に一時、ソウル大学の先生をなさったそうですが、その時のことについて、少し話してください。

ソウル大学では、ちょうど一年間教えました。四七年のことですね。独文科の教授がいないから、ということでした。新聞のほうはいままで通り週に一、二回論説を書く約束でした。大学で教えたのはドイツ語です。私が三十七、八歳の時分だったでしょうか。話が少し飛びますが、大学へ行く前に、私は『東亜日報』に「民族社会主義序説」というのを書いたのです。解放後の朝鮮は、これからどういうふうに進むべきか。私なりに真剣に模索した結論が、それでした。簡単にいえば、民族社会主義の方向へ進め、と提唱したわけです。

なにか民族社会主義というと、ナチズムを連想されるかもしれませんが、そうした国家社会主義的なものではなく、もっと単純で基本的なことをいいたかったのです。つまり、民族自決の方向を進む上で、平等の概念というものを広い範囲でとらえて、考えてみたかった。というのは、あの当時の共産主義者の主張は、民族よりも階級が優先していた。具体的には、プロレタリア党の独裁が目的だっ

た。そうではない。われわれにとっていま焦眉の問題は、民族の独立が達成できるか否かにかかっている。しかも、現実の朝鮮は、二つに分割された状態にある。そういう時に、階級がすべてだ、地主・資本家は打倒しろといったって、納得のいかない人たちがいっぱいいる。それよりもまず、民族共同体的な考え方を土台に据える。平等の概念を広げれば、貧しき者も富める者もみな同じ朝鮮人ではないか。同じ朝鮮民族ではないか。その間の階級的矛盾をどう解決するかは、民族の独立が達成されたのちの、最終的課題とすればいい。四七年の段階では、朝鮮はまだ南北ともに軍政下にありました。これから、民族の独立、民族の自決を実現しようという時だったわけです。朝鮮が独立していれば、民主社会主義とでも呼んだのですが、それ以前だったから、私は民族社会主義という言葉を選んだのです。

たとえば、一つの例を『東亜日報』にとれば、社主の金性洙さん自体は、民族ブルジョアジーです。当時の共産主義者たちの固定化した図式によれば、これも打倒しろということになる。私は、そういうドグマでこり固まったような考え方は、やめろといいたかったのです。民族資本家だって、いろいろある。儲けた金を使って、民族のためになれかしと思い、紡績業を興したり、新聞社をつくったり、学校を建てたり……。そういうことをしている民族資本家もいる。これはやはり、良心的な人たちですよ。むしろ、その人間たちの事業の才能を活用すればよい。あがった利潤は国家が吸いあげて、社会事業の形で民衆に還元すればよいではないか。そんなふうに、本当をいえば、単純で素朴な意見なんですね。これを『東亜日報』に四、五回載せたところが、なかなか評判がよかったんです。

I　金三奎さんは、けっきょく新聞人になられたけれども、その頃には、いろいろな岐路があったわけなんですね。学者になる道もあったし、評論活動のほうへ向かわれてもよかった。もっとも、政治家は志向されなかったと思いますが……。

そうです。さしあたりは言論人として、少し名が売れ出したという頃だったわけね。いまいった民族社会主義という考え方を、自分なりに一応打ち出せたので、大学へでもいって、もっと勉強したい気持があったのです。ところが、ソウル大の教授になってみて、私は驚きました。学者連中のシンネリムッツリした派閥抗争……。これには、ほとほとうんざりしました。これはえらい場所にきてしまったと思いましたよ。ちょうどその頃に、新聞社のほうは、編集局長が結核で死んだんです。主筆の高在旭さんから、後任をと頼まれた。こっちはうんざりしていた時です。二つ返事で承諾し、けっきょく、私の進む道はプレス・マンに決まってしまったわけですね。『東亜日報』というところは、派閥がなかった。社主のほうから、新聞社へ干渉することもない。大変リベラルな雰囲気のところだった。そこが、私のような野人には向いていたんです。

J　一九五一年九月に、金三奎さんは日本へ亡命されておりますが、戦後日本についての、その時の印象は……。

まだ、戦争の跡が方々に残っていましたね。東京は焼け野原がずいぶんあって、やはり、無惨だなあという感じでした。しかし、そういう面よりも、戦後の日本が、いかに民主化したかということに対して、私は大変驚きました。私が日本へ着いた頃は、雑誌『世界』で、講和特集号が組まれていた。片面講和か、全面講和かという問題が論じられていたのです。この年の九月八日、サンフランシスコ講和条約が調印され、日本は片面講和をしたわけですね。だから、あれは五一年の十月号だったと思います。読んでいると、もうびっくりして、鉄の棒で頭をがーんとやられたような感じだった。ああ、日本には、これだけ言論の自由があるのか。これだけ民主化されたのかと……。私のほうといえば、李承晩の独裁政治に追われ、しかも、戦時下の管制にしばられていたわけで、言論の自由に飢えていましたからね。ですから、私の眼中には、実は焼け野原のことなどは問題でなかった。私にとって問題だったのは、一にも二にも、戦後日本の民主化でした。これはすばらしい。日本はこんなによくなったのか、という驚きだった。昔の日本を知っていた私には、まさか、こんなふうであるとは、予想すらしえなかったのです。よくもこれだけになったなあと。日本は負けてよかったのじゃないかって……。

K　一九六〇年に、韓国では学生革命が起こり、李承晩政権が打倒されます。この年、十年ぶりに国へ帰られたわけですね。韓国では、大変な歓迎を受けたとお聞きしていますが……。

ええ。十年ぶりの帰国でした。言論界がとても歓迎してくれました。ソウルでは、私はサヴォイ・ホテルにいたんですが、連日のように、インタビューにきてくれたりしまして……。私が韓国へ行ったのは六月二十三日で、七月二十三日に日本へ帰ってきた。ちょうど、まるまる一月いたことになります。四月二十七日に、李承晩が辞職し、五月末に李承晩はハワイへ亡命してしまった。許政(ホチョン)過渡政府時代だったわけです。私は最初の二週間をソウルにいて、あとの一週間は全南の郷里を廻り、もう一週間をふたたびソウルで過ごしたんです。始めのソウルにいた二週間は、本当に昼夜兼行で働きました。七月二十九日が投票日で、ソウルは選挙運動の真っ最中でした。あの一時期、韓国は非常に自由だったわけです。いろいろな革新政党が雨後のたけのこのように生まれていました。なんでも自由にものがいえたし、大変な活気が街中に漲っている感じでした。みんな統一統一と、大騒ぎしている時でもありました。私が統一中立化を主張していることは、わりと知られていましたから、新聞記者連中が話を聞きにくる。ザックバランに話してやると、新聞に載せる。それを読んで、手紙をくれたり、わざわざ会いにきてくれた人もありました。また、学生連中が講演にきてくれというので、出かけていく。李承晩政権を打倒した直後ですから、学生連中の態度は、実に意気軒昂としていました。そんな具合いで、昼間はインタビューや講演に追いまくられ、夜は夜で、頼まれた原稿を書きまくった。ですから、夜も昼もなかったんです。

そして、最後に書いた原稿が、雑誌『思想界』に載せたものでした。各党の統一案を逐一批判しな

がら、なぜ中立化でなければならないかを、懇々と説いたものです。この原稿を七月四日に徹夜で書きあげて、私は光州行きの列車に乗ったのです。ソウルでは、尹潽善（ユンボソン）にも会ったし、張勉（チャンミョン）にも会いました。この年の八月に尹潽善が大統領になったわけですね。次の政権が、今回の選挙で韓国民主党になることは、私にもわかっていた。二人は民主党の旧派と新派なんです。尹潽善は旧派だし、張勉は新派の中心人物でした。私は二人に会った時、統一中立化案は話さなかった。選挙中ということもあったし、なにかに書いておけば、あとでそれを読み検討するだろうと思った。そんなこともあって、私は『思想界』に統一中立化案を載せておいたのです。私は韓国に帰国することを心中に決め、日本へ戻ってきました。さっそく、帰国のための整理を始めたわけです。『コリア評論』へも、読者との別れ、廃刊の辞を書きました。

ところが、さて帰ろうとすると、肝心のパスポートが出ないのです。すでにその時には、尹潽善が大統領になっていましたから、私は大統領あてに手紙を書きました。韓国民が韓国の旅券を求めているのに、旅券を出さない。そんなばかな話がありますか。これは韓国の名誉に関わる問題だからしかるべき処置をとり、すみやかに旅券を渡してほしいと……。けれども、まったくのなしのつぶてでした。私の旅券のことは、国会でも問題になったのです。当時、外務部長官だった鄭一亨（チョンイルヒョン）は、質問した議員に対して、絶対そういうことはないと返事したという。彼は、今度の民主救国事件で、金大中（キムテジュン）たちと一緒に、つかまった人ですが……。しかし、現実には旅券は出ない。私は仕方がないので、国会副議長だった徐珉濠（ソミンホ）さんに調査を依頼しました。徐さんが鄭外務部長官と個人的に会い、どういう

ことなのかと聞きただしてくれた。すると、外務部長官がいうことには、張勉総理が出すなというのに私が出せますかと……。さすがにうそはいえず、本音を吐いたのです。要するに、韓国民主党の統一案を支持するならば、旅券は出そうということでした。ところで、彼らの統一案はといえば、国連監視下での南北統一選挙なんです。これは、李政権以来いい古されてきた統一案に他なりません。私にしてみれば、いまさらなにをいっているかです。そんなことで、旅券が発給されず、私は一九七三年に例の南北赤十字会談が開かれる時まで、韓国へ帰ることができなくなってしまったわけです。

あの南北赤十字会談の席で、韓国側が提案したのは、墓参する人には、反共法も国家保安法も適用しない。北側の人間も喜んで受け入れる用意があるということでした。そのことが、新聞に報道されたのです。私は韓国大使館に電話をかけました。私も墓参りをしたいのだが、旅券を出してくれますか。はい、出しましょう。そこで、すぐに私は旅券をとってきたわけです。私はソウルへ行くと、どうしても墓参りをしなければならない人が、何人かいるのです。前には、宋鎮禹さん、金性洙さん、金俊淵さんの三人でよかった。ところが、昨年〔一九七五年〕墓参した時には、『東亜日報』の社長だった、崔斗善(チェドソン)韓国赤十字社総裁、国会副議長だった徐珉濠さんが亡くなられていました。それで、私は五人の墓参りをしたわけです。宋鎮禹さんの墓は、ソウル市街から少し離れた山の上にある。墓の前に立つと、ソウルの国会議事堂が目の前にみえるのです。宋鎮禹さんの墓としては、もってこいだなあと思いました。金性洙さんの墓は、高麗大学の中にあります。金性洙さんは高麗大学の創立者ですから。五人の中で一番立派な墓ですね。

L　金三奎さんのお母さんは、いつ亡くなられたのですか。

母は五二年の四月に亡くなりました。私が日本へきた翌年の春ですね。私はなにも知らなかったんです。『東亜日報』が母の死を報じてくれたので、始めてそれを知ったようなありさまでした。私が心配するだろうと思って、なにも知らせなかったんだと思います。ソウルが再度北の手に陥ちた時、私は釜山へ避難して、そのまま日本へきてしまった。だから、母とは会っていないのです。もし病気が重いことを聞いていたら、飛んででも帰りたかったですね。私は末っ子で、実際わがままばかりしてきました。大学を出ると、すぐに刑務所へ入れられたりで、母には苦労のかけ通しでした。私が『東亜日報』の主筆となって、ソウルにいた時分、母だって、私のところへきたかったはずなんです。それを遠慮して、ずっと田舎にいたままだった。そういうことを、一つ一つ考えていくと、私は本当に親不孝者だったと思います。

（1・2＝一九七六年三月二十五日、3・4＝一九七六年六月二十九日）

≪人名注≫

**崔済愚**（一八二四〜六四）慶尚北道慶州に没落両班の子として出生。号は水雲。一八五五年家郷を出奔し朝鮮八道を遍歴。一八六〇年儒仏仙の三道を合した東学を創始する。その後に布教活動にはいるが、六四年異端邪道の罪で捕えられ断首の刑に処された。東学の教義は二代目教主崔時亨に受け継がれ、農民層を中心に秘密の教団組織を拡大。一八九四年東学教徒全琫準指揮の全羅道に起こった農民大反乱は、李朝支配の根底をゆるがした。

**李退渓**（一五〇一〜七〇）慶尚北道礼安に進士の子として出生。本名は滉、退渓は号。李朝中期最大の儒学者。朱子学の性理説を発展させ独自の思想哲学を生みだした。多くの著述を残したが詩書画にも通じ、また陶山書院をおこして多くの学徒を育成した。学行一致の高潔な人格を敬慕され、韓国では聖賢として仰がれている。日本にも大きな思想的影響を与え、藤原惺窩、林羅山、山崎闇斎らがこれに学び、幕末の先覚者横井小楠は〝古今絶無の真儒〟と讃えたといわれる。

**崔南善**（一八八九〜一九五七）ソウル出身。号は六堂。府立一中、早稲田高師で学んだ。一九〇六年印刷機を購入して帰国、自宅に新文館を設けて出版活動に従事。一九〇八年雑誌『少年』を創刊。同誌に発表した新体詩「海から少年へ」は朝鮮近代文学の先駆的作品といわれる。青年学友会、朝鮮光文会を設立。また雑誌『赤いチョゴリ』『明星』『青春』などを発刊するなど、多面に及ぶ啓蒙的文化活動を行なった。一九一九年三・一独立運動の宣言文を起草、民族代表四十八名の一人として逮捕。その後『東明』『時代日報』を創刊。かたわら国史研究に専念、古典の覆刻事業にも力を尽くした。一九二七年総督府の朝鮮史編修委員に就任。一九三八年満州に赴き『満蒙日報』顧問を務め、翌年建国大学教授となった。一九四二年病気のため帰国するが、学徒兵志願に賛同するなどの親日的言動が目立ったという。解放後、反民族行為者処罰法に問われ一時収監処分を受けた。

**金斗鎔**　一九〇三年咸鏡南道咸興に出生。東大文学部美学科中退。新人会に加入し在学中から反帝同盟に参加。二七年朝鮮プロレタリア芸術同盟東京支部の活動に携わり、二九年文学団体無産者社を組織。朝鮮労総の在日本労働組合全国協議会加入に指導的役割を果した。三〇年再建共産党事件で検挙。出獄後に日本プロレタリア文化連盟（コップ）朝鮮協議会委員長を務めた。三六年朝鮮芸術座に関係して逮捕され転向。日本敗戦後、朝連結成に参加。政治犯釈放促進連盟委員長となり、日共朝鮮人部副部長の任についた。この時期『前衛』に朝鮮人の政治活動に関する指導的論文を多数発表。四八年四月北朝鮮へ帰国。以後の消息は詳らかにしないが、外文出版社局長、海州博物館職員などを勤めたという。

**林和**（一九〇八〜五三）ソウル生まれ。本名林仁植。一九二六年カップに加入し、二八年カップ中央委員となる。翌年日本へ留学。この頃から、詩・評論に頭角をあらわす。三一年検挙。三二年カップ書記長となり文芸路線の〝ボルシェビ

キ化〟を主張。三五年カップ解散後は政治から離れ、文学史研究などに転じた。解放後、朝鮮文学家同盟結成に参画し、南労党の戦列に加わって活動。四七年秋北朝鮮に移り、朝ソ出版社社長、朝ソ文化協会副委員長の任につく。朝鮮戦争時には、ソウルで文化工作の指導にあたったという。五三年八月南労党派粛清の際〝米帝スパイ〟の名のもとに死刑宣告を受け処刑。

**金南天** 一九一一年平安南道成川生まれ。本名金孝植。法政大学中退。カップの指導的論客の一人。カップ解散後は評論から小説に筆を移した。長篇『大河』が代表作。解放後は林和とともに朝鮮文学家同盟結成に加わり、のち北朝鮮へ赴いた。朝鮮戦争時には従軍作家として参加。五三年林和らの事件に連座し、作家生命を断たれたという。

**李北満**（一九〇七〜一九五九）忠清南道天安出身。本名李福萬。早大政経学部に学び無産者社に加入。日本のナップ関係者と交流し、朝鮮史に関する論稿を日本の雑誌に書いた。太平洋戦争下は北京、青島など中国大陸で生活を送った。日本敗戦を青島で迎え、一九四六年二月にソウルに帰った。一九四七年に渡日。以後は実業方面に従事するかたわら、朝鮮史の著述を続けたという。五三年北朝鮮外相南日の呼びかけによる南北統一促進協議会に参加して、一時活動したことがある。

**韓載徳**（一九一一〜一九七〇）平安南道霊泉出身。早大に学び無産者社に加入。朝鮮共産党再建協議会事件で逮捕された。のち『平壌毎日申報』に入社し、解放はピョンヤンで迎えた。北朝鮮政府機関紙『民主朝鮮』の主筆を勤め、作家の韓雪野らとともに、初期金日成顕彰キャンペーンに活躍した一人だという。五三年頃に日本へ密航。北の政治工作員として派遣されたといわれる。やがて日本官憲に逮捕され、韓国へ強制送還を受けた。その後、ソウルの内外問題研究所所長の任について北朝鮮研究に従事した。

**崔承喜** 一九一三年ソウル生まれ。淑明女学校卒。二六年舞踊家石井漠の門下生となり渡日。二九年独立してソウルに舞踊研究所を設立。三四年九月東京で公演、朝鮮民族固有の舞いや踊りをとりいれた独自の近代舞踊とあいまって、天性の美貌と躍動的な肢体とにより圧倒的な人気をさらった。翌年新興キネマで舞踊映画「半島の舞姫」をとる。解放後は共和国に移り、四八年八月第一期最高人民会議代議員に当選。四九年十二月北京で開かれたアジア婦人代表会議に出席。のち一説によれば、自由主義と利己主義的傾向を批判され謹慎処分を受けたという。

**安漠** 一九一〇年京畿道安城出身。本名安弼承。崔承喜の夫。早大露文科卒業。カップに加入し文学評論を多く書いた。解放後、妻とともに北朝鮮へ赴いた。四六年北朝鮮文学芸術総連盟中央常務委員、五〇年朝鮮文学芸術総同盟常務委員、五四年ピョンヤン音楽大学総長、五六年文化宣伝省副相などの要職を歴任。五九年二月いわゆる延安派の粛清が進む中で反党分子・スパイ容疑により失脚した。

**韓偉健** 一八九八年咸鏡南道洪原出身。五山中学卒。三・一独立運動の際には京城医専在学中であったが、学生グルー

プの指導者として活躍。一時上海に身を避けたが、渡日して早大政経学部に学び朝鮮留学生会長となる。この間に福本イズムの影響を受け、学生組織「一月会」(ML派)に参加。帰国して『東亜日報』に勤務。一九二六年第三次党結成、翌年第四次党結成に尽力するが、派閥争いと日本官憲の弾圧により党組織は壊滅。そのつど中国へ逃れた。天津で理論雑誌『階級闘争』『レーニン主義』を発行。同時にコミンテルン指示の「十二月テーゼ」の達成をめざし、朝鮮、日本に使者を派遣するなど朝鮮共産党再建工作の指導にあたった。解放前に延安で死亡したという。

**高景欽**　一九一〇年済州島出身。二七年普成専門学校を中退して渡日、翌年日大専門部入学。高麗共産青年同盟(日本総局)に加入した。三一年党再建工作の使者として上海から東京に派遣され、無産者社の協力をえて党再建協議会日本支部を結成。同年夏検挙され転向して釈放された。解放直後にソウルで結成された共産党長安派に参加、建国準備委員会にも加わった。のち社会労働党に加入するが、やがて北朝鮮へ去ったという。

**崔益翰**　一八九七年江原道蔚珍出身。早大卒。三・一独立運動で検挙され四年間服役。一九二五年「一月会」(ML派)結成に参画。また朝鮮共産党日本総局の組織責任者として、機関紙『大衆新聞』などの主筆を勤めた。二八年二月第三次共産党(ML派)事件で逮捕され、七年間の獄中生活を送った。解放後は長安派共産党を結成するなど、南労党主流派の朴憲永派に批判的立場をとり続けた。のち北朝鮮に移り金日成大学教授などの任についたが、五六年に追放処分を受けたという。

**李東輝**(一八七三〜一九三五)咸鏡南道端川出身。李朝の軍官学校卒業。宮殿鎮衛隊長、江華島親衛隊長を勤めた。一九〇七年日韓新条約により軍隊解散後、義兵運動を起こして一時逮捕された。日韓併合の翌年間島に亡命し抗日運動を継続。一五年露領沿海州に移り、ボルシェビィキ指導者と会い、ハバロフスクで韓人社会党を結成しコミンテルンの承認をえた。一九年八月上海臨時政府に参加、国務総理の任についた。二一年高麗共産党(上海派)を結成。これより早く沿海州には全露韓人共産党(イルクーツク派)が組織され、以後両派は党の正統性をめぐって激しい派閥抗争をくりひろげる。同年六月露領アレクセイエフスクで日本のシベリヤ出兵に抗して編成された両派の義勇軍が戦闘、敗れた李東輝派の戦死者は六百名にも達したという。この軍事衝突事件は、コミンテルン援助金の着服問題とともに民族主義者の離反をまねき、上海派の勢力を著しくそいだ。二二年モスクワで開かれた極東被圧迫民族会議に出席。イルクーツク派の非を訴えたが、コミンテルンは両派の統一を要請して上海派の正統性を認めず、ために李東輝の声望は失墜したという。その後イルクーツク派はしだいに党の指導権を掌握した。二五年ウラジオストック新韓村図書館長となるが、のち零落のうちに同地で死去したと伝えられる。

**張赫宙**　一九〇五年慶尚北道大邱生まれ。本名張恩重。三二年「餓鬼道」が『改造』懸賞小説の二等作に当選し、日本

文壇にデビュー。植民地下朝鮮の悲惨な現状を告発した作品を発表して注目された。のち日本の皇民化政策が進む中で、その同調者として終始し野口赫宙と創氏改名した。日本敗戦後はいったん張赫宙に戻り、さらにまた野口赫宙と改名して日本へ帰化した。

**金竜済** 一九〇九年忠清北道陰城出身。中学生時代に渡日。中央大学中退。一九三一年日本プロレタリア作家同盟に加入。翌年コップ朝鮮協議会委員となり、作家同盟本部常任委員会書記局長、同東京支部執行委員会朝鮮台湾委員会責任者として活動。『戦旗』『プロレタリア文学』『文学評論』などに多くの詩と評論を発表した。三二年六月に逮捕、三六年三月出獄。同年十月朝鮮芸術座事件で検挙。三八年頃に帰国。一時『東亜日報』などに評論を書いたが、やがて立場を転じ日本側御用誌紙『国民文学』『東洋之光』『毎日申報』『緑旗』に執筆を始めた。三九年十月朝鮮文人協会発起人。四三年四月『亜細亜詩集』により国語文芸総督賞受賞。同年六月朝鮮文人報国会支部幹事を勤めるなど、皇民化政策の協力者的姿勢に終始した。解放後は沈黙状態を続けたが、のち大衆文学に転じたという。

**宋鎮禹**（一八九四〜一九四五）全羅南道潭陽出身。号は古下。三歳で漢学を学び、のち昌平英学塾に入学。同級生に金性洙がいる。一九〇八年渡日して早大で学ぶが、日韓併合により一時帰国。再度渡日して明大法科を卒業。この間、留学生親睦会を組織する。帰国後金性洙とともに、教育事業による民族復興を志す。一七年中央学校校長となる。三・一独立運動で検挙され一年余の獄中生活を送る。出獄後『東亜日報』社長に就任。その後も政治迫害者の被護にあたるなど、穏健な民族主義者の立場から朝鮮人言論界の重鎮として活躍。解放後、韓国民主党を結成し首席総務の任につき、左翼勢力に抗して政府樹立に奔走するが、金九の刺客韓賢宇によって暗殺された。

**金俊淵**（一八九五〜一九七二）全羅南道霊岩出身。京城高等普通学校卒業後、一九一七年日本へ留学。岡山第六高校、東大法学部卒業。新人会に加入。東大大学院助手となり、その後ベルリン大学に学ぶ。二五年帰国して『朝鮮日報』に入社。同年特派員としてモスクワに出張。翌年第三次共産党（ＭＬ派）結成に参画し党書記長となる。二七年『東亜日報』編集局長に就任。二八年第三次共産党検挙により、七年間の獄中生活を送る。出獄後『東亜日報』主筆に復帰。三六年ベルリン・オリンピックのマラソン優勝者孫基禎の日章旗抹消記事により、同社を引責辞職。解放後は韓国民主党の労働部長、宣伝部長となり、李承晩政権の法務部長官も勤めた。

**呂運亨**（一八八五〜一九四七）京畿道楊平出身。一九一四年中国に渡り、南京金陵大学に学ぶ。一九年四月上海臨時政府に参加、外交委員となる。同年十一月渡日し、日本政府要人に朝鮮独立の必要性を説く。二一年高麗共産党に入党。モスクワの極東被圧迫民族会議に出席。三〇年上海で日本官憲に逮捕されソウルに護送、三年間の獄中生活を送る。出獄後『中央日報』社長に就任。四二年治安維持法違反により一時逮捕。四四年秘密結社建国同盟、農民同盟を郷里で組織。解

放と同時に建国準備委員会委員長となり、総督府との終戦処理にあたった。朝鮮人民共和国副主席に就任。また人民党を結成し左派の調停者として尽力する。四六年七月民族派代表金奎植と協力、左右対立の激化阻止を策す。同年九月ピョンヤンを訪問し金日成、金科奉らと会見。同年十月南労党の結成に反対し、穏健左派の社会労働党（のち勤労人民党）を組織するが、翌年七月ソウル東大門付近で暗殺された。

**安在鴻**（一八九二〜一九六五）京畿道平沢出身。一九一四年早大政経科卒業。一六年上海へ渡航し同済社に加入。帰国後中央高等普通学校の教監となる。三・一独立運動の際、大韓青年外交団を組織して上海臨時政府と連絡、検挙され三年間服役。二三年『時代日報』創刊に参与し理事兼論説委員を勤める。その後『朝鮮日報』社長兼主筆として十年間在職。二七年民族統一戦線組織「新幹会」総務となり、検挙され八ヵ月服役。三六年臨時政府との内通が発覚して二年間投獄。四二年朝鮮語学会事件で一年間収監された。解放後、建国準備委員会副委員長となるがすぐに脱退。国民党を結成して党首の任につき、さらに韓国独立党中央委員となる。その後、非常国民会議委員、左右合作委員会委員、南朝鮮過渡立法議員などを歴任。四七年米軍政庁初代民政長官に就任。五〇年朝鮮戦争時に北へ連れさられたという。

**朴憲永**（一九〇〇〜五五）忠清南道礼山に商人の庶子として出生。京城高専在学中三・一独立運動に遭遇。二〇年上海へ赴き、共産党イルクーツク派が設立した社会主義研究センターで学び、高麗共産党（イルクーツク派）に入党。二一年モスクワの極東被圧迫民族会議に参加。二二年帰還後すぐに国内共産党創設のため朝鮮に派遣されるが、新義州で検挙され一年六ヵ月服役。出獄後の二四年四月『東亜日報』に入社。同年九月『朝鮮日報』に転じて社会部記者となる。二五年四月朝鮮共産党（第一次党）結成に参画。同時に高麗共産青年会を組織して責任秘書となる。同年十一月逮捕。二七年裁判中に精神の異常（佯狂説もある）をきたし釈放。二八年満州に脱出。翌年モスクワに向かい東方共産大学で就学。三二年上海に帰還して活動するが、翌年逮捕されソウルに護送ののち六年間服役。三九年出獄後、地下組織京城コム・グループと連絡し、以後その指導者として活躍。四二年地下組織が壊滅、単身光州に逃れ煉瓦工場の人夫となって潜伏生活を続けた。解放後、ソウルで朝鮮共産党を再建し総秘書の任につく。また呂運亨と結んで朝鮮人民共和国の樹立を策した。四六年二月民主主義民族戦線を結成(議長)。同年十一月南朝鮮労働党を結成(副委員長)。ほどなく北朝鮮に移り、南労党最高責任者として南朝鮮の反米・反李承晩闘争を指導した。その後、北朝鮮政府副首相兼外相の要職についたが、五三年南労党派粛清により失脚。五五年十二月〝米帝スパイ〟の罪名で処刑された。

**李承晩**（一八七五〜一九六五）黄海道平山出身。一八九七年アメリカから帰国した徐載弼が組織した独立協会に参加し、政府側暴力団と争って逮捕さる。一九〇四年出獄後高宗の密書を持ってアメリカへ渡り、日本の勢力の駆逐に協力を求めるが意を果たさず、そのままアメリカに滞在して一九〇

八年プリンストン大学で哲学博士の学位を得る。日韓併合後一時帰国するが、一二年再渡米。以後四五年まで米本土、ハワイ、上海などで独立運動を続け、その間上海臨時政府の初代大統領などを歴任する。四八年大韓民国初代大統領となるが、六〇年四・一九学生革命によりハワイへ亡命し、六五年病没。

**金九**（一八七五〜一九四九）黄海道海州出身。本名金昌洙、号は白凡。十八歳の時東学の道にはいる。一八九四年東学蜂起に際しては指導者として活躍。その後満州に渡り義兵に参加。帰国後日本軍中尉を殺して投獄されたが、一八九八年に脱獄し僧侶となる。還俗して故郷に学校を建て人材の養成をはかる。一九〇九年安重根の伊藤博文狙撃事件に関連して投獄されたのち、翌年安明根の寺内正毅暗殺計画事件に関連しふたたび投獄。一九一九年三・一運動後に上海へ亡命、大韓臨時政府警務局長、内務総長となる。三〇年韓国独立党を組織。三二年李奉昌の天皇狙撃、尹奉吉の上海事変祝賀会爆弾投擲などを指揮。四〇年重慶で臨時政府主席となり光復軍を組織した。四五年十一月帰国し、統一自主独立路線を主張。南韓単独政権樹立に参加せず李承晩と対立、四九年陸軍少尉安斗熙に暗殺された。

**金奎植**（一八八一〜一九五二）慶尚南道東萊出身。六歳の時米人宣教師の養子となる。一八九七年米国に留学しロノック大学を卒業。一九〇四年帰国。ソウルＹＭＣＡ教師などを勤め、教会関係の指導者として活動。一九年上海臨時政府に参加し、外務総長としてパリ講和会議に出席。のち学務総長の任についた。二二年モスクワの極東被圧迫民族会議に赴く。その後も中国に在住、しばらくは上海復旦大学、天津北洋大学で英文学の教鞭をとった。満州事変後に南京に移住、臨時政府国務委員に就任。三五年七月民族主義派の抗日統一戦線を提唱、朝鮮民族革命党結成に際し主席となる。四四年重慶臨時政府副主席の任についた。解放後帰国。民族派の立場から左右合作に尽力。四六年十二月過渡立法議院議長に就任。四七年十二月民族自主連盟を組織し主席となり、南朝鮮単独選挙に反対。四八年ピョンヤンの南北協商会議に参加。その後は政治活動から離れたが、朝鮮戦争時北へ連れ去られたという。

**許憲**（一八八五〜一九五一）咸鏡北道明川出身。普成専門学校卒業。明大法科に学び弁護士となる。三・一独立運動裁判の弁論で名声をうる。その後も政治犯の弁護活動に従事。普成専門学校校長を勤めた。二七年新幹会中央執行委員となる。二九年光州学生運動の際、全国講演を行なって検挙されるが病気のため釈放。解放後、建国準備委員会副委員長、朝鮮人民共和国国務総理に推される。四六年南朝鮮新民党結成に参加。民主主義民族戦線首席議員、南労党委員長に就任。のち北朝鮮に赴き、最高人民会議初代議長、金日成大学総長、祖国統一民主主義戦線議長などを歴任した。

**李承燁**（一九〇五〜五三）京畿道富川出身。仁川商業高校在学中に三・一独立運動に参加、退学処分を受けた。一九二五年九月入党。釜山に地下組織ボルシェビィキ社をつくり活動。三一年満州事変後、大邱の日本軍兵舎などに反戦ビラを

まき逮捕。その後も三七年、四〇年に逮捕され、転向して四一年以降は食糧営団理事を勤めた。解放後は長安派共産党に参加するがすぐに朴憲永派に転じた。党機関紙『解放日報』主筆、南労党中央委員となる。四六年中に北朝鮮へ移り、司法相の任につく。五〇年朝鮮戦争時、ソウル特別市臨時人民委員会委員長として赴任し占領行政を指導。その後も朝鮮労働党中央委員会秘書、人民検閲委員会委員長の要職にあったが、五三年スパイ及び武装反乱謀議などの罪で、林和らとともに処刑された。

**李舟河**（一九〇五〜一九五〇）咸鏡南道元山出身。日大政治科中退。一九二七年第三次共産党再建工作に参加。三〇年第一次元山赤色労組事件で検挙され、四年間服役。三七年鉄道労組事件で一時国外に去る。解放後、元山での共産党再建を指導。朝鮮共産党再建にあたって政治局員に推される。四六年ソウルに移り活動するが一時逮捕。南労党非合法化後、金三竜とともに地下責任者として闘争を指導。五〇年三月逮捕され、朝鮮戦争勃発直後に処刑されたという。

**趙素昂**（一八八七〜?）京畿道出身。本名趙鏞殷。明大法科卒。帰国後、朝鮮法学専修学校で教鞭をとる。三・一独立運動後に上海へ亡命。大韓臨時政府樹立に参加、国務委員兼外務部長としてジュネーブの万国社会党大会に出席。のち国務院秘書長などを勤めた。三〇年金九らと韓国独立党創設。三五年朝鮮民族革命党結成に加わるが、まもなく脱退。以後は金九と行をともにし、光復軍幹部として活躍した。解放後帰国。韓国独立党副委員長に就任。四八年ピョンヤンの南北協商会議に出席。五〇年五月全国最高点で国会議員に当選するが、朝鮮戦争勃発後に北へ連れさられたという。

**金三竜**　忠清北道忠州生まれ。ソウル永登浦の工場労働者出身。一九三四年朝鮮共産党日本総局の幹部李載裕が帰国し党再建工作にあたった際、その活動メンバーとして参加。三七年組織が発覚、一時郷里へ逃れた。再度ソウルへ戻り、地下組織京城コム・グループを結成。出獄した朴憲永に協力し、組織部責任者として労働者のオルグ活動に尽力。四〇年逮捕され全州刑務所で服役。解放後、朴憲永と同行してソウルに帰還。朝鮮共産党再建に加わり組織局員となる。以後朴憲永派の中核として活動。南労党非合法化後、地下責任者の任につくが、五〇年三月ソウルで李舟河とともに逮捕され処刑された。

**李始栄**（一八六八〜一九五三）ソウル出身。号は省斎。一八九一年李朝の科挙試験に及第。平安道観察使、法部民事局長を務める。一九一〇年日韓併合の時、一族五十四名を連れて南満州へ亡命。軍官学校を設立して義兵指導者の育成をはかる。一三年北京に移住。三・一独立運動に際しては、北京で本国の蜂起を支援。のち上海に赴き臨時政府に参加。法務総長、財務総長、議政院院長の任についた。解放後に帰国。大韓独立促成国民会を結成し委員長となる。四八年韓国初代副大統領に就任。五一年李承晩に抗議して辞職。五三年避難地釜山で死去。

**金性洙**（一八九一〜一九五五）全羅北道高敞出身。号は仁村。一九一四年早大政経科を卒業後、世界一周を試みたのち

帰国。一五年中央中学校創立。一九年京城紡織設立。二〇年『東亜日報』を創刊し、普成専門学校（高麗大の前身）の経営を引き継いだ。民族資本家の立場から、民族運動を支援し教育文化事業に多くの足跡を残した。解放後、韓国民主党創立に参画。米軍政庁朝鮮人顧問となる。五〇年第二代副大統領に就任するなど、民主国民党（韓国民主党を改編）の重鎮として活躍。

**申翼熙**（一八九四〜一九五六）京畿道広州出身。漢城外国語学校に学んだのち渡日。早大政経科卒業。留学中に学友会を組織して民族運動を行ない、機関誌『学之光』を発行。一九一七年帰国後、普成専門学校で教鞭をとる。三・一独立運動の時、上海へ亡命。臨時政府樹立に参加し、外務次長、国務院秘書長、内務総長などを歴任した。解放後に帰国。大韓独立促成国民会副委員長となる。立法院議長、国会議長を勤め、野党民主国民党、民主党の指導者として活躍。五六年大統領選挙に立候補し、遊説中に急死。

**申性模**（一八九一〜一九六〇）慶尚南道宜寧出身。普成専門学校卒業。日韓併合後、ウラジオストックに亡命。独立運動に加わるが、のち上海に赴く。一九一三年呉淞商船学校を卒業。さらに南京航海大学に学び、ロンドン航海大学卒業、イギリスの一等航海士を取得し、英国船船長、インド商船会社顧問を勤めた。解放後に帰国。大韓青年団団長、内務部長官、国防部長官の任についたが、五一年居昌事件、国民防衛軍事件のため解任された。

**趙炳玉**（一八九四〜一九六〇）忠清南道天安出身。平壌崇実学校、延禧専門学校卒業。一九〇四年渡米。コロンビヤ大学卒業。二五年帰国後、延禧専門学校で教鞭をとるが、左翼教師のかどで辞職。ＹＭＣＡ理事を勤めた。二七年新幹会に参加し財務責任者となる。二九年光州学生運動の際、背後使嗾者と目されて逮捕され三年間服役。三二年『朝鮮日報』に入社し専務兼営業局長。三七年修養同志会事件で二年間服役。解放後、韓国民主党結成に参画。米軍政庁警務部長となり、左翼弾圧の任にあたった。韓国政府樹立後、大統領特使、国連代表などを歴任。朝鮮戦争時は内務部長官として、大邱防衛の指揮をとった。のち李承晩と衝突して辞職。六〇年大統領候補となるが、ガンのため死去。

**許政**　一八九六年慶尚南道釜山出身。普成専門学校卒業。一九一九年三・一独立運動で中国へ逃れ、上海臨時政府に参加。その後はフランス、アメリカで亡命生活を送った。解放後に帰国。交通部長官、社会部長官、首相代理を歴任。五七年〜五九年ソウル市長。第四次日韓会談では、韓国側首席代表として来日。六〇年学生革命後、大統領代理を勤めた。

**尹潽善**　一八九七年忠清南道牙山出身。英国エジンバラ大学卒業。大韓臨時政府議政院議員。解放後、米軍政庁農商局顧問、『民衆日報』社長を勤めた。四八年初代ソウル市長、四九年商工部長官となる。野党民主党の指導者として活動し、六〇年学生革命後に第四代大統領に就任。軍事クーデター後も大統領にとどまるが、六二年政治浄化法公布により辞任。六三年朴正熙と大統領を争い敗れた。現在、民主化闘争の元老格として活躍。

張勉（一八九九〜一九六六）京畿道仁川出身。水原高等農林学校、ソウルＹＭＣＡ英語学校卒業後、一九一九年渡米。二五年マンハッタン・カトリック大学卒業。帰国後、天主教平壌教区の教会に勤務。三一年ソウルの東星商業学校校長となり、四五年の解放まで在職。四六年政界に転じ、初代駐米大使、国務総理を勤めたが、五二年李承晩を批判して辞職。五五年民主党を結成して最高委員となり、副大統領に当選。六〇年学生革命後に国務総理となるが、翌年軍事クーデターにより失脚。六二年政治浄化法公布のため、政治生活を断たれた。

## 不安と絶望を一掃せよ

≪注≫『東亜日報』一九五〇年三月二十二日付社説

### 一

国民はいま深刻な不安の中にさまよっている。いくら努力しても生きる道が漠然としており、頼ろうにも頼るところがなく、信じようにも信じるべきところがないのをいかんせん。五月選挙を断行するという政府の声明が出てから、わずか数日にして、またも十一月に延期するかもしれないという発表があった。一年後十年後の計画はおろか、五日後の事態すらも見透せない政府であり、そして、右往左往し朝令暮改する政府であるならば、その政府を国民はどうして信じられようか。国民がいくら信じ従おうとしても、政府自身が信じるなというにいたっては、天を仰いで嘆息する以外になんの方法があろうか。嘆息と虚無感と彷徨と絶望以外に、なにを求めることができようか。民主政治を推進させるため、責任内閣制に改憲しようといった時には、牽強付会の臆説をもって、これを不可としながら、不通過となった次の瞬間には任期を延長するため、改憲しようという言葉が、どこから出てくるのか。国民との公約に反し、阿諛と政争にうつつをぬかすことが、民主政治を

推進させることよりも急を要するというのか。いまや国民はすべてを知った。改憲案が否決されたのは、私心と阿諛と政争の犠牲になったのだということを。

## 二

もともとわが国の経済体制が植民地的跛行性を内包しているため、E・C・Aの援助があるからといって、急速に回復されることもあるまいが、それでも、誠心誠意順理していくなら、希望なりとも持てるではないか。配給するといってはごまかして、私腹ばかり肥やそうとするのだから、うまくいくことなどなにがあろうか。配給票を昨年末に発行し、現品を渡さないでおいて、援助物資の価格が時価の八割に決定されたため、その価格を吐き出せとか、ダメだとかいっている最中に、権力の背景をもった者や、料理政策や贈賄政策でとりいった者には、多少有利にしてやる有様である。これでは、どこに順理を求めることができようか。このように私心に充満しているのでは、公平無私であるべき政策がうまくいくはずもない。はなはだしきは、無償物資で秋穀買上げの時に配給した肥料券についてまで、五割を増額するとかダメだとかいっている。小升一斗（五升）につき六百ウォンで買上げ、千四百ウォンで配給したのだから、小升一斗あたり八百ウォンずつ返還することは夢にも考えないくせに、その当時千ウォンで配給した一カマス肥料券に限っては、千五百ウォンに引き上げるとか上げないとかいっている。常識では考えられない措置である。国民に対する約束は敝履のごとく破棄しながら、権力を持った者は、なにをしても構わないというのでは、誰がその人間を信じようか。そうした人間に満ちた政府を、国民はどうして信じられようか。信頼はなく、朝令暮改し権勢万能主義で進んでいくのならば、個人の場合もうまくいくはずがないのであるから、いわんや国家においておや。無知無能無策、これにすぎたるものはない。ああ、蒼生の行くべきところは何処ぞ。

三

銀行は金庫を閉ざし、産業資金さえ融通されず、購買力のない民衆は、喰いつなぐことがアリラン峠を越えるごとくに難しいのに、何々福票、何々債券、何々寄付金があり、洞班員としても、体面維持が難しいのに、学校までもがむしりとっていく。六、七千ウォンもする卒業記念写真代を持ってこい、何々先生が転勤するからいくら、何々先生がお産をしたからいくら、病気になったからいくら、あれやこれやなんやかや——これが生き地獄でなくてなんであろうか。かてて加えて、背景闘争時代といい、道を歩いていて、古い友だちと話をしたら、街頭連絡ではないかとされ、ひどい目にあわされる。飛行機に乗り、水を飲み、「電話」(いずれも拷問の種類)までしなければならない世の中である。口はあるがしゃべれず、耳はあるが聞くことができず、目はあっても見ることのできない世の中になってしまった。ああ! この国の民主主義はどこへ行くのか。ああ! われわれに信頼をくれ、安定感と明朗をくれ。どうすれば食べることができ、生きることができ、生を楽しむことができるかを教えてくれ。これを明示することは、国民に対する為政者の責任である。この責任をはたすことができないならば、退陣せよ。私心と私利しか知らない官吏のために、食事もできない国民が、いかに負担に耐えられようか。国民をこの生き地獄のような不安と絶望から救え、これは為政者の責任でなくしてなんであろう。これができないならば、即時退陣すべきであろう。そして、仕事のできる愛国者たちに席を明け渡せ。実践で証明する時まで、国民は信じないであろう。信義を重んじ、公平無私に働けないならば、一日も早く退陣せよ。

——長璋吉訳

# 平面性の文学の課題

長 璋吉

## 1

ご承知のように、朝鮮戦争が起こったのは一九五〇年の六月です。五三年七月に休戦協定が調印されますが、以後、朝鮮半島での南北間の交流は、民衆というカテゴリーでは、まったく失われてしまうわけです。したがって、きょうの私の話というのは、地理学上厳密にいえば、三十八度線以南地域の文学運動について語る、ということになります。

さて、どこから話を始めたらよいかわからないのだけれども、まあ、日本で韓国の小説などがとりあげられる場合、たいていは余儀なくしてとりあげられることが多い。つまり、なにか社会的な問題なり、事件なりが起こった時に、その都度、作品が紹介されるわけです。このことに関しては、日本人の韓国に対する姿勢という側面が、もちろんあります。けれども、韓国の小説自体の中に、そうなりうる根拠がもともと内在しているのだ、というふうにもいえるようです。端的にいって、時事的な事柄ですと、非常にわかりやすい。しかも、韓国文学の場合ですと、ある種の主義、思想といったも

のが、そこでは強烈に主張されている。ですから、文学それ自体として論議される以前に、状況にあまり密着してしまい、いわば一個の社会問題のごとく、作品が受けとられてしまう。そういうような気がするわけです。この問題について、普通、韓国人自身の内側からの批判としては、よくいわれていることですけれども、韓国の文学には哲学がない、形而上学がないのだ、という。ところが七〇年代にはいって、そうした内部的批判に対する回答が出始めている。正面切ったものではありませんが、迂回したような形での回答が、韓国の文学者たちによって、いま現に行なわれつつあるようにみえる。まあ、そんなところまでなんです。韓国文学への、私の関心範囲といったものは……。

実は、私が韓国の小説なぞを読み始めたのは、文学にいかれた、ということではなかったのです。文法の一素材として、助詞について勉強していたのですが、その助詞の使い方の資料を集めるため、韓国文学をやりだした。要するに、根っからの文学への興味ではなかった。そういう個人的理由もあるのだけれども、それにしても、韓国の文学には、共感しにくい部分があります。それで最近では、文学よりも、政治学とか社会学のほうが面白いのではないか、という気さえしております。というのは、内容がきわめて平板というか、平面的に思えるのです。貧困を扱うとか、不正腐敗の糾弾とか、あるいは反日なり反共、権力に対する抵抗とか……。しかし、そうしたテーマが、いわばデッサンの段階のままで終わっている。そんな作品群があまりに多すぎる。単に社会状況の素描にすぎないのならば、むしろ社会学や政治学のほうが、有効な手段たりうるのではないか。あるいは、民俗学というものも考えられるわけです。

もっとも、別の観点に立てば、韓国の文学者は、現実の政治問題なり社会問題に対して、鋭敏に反応して書ける姿勢を、つねに持っているのだ、というふうにもいえます。これはやはり、大きな利点だと思います。たとえば南廷賢（ナムジョンヒョン）とか、崔仁勲（チェインフン）という作家がいます。前者の「司会棒」「現場」、後者の「総督の声」といった作品は、日韓条約が締結される時期に前後して書かれている。作品の内容に少し触れますと、「司会棒」は、解放前に輝かしいレジスタンスの経歴を持つ、老いた独立運動家を家長とする一家庭が舞台で、その娘や息子たちの日常生活が、たぶんに戯画化されて描かれている。とりわけ鮮明なる印象を与えるのは、娘のソンジャで、彼女はこれまでアメリカ兵の〝オンリーさん〟だったのだが、時代の空気を敏感にキャッチして、いまやアメリカ兵から日本人商社員にターゲットを平行移動し、英会話をやめて、日本語の習得にいそしんでいると……。そういう皮肉な作品です。

また「総督の声」というのも、はなはだ逆説的な小説なんです。ある日、ソウルのラジオ放送が突然中断される。そして、韓国の地にひそかに潜伏し続けていたと称する、日本の旧朝鮮総督の演説がスピーカーから流れだす。〝われわれの支配の瞬間がふたたび訪れたのである〟という趣向になっている。韓国人にとっては、植民地時代の悪夢がいっぺんに蘇生するわけでしょう。まことに煽情的といってよい作品です。いずれにしても、日韓条約締結にいたる政治状況の中で、このような小説が書かれていることについては、相当に注目してよいのではないか、と私は思っております。

話をまた、韓国文学の平面性という問題に戻しますが、その理由として、これもよく挙げられることですが、儒教の影響という指摘があります。儒教の持つ現世主義的な哲学、これが具体的な社会生

活の中で、韓国人の墨守すべき行動様式をあらかじめ決定してしまっている。要するに、ガンジガラメになって、身動きができないというわけです。定まった規範に合致するか否かが、つねに問題とされる。そうなれば、一種の形式主義が先行し、肝心かなめの個々の人間への追求が稀薄化せざるをえない。ために、立体感のない平面的な文学になってしまうのだと……。もちろんこの批判については、当然引き合いに出されてくるのが、西欧近代文学における神と人との相剋の問題であるわけです。しかし朝鮮には、ヨーロッパでいう神という存在は、日本と同様にもともとありませんから、困ったことになる。批判が批判のままで立ち止まってしまっている、とでもいいましょうか。どうも話が抽象的になってしまったようです。私自身、儒教の問題はよくわかりませんので、このことについては、そうした批判が、韓国人自身によってなされている、という紹介にとどめておきたいと思います。

もっとも、さきほど話にでました崔仁勲は、神がないということを逆手にとったような形で、こんなことを述べています。西洋での神は、朝鮮では家であると……。神への反逆、あるいは神は死んだという認識が、ヨーロッパ近代主義の原因だというのなら、朝鮮には、かつて存在した家なるものは失われたのだ。したがって云々……、というふうに語っているんです。つまり、儒教的現世主義を基盤として成立している、家での行動様式が、そのまま社会生活をも律する行動様式であった場合には、それに従うか、反抗するか、していればよかったわけです。けれども、家はなくなったという明白な認識を持ち、家という伝統的な規範の外に出て社会を見つめなおす。すると、たちまちどうしたらよいかわからなくなる。そういう地点に、われわれは現在あるのではないか、という結論になっている

わけです。この崔仁勲がいう、朝鮮人にとっての神の問題だという、家の問題については、たしかにほとんど論じられていません。いままで韓国文学はそこのところを触れずに通ってきた。そういう感じが私にはいたします。

具体例をあげますと、李炳注（イービョンジュ）という、一九二一年生まれの作家がおります。韓国ではまあ、ちょっと珍しいタイプに属する作品を発表している。その一つに、六八年に書かれた「関釜連絡船」という小説があるんです。下関釜山間を常時航海する連絡船が、そのまま題名になっていることでもおわかりのように、過去現在の日韓関係史といったものが、最初から重要な伏線として、作品の背後にひそめられているわけです。柳泰林（ユテリム）という知識人が主人公で、朝鮮戦争の混乱期にパルチザンにさせられ、行方不明になってしまう話なんです。その構成方法をみると、なかなかひねった手法が用いられている。小説の発端は、柳泰林が生前に書き残した手記があったということです。その手記を出版しようとする日本在住の柳の友人がいる。出版にあたり、柳の経歴が不明なので、韓国にいる知合いに問い合せの手紙を出した。ところで、この三人は、戦前の日本留学生時代には、同級生だったという関係になっているのです。つまり日本と韓国とに、いまは別れ別れに住んでいるかつての同級生二人を結びつける、いわば〃連絡船の役割〃を行方知れずの柳泰林がになっているわけです。しかも、柳の手記に付されていた題名もまた〃関釜連絡船〃なる言葉であったと……。そして、日本からの問い合せに答えるのが、この小説の語り手です。日本在住の同級生が知らなかった、柳の軌跡が語られていく中で、手記もときほぐされていき、柳泰林という一知識人の全貌が、しだいに明らかになっていきま

す。いうまでもなく、この三人の人間に、作者の思想が仮託されているわけです。三者はそれぞれに、自分の体験を通し、自己の知性にすがりながら、考えうる最善の方法を懸命に選択しようとしている。いずれにしても、当時の若い知識人たちの悩みというものが、非常に巧みに描かれている作品だと私は思います。ただし、こうした作品構成の一端をみてもわかるように、ある種の韜晦趣味といった感じが強いせいでしょうか。李炳注については〝中国浪人風の悪質分子〟などといった悪口も、陰ではいわれているようです。

どうも話が別の方向にいってしまいました。問題にしている家との関係についていいますと、「関釜連絡船」という小説は、まるっきり無葛藤といってよい作品なんです。主人公の柳泰林はかなり大きな地主の息子です。これが解放後、左右対立の激しい闘争時代に、高等学校の教師になる。柳自身は左右どちらの派にも与せず、教師の立場から、生徒たちをなんとか闘争の犠牲にならないようにと図ります。卒業させようとして、いろいろな努力もいたします。しかしけっきょくは、現実の闘争の内に巻きこまれ、パルチザンとみなされて、行方不明になってしまうのだけれども……。そこで、柳泰林の父親はというと、これは大変な好人物として登場している。息子はいたって自由気ままに社会的活動を行ないますが、全然干渉しません。まったくの自由放任です。大地主である昔風の父親と、近代派らしき息子との間には、矛盾もなければ対立も生じない。というよりもむしろ、父親が守っている家というものが、息子にとっては保護地域にさえなっているようにみえる。逮捕された左翼の学生を助けるため、父親はその身柄引き受けの保証人になったりもします。もちろん古いタイプの人間

で、表に立って行動するわけではありません。後方にしりぞいたままの形であって、ともあれ、善良この上ない好人物としてのみ描かれている。

家との無葛藤ということに関しては、もっと若い作家についても、同じような傾向が指摘できそうです。李炳注より二十歳も若い金承鈺(キムスンオク)という作家がいます。彼は一九四一年の大阪生まれで、「ソウル一九六四年冬」という小説集を刊行している。その中の「霧津紀行」という一篇が、冬樹社発行の『現代韓国文学選集』にはいっております。金承鈺は主に、田舎からソウルへ飛び出してきた学生や、若い知識人たちの問題を、いろいろの角度からとりあげてきた作家です。ソウルへ飛び出してはきたものの、そこには、生活を確立するアテがなにもない。つまり、社会的に帰属する場所がないから、曲芸みたいな生き方を強いられる。頼りになるのは言葉だけだという感じの作品になっています。凝縮すべき依拠集団を持ちえない、バラバラになった個々人の成立過程が、描かれているといってもよいでしょう。しかしここでも、家という問題は、なぜか見事に抜け落ちております。

それなら、現在の韓国では、家という事柄がすでになんの問題意識もはらんでいない、過去の遺物にすぎないのだろうか。私には、どうもそうだとは思えないのです。これは極端な見方ですけれども、そうした自己の原点といってよい場が、たとい意識的にではないにせよ、簡単にみすごされている。その結果、ちょうど反比例する形で、ことさら性急に社会問題のほうへ眼が向いてしまうのではないのか。だから、作品自体の骨格は意外にひよわであって、たぶんに観念的であり、実在感というものが非常に弱くみえる。そんなふうに、私は思っています。

ただ観念に流れて実在感が稀薄なのは、あるいは開化期以降、朝鮮文学に共通した特長なのかもしれません。開化期に活躍した花形作家は、ご存知のように李光洙(イーグヮンス)です。そして、一九一七年に発表した「無情」という長篇小説が、彼の代表作であるわけです。これは朝鮮近代文学の、ある意味での出発点を画した作品だといわれています。小説の内容は、父親が獄に下ったために妓生(キーセン)となった娘と、日本留学帰りの開化青年との〃一大恋愛小説〃であって、儒教批判と開化思想とが、合体したような格好になっております。書かれた場所は、総督府の機関紙『毎日申報』で、当時大変な人気を博し、新聞の売れゆきを急速にのばしたと伝えられています。それで、李光洙の儒教批判なんですが、けっきょくは平面的な批判にすぎなかったようです。後年になると李光洙は、仏教と儒教を折衷したような修養機関をつくり、そういうところへ、ごく自然にはいりこんでいってしまいます。

要するに、中国における魯迅のような方法で、儒教なり伝統的な家なりに肉迫して、その内在的な批判を試みた作家は、朝鮮文学ではほとんどなかったといえます。それ以前に、日本の植民地支配という外圧があり、内在的批判が発酵する時間を許さなかったという状況があったことは、もちろん、説明するまでもないわけですが……。

ここでまた、作家の崔仁勲の意見を紹介しますと、彼は五〇年代の後半に、次のような結論を提出しているわけです。儒教批判などいまやもう不可能である。なぜかといえば、韓国では〃風俗と論理の乖離〃という思想状況が、すでに生じているからであると……。解放後、アメリカからは民主主義、フランスからは実存主義というふうに、いろいろな思想が韓国に輸入されました。しかしながら、民

主主義が育った市民的基盤、あるいは実存主義を生みだした思想史的蓄積、そうした、いわば思想の根の部分、母胎といったものまでは、輸入することなどできるわけがありません。そうなりますと、せっかくもたらされた理論も、根無し草のごときものと化す他はなかったのであります。つまり、輸入された思想は、所詮先験的な論理なのであって、韓国独自の風俗と有機的に結びつく契機がない。そこで、論理は、いつまでたっても中ブラリンのまま、やがて知識人の口舌を飾る衣装になりはてました、というわけなんです。したがって、現状を克服できる理論は生まれようがなかったのだと……。

崔仁勲は、この〝風俗と論理の乖離〟という主張のもとで、李承晩(イースンマン)派によって解放後消滅させられていった、金九(キムグ)ら民族派への哀惜の言葉をいくつかの作品の中に綴っています。しかしこれは、崔仁勲が民族派の同調者であることを、かならずしも意味するものではなく、彼はそれを克服の対象として見ていたのです。民族の概念は、韓国人にとってもっともわかりやすい家族、氏族の延長線上に想定できる。その政治体制ならば、自前の風俗に密着した論理の克服の射程内に含みうる。それによって、韓国は自立した精神史を歩みえたはずだというのです。さきほどあげた「総督の声」は、この乖離に乗じて表われるものがなんであるかを、示しているように思われます。そして、その後に崔仁勲が新たに考えたのは、どうも仏教による状況の克服ということらしいのですが、彼は最近、アメリカへ行ったまま帰ってきません(注・一九七六年帰国)。作品も発表しておりませんので、彼の意見がどう発展しているのかは、さっぱりわからないわけです。

だいぶ話があちこちに飛んだりして、聞きづらかったと思います。現在の韓国文学に対する、私個

人の気ままな雑感を語ってみたわけです。それではこのあたりで、一応問題を整理し、初めに述べました、七〇年代の〃新しい文学の芽〃といったものに焦点をあてることにいたします。

韓国の現代文学では、朝鮮戦争が終わった前後に、多数の新人作家が輩出してきております。彼らは貧困を描き、朝鮮戦争で精神的にも肉体的にも傷ついた人々を描いた。もとより、こうした素材自体に目を向ければ、五〇年代の作品も、六〇年代以後の作品も、一様に似かよっているわけです。しかし、作者の創作態度、表現の方法、そういうものに注目してみていくと、やはり目立った変化が起きていることがわかります。五〇年代の作家たちの特長を、いましごく乱暴に定義してみますと、作者の生活感覚、あるいは生活の実態から対象を追うのではなく、その前に、一定の価値基準がおかれていた。つまりそれが、実存主義であったり、民主主義であったり、そうでなければ、儒教的な倫理であったりしたわけです。ですから、悪くいえば、一本調子の作品が生まれやすかったといえます。当時流行した言葉が、証言の文学、告発の文学というものであったといえば、ある程度納得してもらえるかと思います。ところが、六〇年代の終わり頃から七〇年代にはいると、従来とは違った、少し異質の文学が出てくるのです。もちろん、事実はそう単純ではありません。ことは文学運動ですから、事態はもっと複雑で、錯綜した形になっているわけですけれども……。それから、さきほど紹介した崔仁勲の〃風俗と論理の乖離〃論に言及すれば、この間の変化のプロセスにあって、五〇年代文学がぶつかったある種の停滞を破らんとした、問題提起だったということです。

新しい作家群の出現、といいましても、年齢的には前の作家たちとそれほど開きはありません。名

前を挙げますと、朴泰洵（パクテスン）、この作家は私より一歳ぐらい年下だと思います。他に黄晳暎（ホアンソクヨン）、趙善作（チョウソンジャク）、それから詩人の趙泰一（チョウテイル）といった人たちで、ほとんどが一九四〇年前後に生まれている。朴泰洵には〈外村洞シリーズ〉という作品があります。このシリーズものの最初の作品が書かれたのは、六六年の秋で、なんと訳したらよいかなあ。「懐しの丘の上」とでも一応訳しておきましょうか。この作品は避難民の部落にはいって、そこの人間たちの生活を描写したものです。黄晳暎は「客地」という小説を書いています。これはある干拓工事現場の労働者が、ストライキを組織しようとして、うまくいかないといった内容のものです。趙善作は「栄子（ヨンジャ）の全盛時代」というのを書いています。これは映画になってだいぶヒットしたものですが、片腕の娼婦の物語です。趙泰一には「国士」という詩集があります。私はこの八月〔一九七五年〕にソウルへ行きましたが、「国士」は発禁になっておりました。そのうちの何篇かが『新日本文学』で紹介されていますね。

さて、この一群の新しい文学者たちの異質性は何かといえば、五〇年代作家たちに共通していた、理念や観念の先行型ではないということです。それのアンチといったらよいかなあ。庶民の風俗、論理という観点から描き始めているように思われます。庶民の中に宿っている論理、いまだ未知なるものとして残されている、その生活の実態、そこへはいっていく。そして、前もって与えられた理念ではない、なにものかを捜そうとしているのではないか。ある韓国の若い批評家が、こんなことをいっております。西欧や日本では、ある階層を特別に選びだして描くことが、作品として成功することはもう望めないようになっている。けれども、韓国においてはそうではない。庶民、あるいは市民とい

う素材自身が内包している意味においても、有効な方法なのではないかと……。もっとも、その理由はなにも述べておりません。そこで、若い批評家のテーゼを受けて、私が独断的にいいますと、庶民の生活を内側からふくらませて描く。するとそこには、なぜだかは不明だが、ともかくも可能性がある。もしそうなら、七〇年代作家たちの志向性とは、おそらく〝反英雄主義〟ということになるのではないか。そんなふうに、私は一人合点しています。

反英雄主義の問題に関連して、少し別の話をすることにします。ついこの間、詩人の姜舜さんの講演を聞きにいったのです。金芝河の詩集を訳されている方です。彼はその講演で、朝鮮文学の姿というものを表わすものとして、二つのものをあげていた。それはハンの文学とニムの文学ということなんです。この二つの文学については、よくいわれていることなんだけれども、姜舜さんの解釈というものが、私には非常に面白かったのです。ハンは恨みという言葉です。で、次にニムなんですが、これは日本語に訳すと、恋しい人といった言葉になるのですが、普通は祖国とか民族とかに解されることが多い。金素雲編の『朝鮮詩集』に李陸史の「青葡萄」という詩が収録されている。その第一章＜わがふるさとの七月は、たわわの房の青葡萄……＞のふるさとがニムなわけです。またこれは大変有名な詩で、韓龍雲の「ニムの沈黙」というのがありますが、このニムが祖国あるいは超越的なあるものを象徴するとされています。金素雲は「愛人の沈黙」と訳していますね。まあそんなようにニムは、たくさんの意味内容が含まれた言葉であるわけです。それで、李陸史の詩に「曠野」というのがあり、白馬にまたがった超人が出現し、荒野に向かって歌うといった内容のものです。この詩をとり

あげて、姜舜さんは、ニムの文学とは英雄待望の文学である、そう語っていたのです。ニムを英雄とする解釈、これは私、はじめて聞きました。実に面白いなあと、とても感心してしまったわけなんです。

この姜舜さんの解釈を、さきほどの五〇年代文学と七〇年代文学との対比に引きつけてみると、現状を超人によって克服せんとする思考、これは、五〇年代の理念先行型の文学になると思うのです。まあ、ひっくり返せばニヒリズムともいえます。現状はどうみてもいかんともしがたい。そこで、英雄ないしは超人といった超越的なものによって、現状の克服を願う。あるいは克服への望みを表現するわけですから……。するとその時に、ハンの文学が出てくるんです。なにかを待ち望むのだけれども、その実現は阻まれている。しかし、願望を棄てきることはできない。ハンの状態とは、そういうことだと思います。ハンという題名の映画が、韓国でつくられたこともあります。とにかく、この言葉も非常によく使われる言葉です。これまでの韓国の小説を、このハンの文学のカテゴリーでいいますと、最初からいかんともしがたい状況を設定しておき、その予定コースをまっすぐに進んでいくという、描き方ばかりだったわけです。さまざまな試みがくりかえされ、けっきょく残ったものがハン（恨み）であるのならば、感動的な物語になると思うのですが、どうも、そういう形にはならなかったのです。

七〇年代の作家たちによって、いま行なわれつつある作業というのは、だから、まさにハンの変質過程であると同時に、ニムのそれだと私は思うんです。〝英雄待望論文学の克服〟、そういうものとし

て試行されているのではないかと……。ただし、期待はしているけれども、現実の作品はまだ出てきていないようです。英雄によってしか結合しえない、英雄が現われ、そこで始めて人間が凝縮できるような社会。そうした社会というものは、どうにも不幸な社会なのではないかと、私はそう思いますので……。英雄がいなくても、力が発揮できるような方法。それをたとい手さぐりでもよいから、捜しだしてこなければならないのではないか、という気がいたします。それで、七〇年代の作家たちを、まあ相当期待してみているわけです。

最後に、七〇年代作家と反英雄主義文学という、私の一人合点が、どれだけ現実に合致しているか否か。いや、もちろんそんな大袈裟なことではなくて、最近読んだ小説の中で、ちょっと面白いなあと思ったものがあるんです。それを紹介することにして、きょうの私の話の締めくくりにしたいと思います。

作者は、一九三九年生まれの李清俊（イーチョンジュン）、前に列挙した新しい作家群の一人です。「轢き逃げ事故」という作品で、これは昨年「一九七四年」、韓国の文芸雑誌『韓国文学』に発表されたものです。

荒筋を追ってみましょう。S日報社の中堅記者裵英燮（ペヨンソプ）が、ある日深酒をして家路への帰途、裏道から突然飛び出してきた乗用車にはねられて死んでしまう。彼はなぜ、轢き逃げ事故などに遭遇しなければならなかったのか。その疑問を追いかけながら、物語が進行していきます。裵記者には、十四年間ずっと抱き続けてきたある暗い疑惑があった。十四年前というと、例の李承晩政権を倒した、一九六〇年の四・一九学生革命の時であり、これがこの小説の、別の意味での主題といってもよいでしょう。

その年の三月頃、変革の気運というものは、澎湃としてソウルの街にみなぎっていた。ここに、一(イル)波(バ)・安承允(アンスンユン)先生という、いわゆる聖人がいて、民衆の苦しみを一身に背負い、断食闘争にはいったという。噂は流れ、感激した市内のある高校生五百余名が、これに呼応する形で断食祈禱を始め、すでに五日が経過した。一波先生は若い学生たちの身を案じ、学校へ駈けつけます。そして、いたずらに世の不正腐敗を痛哭するのではなく、食を断つことによって、清らかな魂をよみがえらせることこそが肝要だと、諄々として説き聞かせます。ところが、長い間の断食による衰弱のせいか、一波先生は説教の終わり頃になって、壇上で卒倒し病院に運ばれますが、そこで、あえなくも永遠の眠りについてしまうわけです。一波先生のいまわのきわの言葉が遺され、それは〝不浄なパンは私が食べた〟という象徴的な絶句であったという。一波先生が逝去されたこと、最後の伝言に秘められたかぐわしい訓諭、二つは合体して、人々を感動の嵐に陥れずにはおきませんでした。一波先生は、私たちの身代りになって、不浄なパンを全部食べてくださったのだ。もう私たちは罪深い身ではない。正義のために立ちあがろうではないか。学生も市民も、いっせいに街頭へ殺到したと……。

十四年前のその日、裵英燮はまだ一介の駈けだしの記者であった。当時の民衆たちの気持と同じように、若き裵記者は、来たるべき変革の曙に身ぶるいし、合図の鐘を打つ誰かをひたすら待ちわびていた。だから、一波先生断食闘争にはいるのニュースを耳にして、どうしても先生に会わねばと思った。一波先生は高校生の説教に赴く前に、T日報社に立ち寄っていることがわかった。そこで裵記者は、急ぎT日報社を訪ねた。裵英燮が社長室の戸口に着いた時、ちょうど一波先生は付き人に支えら

れながら、その場を立ち去ろうとしているところだった。裴記者はふと思いついて、たったいま一波先生が会談していた社長室を覗いてみた。するとそこには、空になった三つのコップがテーブルの上に並んでいた。

あわただしい日々が流れた。いつしか裴記者の胸に、あの日の三つの空のコップが、しこりとなって残り始めていた。それは〝不浄なパンは私が食べた〟という、一波先生の遺言に関連していた。〝不浄なパン〟というのは、はたして民衆の苦悩を象徴した言葉だったのだろうか。そうではなくて、ただ単にパンを食べたという事実を伝えた言葉だったのではないだろうか……。他方、裴英燮のしだいに深まる疑惑とは別に、一波先生の余徳は世上いよいよ高くなっていった。一波思想研究会が生まれ、著作集が出版された。毎年、追悼集会が催され、年を追って盛況を呈するようにみえた。T日報社での最後の会談に立ち合った、当時の梁鎮旭(ヤンジンウク)政治部長は、いまは一波思想研究会の会長として、一波思想の普及化に精力的に取り組んでいた。そんなある日、裴英燮は一波先生の先師が、いまも生きていることを伝え聞き、その庵を訪ねてみた。先師は生前、その愛弟子を義絶してしまったとの風聞であった。黙したまま先師はなにも語らなかった。偶然なことに、梁会長も先師の庵を訪問にきていた。やっと帰りがけになって、先師が吐き出すようにいった。もともとパンに不浄も非不浄もない。不浄な人間が食べたパンが不浄なパンなのだと……。

十四回目の一波先生追悼会が行なわれた。裴記者は、ついに積年の疑惑が解けたと思っていた。断食の途中、飢えの誘惑に負け禁を破って食物をとると、それはしばしば急激な体の変調をきたし、死

に至ることさえある。やはりそうであったのか。裵英燮が目撃した空の三つのコップ、これこそ、一波先生の死因を語っていたのだ。一波先生は断食の途中、食の誘惑に打ち勝てず禁を破ってしまったのだろう。そして最後の瞬間に、一波先生は自己の罪状を告白したのだ。〝不浄なパンは私が食べた〟……。あの言葉に、高遠な思想など託されてはいなかったのだ。だが、そうではない。最後の瞬間に、自己の本当の姿を告白した一波先生の言葉こそ、実は浄らかな魂の証しであったはずだ。そう思うと裵記者には、一波先生の姿が急に親しみのある一人の人間として、ほのぼのと息づき始めてくるのがわかった。裵英燮は梁会長を訪れ、自分の考えたすべてを話してみた。そして、いつわりの一波先生が人々の心の糧などにならないため、筆をとる決心をしましたと告げた。小説の末尾は、梁鎮旭一波思想研究会会長が朝刊をひろげ、裵記者事故死の記事を読むところで終わっています。むろんのこと、梁会長の顔はポーカー・フェイスなんですが……。

　この小説、反英雄主義の問題は別にしましても、やはり時局に対して、非常に敏感に反応している作品だと思います。韓国の事情がわかっている人ならお気づきと思いますが、この一波先生は、暗に咸錫憲（ハムソクホン）をさしているらしいのです。こういうところが韓国文学の利点なんですね。ともあれ、作品を通して話をするというのは、とても難しくて弱りました。なにか具体的な質問があれば、お答えをすることにします。

A　さきほど、朝鮮文学と儒教の影響について話されましたが、現在の韓国における儒教の位置というものは、どんなふうなんでしょうか。

よくわからんです。あるいは儒教というものは、朝鮮とは全然関係のないことなのではないか、という気もします。ご承知のように、普通いわれているのは、古来東方君子の国ですか、朝鮮は……。それから、中国では明王朝が満州族の清に滅ぼされた。したがって、本当の中華文化を守っているのは、われわれなのだという誇りが、李王朝にはあったといわれていますね。韓国ではいまでも孔子が祀られています。人間の身分関係、上下関係は非常に厳しいところがある。しかし、こうしたことが本当に儒教の影響なのかどうか。そこのところは判然としません。血縁関係の結束がとても強いのですが、これも儒教がはいってくる以前からそうだったのか。やはりよくわからんです。

A　家の問題がでましたが、個人の行動の上で、それはどんな影響力を持っているのですか。

家の外に一歩出てしまえば、現在ならほとんど規制はないと思いますね。家に帰ってくると、いろいろな制約があるという関係だと思う。こんなことをいうと悪口みたいになるんですが、血縁関係の

中では、義理だとか人情だとかを、とても大切にする。けれども、官職みたいなものに対する、一種の崇拝思想があって、これはウンザりするほど強い。家の外では、そうした地位に向かって、いっせいに殺到するという感じがあります。それと、よく職をかえます。少しでも有利な方向がみえると、パッとかえる。そこには家もなければ儒教もないような気がする。それで、そこのところを逆にとって、儒教とは現在における民本主義だと語った若い学者がいて、顰蹙（ひんしゅく）をかったということもあるんです。韓国人は日本人と違って、個々人と話している場合にはとても面白い。魅力があります。ところが、文章を書くと、とたんに公式的な割りきり方をする。そういう枠組みとして、儒教なり家なりが生きているような気はします。まあけっきょくは、よくわからないですね。家についても私には……。

B　姜舜さんの講演を、私も聞きにいったのですが、その時に姜舜さんは、朝鮮がおかれている地理的条件について話していました。その面での文学への影響については、どうお考えでしょうか。それから、これまであったハンの文学とニムの文学を、七〇年代の文学者たちは乗り越えようとしているといわれましたが、その可能性はあるのでしょうか。

朝鮮を考える場合、地理的条件というのは大きな問題だと思います。それは文学に限らず、思想、政治、経済といったあらゆる面でね。ある意味では決定的な要素でもありうる。でも、これは宿命であって、どうしようもないんじゃありませんか。地形をかえるわけにはいかないから。

七〇年代作家の可能性については、それを確実に証明した作品は、まだ誰も書いていません。だから、あくまでも私個人の未来への思い入れです。これははたして解決の方向になるのかどうかわかりませんが、朴泰洵は野性味ということをいい始めています。現在の韓国社会を一般的に支配しているものの考え方、これを一応、新聞記事レベルというふうに規定して、自分は〃新聞記事以下〃の生活を描くのだ、といっている。そこで出てくるのが、野性味ということなんですけれども……。

もう一つの考え方は、社会学者がよく討論していることで、中間集団の育成というのがあります。韓国は四・一九学生革命の挫折が、依然続いているのだと。しからば、四・一九革命はなにゆえ挫折しなければならなかったのか。そうした反省とともに出てきている意見です。四・一九革命を継続させるための階級が韓国には存在しなかったというのが、その結論なんですね。ご存知のように、四・一九革命を担ったのは学生です。学生が社会を持続的に動かす中核にはなりえない。だからどうしても、社会の中間集団たりうる、宗教団体とか労働組合、そういう中核部分を育てなければならないのだと……。これからの韓国が進むべき針路として、そんなことをいっているわけです。

文学のほうはどうかといえば、そうしたミドル・クラス形成の方向を、めざしているとは思えません。ただ〃英雄待望論〃は困る。そういうやり方には充分警戒はしていると思います。このことを李清俊の「轢き逃げ事故」を具体例に、説明してみたつもりです。要するに、韓国には凝縮できる場がないのですね。いまあるとすれば、軍隊を別にして、やはり学生の集団と宗教の集団だろうと思います。なにかが引き金を引けば、二つの集団はまとまって、活動することができると思う。ただ継続し

ていけるのかどうか。私は悲観的です。さっきあげた朴泰洵の野性味にしても、文学を離れていえば、ちょっとどうかと思います。望ましくないといったらおかしいがなんだかまずいような気もします。七〇年代の作家たちは、文学者が先頭に立つという考え方には、たぶん否定的だろうと思います。英雄になどなりませんという意味でね。

これはまあ、どこの国にでもある程度いえることでしょうが、開化期の政治指導を文学者が担うという側面がありますね。朝鮮の場合は、とくにそうだったんです。そのために悪くいえば、文学がアジテーションから出発してしまった。そんな感じが私にはいたします。しかも、そこには民衆的基盤がまったく欠けていた。朝鮮におけるプロレタリア文学の場合には、このことが悲劇的な状態で現われています。カップ、朝鮮プロレタリア芸術同盟ができるのは、一九二五年です。日本の場合と比較して、最初のプロレタリア文芸誌『種蒔く人』の創刊が一九二一年、朝鮮と同じ二五年に、日本プロレタリア文芸連盟が成立したことを考えると、大変早い時期に生まれているわけです。その頃の民衆の組織状態といえば、日本支配の強圧下にあって、ほとんどなにもないといえます。そういうところで、理念ばかりが先行する形で、文学運動もまた進んでいっている。前にあげた、現在の韓国でいわれている中間集団の欠如ということは、こうした朝鮮近代史の脈絡の中で、みていかなければならないでしょうね。また、北朝鮮のことも当然、比較対象として大事なのでしょうが、私には全然未知の事柄なので……。

話がいっぺんに飛びますが、理念の先行とはいっても、一般的にいえば、いまの韓国の学生たちは、

社会科学の知識が乏しい。あるいは社会科学的なものの見方というのが、非常に弱いように思われます。激情にかられてワーッとやる。そういう一面がやはりあるのではないかなあ。厳しくいえば、自己の置かれている位置に対するリアリズムを欠いているという面が……。崔仁勲には「灰色人」という小説があるんですが、彼はその中で、革命が成功するような状況は、韓国ではただの一度もなかったのだ、と語っております。私はそういうリアリズムが、いま韓国の文学者には必要だと思います。さもないと、逆に玉砕という破局へ、向かっていってしまうかもしれませんから……。

C　現在の韓国文学に日本文学の影響というのは、あるんですか。そのことと、若い作家たちは、日本語ができるのかどうか。

そこが不思議なんですね。どうも読んでるようなんだなあ。若手の作家たち、彼らが日本語をそれほどできるとは、思えないんですけどね。八月にソウルへ行った時、李清俊に会ったんです。彼は一九三九年生まれでしょう。日本語はほとんどできないはずなんだ。しかし彼がいうには、現在でもなお、日本とか西欧とかの作品からプロットを借りてきて、書いてしまうものが非常に多いんだといいます。実は自分も書いてみたいものがある。それは大島渚のシナリオで、当たり屋の話があるけど、あれがぜひ書きたいなどという。もっとも、私のほうは日本の現代文学をあまり知らないから、妙な具合いなんですけど……。たしかに李清俊は、安部公房の作品に大変よく似たものを書いています。

それから、金承鈺は、太宰治の影響が強いといわれていますね。話は違うけど、テレビなどでは、日本の受け売りが結構多い。これはとても巧妙にやっていて、よくわからないぐらいに変形されているんです。マンガなどですと、たとえば、「魔法使いサリー」「黄金バット」など、ふきかえでテレビに流しているわけです。子供たちが、それをみて、あれは日本から来た奴だよなんて、いっているそうですよ。

最初にあげた李炳注ですね。これは完全に小林秀雄の影響が強い。小林を読むことによって、自己の文学的形成の一端を培ったのだと思います。さきほど話した「関釜連絡船」という小説、この中には、小林秀雄と三木清を対照させて、批評しあう場面が出てきます。小林派と三木派とに、朝鮮人学生が二手に分かれて論争するんです。三木派のほうはこんな批判をする。小林秀雄なんていうのは、けっきょく処世術にしかならんではないか。第一、彼には体系というものがない。だから、その場その場を、感性の閃きで切り抜けていくことしかできないのだと……。一方、小林秀雄を支持するほうは、それはそうだろうけど、そこに徹底すれば、立派な人生に対する態度になるのだ、と反論している。李炳注の描いている主人公は、大状況の中でいずれかを選択して、そこへ直線的に参画していく人間ではない。むしろ、訪れてくる局面によって、そこでの最善の方法を捜そうとしている。そうした主人公の描き方からみて、私は李炳注は、おそらく小林秀雄派だろうと断定したわけです。詳しくはわからないけど、いろいろな作品を個別に追っていけば、日本文学の影響というのは、それなりにまだたくさん残っていると思いますね。

D　詩人の金芝河についてですが、韓国の文学者たちは、どういうふうに彼をみているのでしょうか。またさきほど、七〇年代文学は反英雄主義を志向しているといわれましたが、金芝河の場合は、そういう文学者とは違っているようにみえる。きわめて政治色の強い作品を、書いているように思うのですけど……。

文学者というのは、いろいろだと思います。金芝河のことは、私はよく知らないのです。作品についても「五賊」と「黄土」ぐらいしか読んでいません。彼の詩というのは俗語がたくさんあって、よく読めないこともあるんです。こちらから話してよいのか悪いのか、よくわからなかったものですから、私のほうからは黙っていたわけです。「五賊」という詩ですけれども、あの作品を韓国で読んでいる人間は、そう多いとは思えません。それは政治的な意味を別にしても、相当に難解だからです。やはり金芝河の詩というのは、前衛的なマニフェストというべきものだと思います。だから、読んでいるのは、おそらく学生たちだけではないか、という気がいたします。評論家の鄭敬謨(チョンキョンモ)さんは、義兵運動を組織した儒士の崔益鉉(チェイクヒョン)と金芝河を関連させて語っていますね。

最近の「良心宣言」になりますと、金芝河は文学者というよりは、儒家というタイプに移っているように思います。あるいは戦闘的宗教思想家といいますか。彼はどこかで、民主化運動は政治運動ではなく宗教運動だ、だからこそ持続するのだといっています。これはあるいは、現在の韓国では宗教

運動しか窮極的に依拠するところがないという認識にもとづくのかもしれませんが、ここで興味深く思われたのは、宗教家としての一面が強調されていることです。儒教を宗教といいうるかどうかわかりませんけれども、朝鮮時代の知識人である儒者は祭政不分離のところにおり、時にそれを根拠とする死を賭した痛烈な政治への批判者であったわけです。ところが現代になって、知識人の宗教家としての側面が弱くなってきている。それで金芝河が民主化運動を宗教運動だと規定したことが、知識人の宗教家としての側面の復活を図っているように思えて、興味深く感じたわけです。この点は崔仁勲の仏教と相通ずるところがあるかもしれませんが、金芝河の場合は、崔仁勲に比べてどこかオーソドックスではないような気がします。私自身は、文学者ということに限っていえば、金芝河には期待をしていません。私のほうが間違っているかもしれませんが……。

それから、時局的なことにちょっと触れますと、私がソウルを発つその日の新聞に、張俊河（チャンジュンハ）氏の遭難死のことが出ていました。張氏の死に対する反応ですが、痛惜という感じとは少し違っていました。うまくいえないのですが、それとは多少異なった受けとり方があるようでした。いわゆる殉教者という感じではなかった、ということです。私としては、それが体制側にしろ反体制側にしろ、英雄がつくられることを望まない立場ですから、韓国の現実とは、そういうものかなあという気持で、日本へ帰ってきたようなわけです。

（一九七五年九月三十日）

《注》

**南廷賢**　一九三二年忠清南道生まれ。雑誌記者、検察支庁書記補の職についたのち、五七年に文壇へデビュー。「司会棒」は六四年六月に発表。六五年「糞地」を発表。同年夏「糞地」が反米的作品とみなされ、中央情報部に反共法違反で逮捕された。

**崔仁勲**　一九三六年咸鏡北道生まれ。朝鮮戦争時に南朝鮮へ移った。ソウル大中退後、五九年に文壇へデビュー。翌年「広場」を発表し作家的地歩を確立。「総督の声」は六七年夏に発表された。

**李炳注**　一九三一年慶尚南道河東生まれ。一九四三年明治大学文芸科卒。教員生活ののち、五六年『国際新報』主筆兼編集局長の任につく。六一年五月の軍事クーデター直後、統一問題をめぐる筆禍事件により検挙され、二年七ヵ月の獄中生活を送った。「小説アレクサンドリア」「弁明」「山河」などの作品がある。

**金承鈺**　一九四一年日本の大阪で出生。ソウル大仏文科卒。六二年『韓国日報』の新春文芸作品に「生命演習」が当選し文壇にデビュー。六五年「ソウル一九六四年冬」で東仁文学賞受賞。

**李光洙**（一八九二〜）平安北道生まれ。十三歳で日本へ留学。一九一〇年頃から創作活動を開始し、一七年長篇「無情」により作家的地位を確立。一九年東京で留学生青年団体の二・八独立宣言書を作成、三・一独立運動の先駆となる。上海へ渡航、大韓民国臨時政府成立に参加。帰国後日本官憲に逮捕さる。太平洋戦争下の強圧下にあっては、日本名香山光郎を名乗り、朝鮮文人協会の会長を勤めた。四五年解放後、反民族的行為特別調査委員会の召喚を受く。朝鮮戦争時、北へ連れ去られたと伝えられる。

**『毎日申報』**　一九一〇年日韓併合に際して、朝鮮総督府が『大韓毎日申報』（一九〇四年六月創刊。英国人発行による日本批判の急先鋒であった新聞）を強制買収し発行した朝鮮語版の総督府機関紙。

**朴泰洵**　一九四二年黄海道信川生まれ。ソウル大英文科卒。六四年「コンアル・アンダン」でデビュー。六六年「形成」により『世代』誌の新人文学賞受賞。作品集には「崩れた劇場」「懐しの丘の上」「昼に出た半月」などがある。

**黄晳英**　一九四三年旧満州の新京（長春）で出生。高校在学中に「立石付近」が『思想界』新人文学賞に入選。七〇年「塔」が『朝鮮日報』の新春文芸作品に当選して文壇に出る。作品集に「客地」「歌客」などがある。

**趙善作**　一九四〇年慶尚北道大田生まれ。一九七一年『世代』誌の新春文芸作品に「志士塚」が選外作となり、文壇へデビュー。作品集には「ヨンジャの全盛時代」がある。

**趙泰一**　一九四一年全羅南道生まれ。慶熙大卒。六二年に『全南日報』、六四年に『京郷新聞』の新春文芸詩部門に当選。詩集には「国土」の他、「朝の船舶」「飽丁論」などがある。

**金芝河**　一九四一年全羅南道木浦生まれ。本名金英一。ソウル大美学科卒。六〇年四・一九学生革命に参加。六四年日韓条約調印反対のデモを組織し逮捕さる。六九年頃より詩作を発表。七〇年長篇詩「五賊」が反共法違反となり検挙。七四年韓国の民主化運動を進める中で、大統領緊急措置違反者として検挙さる。死刑宣告を受けたが無期刑に減刑され、翌年二月釈放、一月後に再逮捕され現在なお獄中にある。

**金素雲**　一九〇七年釜山生まれ。二〇年渡日し北原白秋に師事。日本語朝鮮語で詩作を発表。「朝鮮民謡集」「朝鮮童謡集」「朝鮮民謡選」「乳色の雲」「朝鮮詩集」の日本語訳で知られる。「諺文朝鮮口伝民謡集」は朝鮮民謡研究の貴重な資料となっている。また随筆家としても著名で、多数の随筆集がある。

**李陸史**（一九〇四〜四四）慶尚北道安東生まれ。二五年独立運動の組織正義府、軍政署、義烈団に加盟。以後朝鮮と中国の間を往来しつつ独立運動を続けた。四三年ソウルで逮捕、北京刑務所に押送され、翌年獄死した。四六年に「陸史詩集」が発刊されている。

**韓龍雲**（一八七九〜一九四四）忠清南道出身。法号万海。仏台改革運動の先覚者。独立運動家、詩人として著名。著作には「朝鮮仏教維新論」「朝鮮独立の書」長篇小説「黒風」「薄命」詩集「ニムの沈黙」などがある。「韓龍雲全集」全五巻がある。

**李清俊**　一九三九年全羅南道生まれ。ソウル大独文科卒。六五年「退院」が『思想界』第七回新人文学賞に当選し文壇にデビュー。六七年東仁文学賞受賞。現在『小説文芸』主幹。作品集に「星をお見せします」「噂の壁」「調律師」「仮面の夢」などがある。

**朝鮮プロレタリア芸術同盟**　一九二五年八月結成。発起人は朴英熙、金基鎮、李活、金永八、李相和、金馧、李益相、朴容大、李赤暁、金復鎮、安碩柱、宋影など。「無産階級、社会運動が台頭しはじめた一九二〇年代の時代的利点をもっていたが、結果においては、これといった文学運動としての業績も作品も残せないままに、理論と論争にのみ終始し、日帝の弾圧に屈服」（金允植「韓国文学大辞典」カップの項）して、一九三五年に解散した。

**義兵運動**　ここでいう義兵運動とは、日清戦争後日本の急速な朝鮮支配に抗して闘われた抗日武装蜂起をさす。義兵の名のおこりについては、一五九四年、九七年の豊臣秀吉の朝鮮出兵の時、朝鮮各地に起こった自発的な救国武装闘争に発するという。

**崔益鉉**（一八三三〜一九〇六）京畿道抱川生まれ。儒林の名士でその弟子数千をかぞえた。戸曹判書、工曹判書を勤め、一九〇五年乙巳条約（第二次日韓条約）が締結されるとこれに反対して義兵を起こし、捕われて対馬に配流され断食によって自ら命を断った。

**張俊河**（一九一五〜七五）平安北道生まれ。日本神学校、韓国神学大学卒。太平洋戦争下日本軍兵士として華中戦線に赴くが脱出。重慶にあった大韓臨時政府に参加。四五年一月光復軍大尉、主席金九の秘書となる。五三年『思想界』を創

刊。六二年マグサイサイ賞受賞。民主統一党最高委員として朴政権を批判、七四年一月大統領緊急措置違反の罪に問われ逮捕、懲役十五年の刑を受けた。七五年八月登山中に転落し死去。

**咸錫憲**　一九〇一年平安北道竜川に出生。五山学校卒業後二三年日本へ渡り東京高師に学ぶ。在学中内村鑑三の聖書集会に参加、また朝鮮人留学生とともに「聖書朝鮮」を発行。二九年帰国後五山学校で教鞭をとる。解放後北朝鮮で教育機関の仕事についたが、四七年春南朝鮮へ移る。六一年再建国民運動本部中央委員会委員。六二年渡米。六三年軍事政権を批判する〝三千万同胞に涙で訴える〟の論文を発表。六四年自由言論守護国民大会発起人代表。六九年国土統一院統一諮問委員会委員。七〇年四月「種子の声」を創刊。現在韓国民主化運動の中心者として活躍。著書に「意味からみた韓国史」「死ぬまでこの歩みで」「新時代の展望」「生活哲学」「水平線を越えて」「人間革命」などがある。

II

# 朝鮮の土になった日本人

## ——浅川巧にふれて

高崎宗司

### 1

戦前の植民地下朝鮮は、一九〇五年、明治三十八年の第二次日韓協約によって、事実上の第一歩を踏み出したといえます。日本は時の大韓帝国政府から外交権を奪い、初代統監として伊藤博文が、その任についたわけです。そうした点からいうと、いわゆる日帝時代は、四十年というふうにもいえるかと思います。しかし、普通、朝鮮では一九一〇年の韓国併合をもって、朝鮮における植民地支配の始まりとし、一九四五年の日本敗戦による解放に至るまでの時代を、日帝三十六年間と呼びならわしていますね。

さて、この日帝三十六年間なんですが、ほとんどの日本人は朝鮮人を理解しようとする姿勢をもたなかった。あるいは、朝鮮人を劣等視していた。大まかに、そういってよいだろうと思います。しかし、そうした時代の流れの中にあっても、例外的存在と呼んでよいいく人かの日本人がいた。朝鮮を理解しようとし、朝鮮人を理解しようと努力した日本人がいたわけです。私はこの例外的存在として、

とりあえず四人の日本人の名前をあげることができるのではないかと思います。

一人は内村鑑三です。内村は日韓併合に際し、「領土と霊魂」という論文を書き、その中で「国を獲たりとて喜ぶ民あり、国を失いたりとて悲しむ民あり、然れども喜ぶ者は一時にして悲しむ者も亦一時なり、久しからずして二者同じく主の台前に立たん、而して其身に在りて為せし所に循りて鞫かれん、人、若し全世界を獲るとも其霊魂を喪わば何の益あらんや、若し我領土膨脹して全世界を含有するに至るも我が霊魂を失わば我は奈何にせん」と手厳しい批判を綴っています。また、内村鑑三は、一九一九年の三・一独立運動に対する弾圧についても、やはり厳しい批判の姿勢をもっていたことが伝えられています。また、内村はキリスト者の立場で、数多くの朝鮮人を実際に教育してもいるんです。現在の韓国で、民主化運動の中心人物の一人として活躍している咸錫憲は、東京に留学した時、内村鑑三の門をたたいています。そして、一九六八年に来日した咸錫憲は、さっそく内村の墓参りに赴き、その後の日曜集会の席で、「韓国が三十六年間日本の植民地にされたことは不幸だったが、私たちが内村鑑三という先生を与えられたことは、その不幸を帳消しして、なおおつりを出さねばならぬ」と語ったといわれています。

もう一人は吉野作造です。大正デモクラシーの代表的論客と目される吉野は、三・一独立運動に際して、日本の武断統治の廃止を迫り、関東大震災の時の朝鮮人虐殺についても、これを強く批判する論文を発表しているわけです。あの時代の雰囲気と吉野の啓蒙家としての立場を知る意味で、「朝鮮人虐殺事件に就て」という論文の一部を引いておきましょう。「我々は、平素朝鮮人を弟分だという。

お互に相助けて東洋の文化開発の為に尽そうではないかという。しかるに一朝の流言に惑うて、無害の弟分に浴せるに暴虐なる民族的憎悪を以てするは、言語道断の一大恥辱ではないか」。そして、次のようにも書いています。「鮮人暴行の流言が伝って、国民が直ちにこれを信じたに就いては、朝鮮統治の失敗、これに伴う鮮人の不満と云うようなことが、一種の潜在的確信となって、国民心裡のどこかに地歩を占めて居ったのではなかろうか。果してしからば、今度の事件に刺戟されて、我々はまた朝鮮統治という根本問題に就いても考えさせられる事になる」

三人目には柳宗悦の名前をあげることができます。柳に関しては、きょうのテーマである浅川巧との深い交友関係があるので、詳しくはあとでお話しすることにし、ここでは、簡単に触れておくことにします。柳は三・一独立運動の時、日本政府の朝鮮政策を批難し、その後、朝鮮民族美術館を設立するなど、実践的な活動を続けました。

四人目には矢内原忠雄がいます。彼はのちに東京大学の総長となりますが、戦前は東大で植民政策学を担当していました。前の三者に比べて年齢が少し若いために、矢内原の朝鮮への発言は、時代が少し下ることになります。一九二六年四月に朝鮮最後の王・純宗が亡くなった時、矢内原は『中央公論』に「朝鮮統治の方針」と題する論文を発表して、日本の政策の誤りを鋭く指摘しています。この論文は、まもなく起こった、いわゆる六・一〇独立運動を予告するものになりました。さらに矢内原の場合は、その後もずっと戦時下まで朝鮮への関心をもち続けます。先ほど名前をあげた咸錫憲、その同志である金教臣といった人たちが、独立運動の容疑で逮捕された『聖書朝鮮』事件というのが、

一九四二年に起こっているんです。『聖書朝鮮』は、民族的キリスト教を標榜していた雑誌ですが、そこに書かれた金教臣の随筆が、朝鮮の独立を暗に予言しているものとみなされ、総督府による徹底的な弾圧が加えられたのです。検挙者は数百名にも及んだといわれています。戦時下の発言が非常に困難な時代に、矢内原は、この事件を日本人に知らせるための論文を書いています。あの当時ですから、表面からこれを批判することは、とてもできなかった。しかし、筆を抑えた中で、矢内原忠雄は、事件を広く知らせるという形での抵抗を行なったわけです。

この例外的存在であった四人には、朝鮮をめぐって共通している点が、三つあげられるように思います。一つは、朝鮮の美点、よい点を積極的に理解しようと努力したこと。二つには、当時の日本政府の朝鮮政策を勇気をもって批判したこと。もう一つ、もっとも大事な点、それは、この四人がいずれも朝鮮人との親交をもち、しかも、朝鮮人の信頼をかちえていたことです。たとえば、内村鑑三には、金貞植（キムジョンシク）という友人がいます。東京の神田に現在もある韓国ＹＭＣＡ……。ここは在京朝鮮人留学生運動の拠点ともなった場所で、三・一独立運動の嚆矢となった、有名な二・八独立宣言がここから発せられたことは、ご存知の方もあると思います。金貞植はこの少し前の時期に、ここの総務を務めていた人です。内村鑑三と金貞植は非常に深い交わりを結んでいました。吉野作造は、金雨英（キムウヨン）、白南薫（ペンナムン）など、やはり当時は留学生であった朝鮮人との多くの付き合いをもっています。それから、柳宗悦の場合ですと、著名な文学者となった廉想渉（ヨムサンソプ）を始め、たくさんの朝鮮人知識人との交友関係があります。矢内原忠雄については、金教臣らの名前をあげることができます。そうした朝鮮人との親しい交

わりを通して、いまの四人の人たちは、朝鮮の美点、よい点をより深く知っていった。あるいは、朝鮮人との交友関係の中で、日本政府の朝鮮政策の実態をいっそう切実なものとして認識していった。その結果、彼らはこれに対する鋭い批判を行なうことができたのだと思います。いうまでもなく、内村鑑三たちは、単に朝鮮問題に限らず、それぞれの分野で大変に立派な業績を残した人たちです。したがって、いわゆる論壇史に大きくその名をとどめたわけです。

けれども、これから私がお話しする浅川巧は、前の四人のように、当時の論壇できわだった活躍をしたこともなく、また、日本の朝鮮政策批判というものを、表立った形で行なったわけでもない。しかも、四十歳という若さで亡くなっているわけです。そのために論壇史からはほとんど忘れられた形となり、いわば名も残さずに逝った人間……、そういうふうにいえるかと思います。しかし、私は先に内村鑑三らに共通する三点をあげ、その中でも、もっとも大事な事柄は、朝鮮人と親しく交わり、朝鮮人からの信頼をかちえたことだといいました。この大事な点に関していえば、浅川巧は内村鑑三らをはるかに凌駕していたと思っております。つまり、朝鮮を深く理解しようとした努力、朝鮮人の真の友となろうとした誠実さにおいて、彼はおそらく、内村鑑三らの及びえない地点にまで至っていたのではなかろうか。きょう、私は、このことについて、主に語ってみたいと思っています。

その前に、ちょっと補足させていただきますと、浅川巧と内村鑑三らとを大きく分かつ点が、一つあるんです。それは、浅川巧が在朝日本人であったということです。この両者を分かつ生活条件の相違という問題は、ある種の決定的な要素をもっていたような気が、私にはいたします。要するに、内

村鑑三らは日本に住んでいたわけですから、いくら朝鮮人と深い交友関係をもったといっても、それは日常生活をともにすることではなかったわけです。毎日、朝鮮人と顔をあわせていたという関係でもない。ところが、浅川巧の場合には、朝鮮に住んでいたのですから、それこそ否も応もなく、朝鮮人との日々の付き合いがあった。そうした濃密な関係というか、朝鮮人の実際の日常生活を、彼は四六時中、目のあたりにせざるをえなかった。となりますと、当然、日本と朝鮮との間にある矛盾というものを、彼自身はまさに身近なものとして、非常に強く感じたのではないか。そのような意味から、在朝日本人であった浅川巧の生涯を考えてみることは、大変に興味深い気がするのです。

いま私は、浅川巧は論壇に名を残さずに逝った、そのようにいいましたが、浅川巧の名前は一時期、けっこう同時代の日本人に知られていたのではないか、と思わせるデータがいくつかあります。ですから、より正確にいいますと、浅川巧の名前は、ある時期には知られていたけれども、やがて忘れられていったということになります。

さて、朝鮮をめぐる先の四人の中の一人に、私は柳宗悦の名をあげました。柳はご存知のように、民芸運動の創始者として名高い人であり、また、朝鮮との関係でも非常に注目される人物であることは、ことさらにいうまでもないことです。この柳宗悦が、実は浅川巧を大変に高く評価しているんです。それから、浅川巧を高く評価した人には、安倍能成（あべよししげ）がいます。安倍は戦前は京城帝大の教授を務め、戦後になって、学習院院長や文部大臣にもなった人物ですね。この柳と安倍の二人が、どういう点において、浅川巧を高く評価しているのか。そのことをまず、ご紹介することにいたします。浅川

巧は一九三一年、昭和六年四月二日に、急性肺炎で亡くなりました。その悲報に接し、柳宗悦は次のような追悼文を発表しています。出典は、柳が主宰していた雑誌『工藝』一九三一年五月号の「編輯余録」です。

浅川が死んだ。取り返しのつかない損失である。あんなに朝鮮の事を内から分っていた人を私は他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうしてほんとうに朝鮮人からも愛されたのである。死が伝えられた時、朝鮮人から献げられた熱情は無類のものであった。棺は進んで申出た鮮人達によってかつがれ、朝鮮の共同墓地に埋葬された。

私とは長い間の交友である。彼がいなかったら朝鮮に対する私の仕事は其半をも成し得なかったであろう。朝鮮民族美術館は彼の努力に負う所が甚大である。そこに蔵される幾多の品物は彼の蒐集にかかる。

もっと生きていてくれたら、立派な仕事が沢山成されたであろう。彼程朝鮮の工芸全般に渡って実際的知識を有っている人はなかった。私達が計画し合った仕事も多いのである。半にして彼に死に別れた事は、遺憾の極みである。彼のいない朝鮮は、行き所のない朝鮮の様にさえ感じる。こうなってみると朝鮮にしばしば通ったのも半彼がいた為だとも云える。

私はわけても彼を人間として尊敬した。私は彼位い道徳的誠実さを有った人を他に知らない。彼は明確な頭脳と、温い眼との所有者ではあった。併しそれ等を越えて私を引きつけたのは、その誠

実な魂であった。彼位い私の無い人は珍らしい。彼程自分を棄てる事の出来る人は世に多くはない。彼の補助で勉強した朝鮮人は些少でない。私は彼の行為からどんなに多くを教わった事か、私は私の友達の一人に彼を有った事を名誉に感じる。

二年前、外遊の途上、京城に立ち寄って逢ったのが最後の別れになった。突如危篤の電報をうけて駆けつけたがもう間に合わなかった。

此号は思わずも彼の絶筆「朝鮮茶碗」を載せることになった。死ぬ四日前に病床で書いてくれたのである。

私はあと何年活きるかを知らない、併し残る生涯で彼の志を少しでも承ぐ仕事を果したい。彼は死んでも、私の心に活きる彼は尚も死ない。

近々工政会から発行される「朝鮮陶磁名考」は彼の最後の著作になった。それが生前上梓されてなかったのは遺憾の限りである。その著述は今後朝鮮の焼物を省る人にはなくてはならない本となるであろう。現在いる朝鮮での鴻学たる崔南善氏が、原稿を見て感嘆していたと云うが、之は彼の名を留める永遠の著書になるであろう。此一冊を残していってくれた事は、吾々にとってせめてもの慰めである。

いまの柳宗悦の追悼文の中で、私がもう一度くり返しておきたい個所は、「あんなに朝鮮の事を内から分っていた人を私は他に知らない」というくだりです。この短い章句の内に、浅川巧と朝鮮との

関係を解く鍵があるのではないか。私はそのように思っています。柳の浅川巧に対する深い哀惜の念は、また次のようにも語らせています。これは『工藝』一九三四年四月号に載った「浅川のこと」と題した文章の一部です。なお、この号は「浅川巧追悼号」として発行されております。

「彼が死んで早くも三年の月日が流れた。私も身内の幾人かをなくし、多くの知友とも別れたが、浅川の死ほど私の心に堪えたものはなかった。彼のことを想うと今も胸が迫る。彼はかけがえのない人であった。とりわけ私には彼が『徳』そのものの存在として残る。何よりも人間として彼は立派であったと思う」。さらに、柳はこう書いています。「彼の所へは時々人知れず台所に贈り物が届けられた。みな貧しい鮮人達の志の現れだった。朝鮮人は日本人を憎んでも浅川を愛した。（こんな逸話が浅川には多いのである。集めたら何よりのいい伝記となろうと思う）」。「彼の様に鮮人の心に内から住める人がどこにあろうか。浅川は寧ろ鮮人の心で活きていたのである。否、鮮人以上に朝鮮の心が解っていたのである。此点で朝鮮に対し彼以上の仕事をした人は決していない」

話の本筋から少しはずれますが、この文章でもお気づきのように、柳は〝鮮人〟という言葉使いをかなりしております。朝鮮に対してあれだけの理解を示した柳宗悦ですから、私にはちょっと意外で、これには少なからず驚いているんです。いまの文章の中では、浅川巧が「鮮人以上に朝鮮の心が解っていた」と、相当に強引な断定をやっています。こうした点についても、見逃せない問題点があると思われますが、ここでは、問題点を指摘するだけにとどめておきます。私は、柳が朝鮮人の「心に内から住める人」という表現で、浅川巧を評価していることに注目したいのです。浅川巧という人は、

朝鮮服のパジ・チョゴリを着て街を歩いていても、少しも不自然さを感じさせなかったといわれています。朝鮮語も非常に堪能だったようです。柳宗悦は、もちろん、そうしたことも重要ですが、なによりも彼は朝鮮人の心をつかんでいたんだというんですね。この柳宗悦の浅川巧への評価は、見事にその本質をついているのではないかと思います。

次に、安倍能成の浅川巧に対する評価をご紹介することにします。安倍は現在のソウル大の前身にあたる京城帝大で、十六年間、哲学科教授として教えていた人です。当時の〝京城文化人〟の中心人物の一人といってよいでしょう。一九二八年頃、安倍は浅川巧らと一緒に「朝鮮趣味を語る会」という集まりを発足させています。この会には、比較的自由主義的なタイプの在京城日本人文化人が集い、文字通り趣味的に朝鮮の文化や風俗について、サロン風のおしゃべりをしていたようです。一九三一年四月の浅川巧の急死に接して、安倍能成も柳宗悦と同様に、追悼文を書き残しています。これが掲載されたのは、同年四月二十八日から五月六日にかけての『京城日報』で、「浅川巧さんを惜む」という表題の相当長文のものです。『京城日報』は朝鮮総督府の御用紙と目されている新聞ですけれども……。安倍のこの追悼文は、のちに『青丘雑記』(一九三二年刊)という随筆集に収録され、戦後になって出された『槿域抄』(一九四七年刊)にも再録されています。ですから、わりあい多くの人に読まれたのではないかと思われます。さらに、この追悼文は少し形を変えて、教科書にも採られているんです。旧制中学の教科書ですから、現在でなら高校用ということになりますね。岩波書店編中等学校用『国語巻六』がそれで、表題を「人間の価値」と改めて、収められているんです。前に浅川巧は、

現在では忘れられているが、かつてはその名を比較的知られていたのではないか、そういうふうにいいましたのは、こうした形での浅川巧紹介が、いくつかあるからなんです。ちなみに、この国語の教科書は、一九三四年から一九四五年まで使用されております。その冒頭部分を読んでみます。文章全体の五分の一ぐらいにあたります。

浅川巧さんは私の朝鮮生活を賑やかにしてくれ、力づけてくれ、楽しくしてくれ、朗らかにしてくれる、尊い友人の一人であった。少くともそういう友人になってくれる、又なってもらいたい人であった。この人が春の花の咲くのも待たずに逝ってしまった。私は淋しい。街頭を歩きながらもこの人の事を思うと涙が出て来る。私は東京に居て、巧さんが危篤だという電報を受取った。そうしてその翌日の夜には、もうその訃報を受取ってしまった。人間の生死は測り知られぬとはいえ、これは又余りにひどい。私は朝鮮に帰るのに力が抜けたような気がした。

巧さんのような、正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れる、独立自由な、しかも頭脳が勝れ、鑑賞力に富んだ人は、実に有難い人である。巧さんは官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけで堂々と生きぬいていった。こういう人は、よい人というばかりでなく、えらい人である。こういう人の存在は、人間の生活を頼もしくする。こういう人の喪失が、朝鮮の為に大なる損失であることはいうまでもないが、私は更に大きくこれを人類の損失だというに躊躇しない。人類にとって、人間の道を正しく勇敢に蹈んだ人の喪失ぐらい大きい損失

はないからである。

安倍能成は、〝人類の損失〟といった、やや大袈裟とも思える讃辞まで呈して、浅川巧の死を哀悼しているわけです。安倍の『青丘雑記』には、また次のようにも書かれています。

「骨董を愛玩するものは多い、しかし真に芸術を愛するものは少い。けれども芸術を愛するよりも更に六ケしいのは実に人間を愛することである。人間は芸術よりも生々しくあくどく、動もすればいやな面を見せる。その関係は芸術とのそれの如く自由ではない。いやであっても離れられぬ、好きであっても一緒になれない。多くの芸術愛好者若くは愛好者と称する者は、神経質な気まぐれな人間愛好者もしくは嫌悪者であり、我儘なエゴイストである。殊に内地人が朝鮮人を愛することは、内地人を愛するよりは一層困難である。感傷的な人道主義者も抽象的な自由主義者も、この実際問題の前には直ぐ落第してしまう」

この安倍能成の文章の中で、私が重要だと考えるのは、最後にある「この実際問題の前には直ぐ落第してしまう」という個所です。安倍自身、「柳宗悦君を惜しむ」という文章の中で、自分はこの実際問題において落第生であった、自分は十六年間も京城で暮らし、いろいろな朝鮮人と接したけれども、どうしても、この点がうまくできなかった、と告白しております。彼は、その後に旧制一高の校長に招聘され、京城を離れてしまうわけです。朝鮮を去る理由の一つとして、安倍は、自分は朝鮮人に対して教育する自信がなかったとも語っています。つまり、安倍能成の目からみて、朝鮮人を愛す

ることにおいて、浅川巧と柳宗悦には、及第点を与えることができたんでしょうね。
もう少しだけ、浅川巧の死について、安倍が残している文章を『青丘雑記』から紹介しておきます。
「親族知人相集まって相談の結果、巧さんに白い朝鮮服をきせ、重さ四十貫もあったという二重の厚い棺におさめ、清涼里に近い里門里の朝鮮人共同墓地に土葬したことは、奇を好む仕業でなくて、実にこの人の為に最もふさわしい最後の心やりであった。里門里の村人の平生巧さんに親しんで居た者が、三十人も棺を担ぐことを申出でたが、里長〔日本の村長にあたる〕はその中から十人を選んだという。この人たちが朝鮮流に歌をうたいつつ棺を埋めたことは、誠に強いられざる内鮮融和の美談である」
末尾にある「内鮮融和の美談」という表現は、『槿域抄』では「日鮮融和の美談」に改められています。意味するところはどちらも同じですが、安倍のこの〝融和の美談〟というとらえ方は、非常に問題となるところですね。あの時代の日本政府、ないしは朝鮮総督府のスローガンは、この〝内鮮融和〟だったわけですから。はたして安倍能成が、そうした背後の政治的動きを、どれだけ意識していたかは不明ですが、結果的には、日本側のスローガンに利用される形になっている。これは否めない事実だろうと思います。もちろん、安倍の浅川巧に対する顕彰は、誠実な行為だったに違いありませんが……。要するに、浅川巧の主観的意図とは別に、彼の仕事なり生き方なりというものが、いまいったような政治的側面において、利用された点があったことも、充分に推測できるということですね。
そして、ある意味では浅川巧の最大の讃美者とも目される安倍能成にしてさえ、そうした見逃せない

問題点が宿されているわけです。

そこで、前述した問題点とも関連しますので、朝鮮人側の浅川巧批判というものを、ここでとりあげてみたいと思います。先年、韓国で亡くなった朴秉来(パクビョンネ)という人がいます。詳しい経歴を私は知りませんが、医者であり、陶磁器の有名な蒐集家だったようです。その人の著作に『陶磁余滴』というものがあり、中に「柳宗悦と浅川兄弟」なる短文が収められているんです。批判の内容はというと、柳宗悦や浅川兄弟は、ちょうど日本でのラフカディオ・ハーン(小泉八雲)のごとき役割を、朝鮮においてなそうと努力したようである、しかし、けっきょく、そうはなれなかった、むしろ、感傷的な温情や同和の主張をすることによって、われわれ朝鮮人をして、いっそう卑下させる結果をもたらしはしなかったろうか。朴氏の批判は、このように疑問を提出するところで筆をとどめています。

そこで、朴氏のさらに言わんとするところを浅川巧に引きつけて、私が少々深読みをしますと、たぶん、こういうことになるのではないかと思います。すなわち、浅川巧は朝鮮を愛し、朝鮮人と非常に親しく交わり、朝鮮人の信頼感をかちえた。しかしながら、浅川巧は政治的問題にまでは目が届かなかった。日本と朝鮮との植民地をめぐる関係、そういう根本的問題を提起しえなかったために、浅川巧の業績は、単なる〝融和の美談〟として利用されてしまったんだと……。

多少論理を単純化しすぎて、朴氏の含蓄のある批判からは離れたきらいもありますが、私自身もそうした社会問題に対する目ということでは、浅川巧には抜け落ちている面があるように思っております。ですから、朴氏の浅川巧批判は正鵠を射ているといえましょう。ただ、私がそうした批判を踏ま

えた上で、なお主張し強調しておきたいのは、にもかかわらず、浅川巧という人は、やはり類いまれな存在だったということなんです。

それでは、どのように類いまれであったのか。前に引用した柳宗悦の「浅川のこと」の別のくだりを読んでみます。柳は葬儀の模様を以下のように綴っているんです。「彼の死が近くの村々に知らされた時、人々は、群をなして別れを告げに集った。横たわる彼の亡軀を見て、慟哭した鮮人がどんなに多かった事か。日鮮の反目が暗く流れている朝鮮の現状では見られない場面であった。棺は申し出によって悉く鮮人に担がれて、清涼里から里門里の丘へと運ばれた。余り申し出の人が多く応じきれない程であった。その日は激しい雨であった。途中の村人から棺を止めて祭をしたいとせがまれたのもその時である。彼は彼の愛した朝鮮服を着たまま、鮮人の共同墓地に葬られた」

柳宗悦や矢内原忠雄が死んだ時も、朝鮮人によってずいぶん惜しまれています。しかし、浅川巧のように、ごく近くに住んでいる身の廻りの朝鮮人たち、いわば普通の朝鮮人から、これだけその死を惜しまれた日本人というのは非常に少なかったのではないでしょうか。これは浅川巧が在朝日本人だった点を考慮するとしても、やはり異例といってよいと思います。戦前、朝鮮で暮らした日本人は、相当な数にのぼるわけです。そして、朝鮮人が書いた日本人の思い出もたくさんあります。そこには、こんなよい日本人もいたのかと、びっくりするような話も出てきます。しかし、浅川巧のように深く哀惜され、しかも、隣り近所の朝鮮人からも惜しまれた日本人は珍しいでしょう。

もちろん、浅川巧の夭折を惜しんだ朝鮮人は、隣り近所の人たちだけであったわけではありません。

浅川巧に高い評価を与えた朝鮮人の発言のいくつかを、次に紹介しておくことにします。この人の経歴についても私は詳しいことを知らないのですが、洪淳赫（ホンスンヒョク）という人がいます。『別乾坤』という雑誌の一九二八年五月号に「朝鮮美術の誇り―とくにわが国宝について」と題した論稿を書いているところからみると、民族主義的な美術工芸研究家、あるいは歴史家ではなかったかと思われます。この洪淳赫が『東亜日報』の一九三一年十月十九日号に、追悼文でもある「浅川巧著『朝鮮の膳』を読みて」という文章を発表しているんです。『東亜日報』は三・一独立運動後、日本の朝鮮統治政策がいわゆる文治政治へと転換される過程で、一九二〇年四月に創刊された新聞です。『東亜日報』をどう評価するかは、非常に難しい問題があるわけですが、このことについては、いまは深く立ち入ることをしません。大ざっぱにいってしまえば、日本人の文化政策に妥協的な面を多くもちながらも、朝鮮人発行の新聞として、民族の声をある程度は代弁する役割を担った、そういう新聞です。

で、『東亜日報』掲載の洪淳赫の追悼文はかなりの長文なんです。当時、これほど大きな追悼文が『東亜日報』に載った日本人は、浅川巧以外にはいなかったのではないかと思います。その一節には、以下のように記されています。「〔浅川巧の〕わが国の美術工芸についての深い愛、理解、知識、経験は私をして言わしめれば、敬服せざるをえない。……外国人であるとはいえ、彼の遺した業績、特にわが国の学徒に与えた教えを考える時、彼の代表作としてこの一巻を紹介することは、無意味なこととは思われない。……これだけの材料と研究を提示してくれたことだけでも、ありがたく、また、〔朝鮮人としては〕恥ずかしい」

それから、崔福鉉（チェボッキョン）という人がいます。この人の経歴につきましても、私はあまりよく知りません。柳宗悦の友人に赤羽王郎という人がおります。彼は信州白樺派の一員であり、自由主義教育を実践したため教壇を追われ、朝鮮へ渡って中央学校の日本語と美術の教師になっている。ついでにつけ加えますと、この中央学校というのは、反日運動の拠点の一つになった有名な学校なんですね。赤羽は柳の紹介で浅川巧と会い、以後、二人は親しい交友関係を結ぶようになります。崔福鉉は当時、中央学校に通っていて、赤羽王郎の生徒だったわけです。そんな事情から、浅川巧の家に出入りするようになったようです。前にお話しした『工藝』の浅川巧追悼号には、この崔福鉉が「浅川先生の想出」を寄せていて、そこには、こう書かれています。浅川巧を通して「段々我が朝鮮の尊さ、美しさが分かるような気がして、発見した時の喜びを感じた。……誠に先生は生きては朝鮮の生命を生命とせられ、死しては朝鮮の土となられたのである」。崔はまた、浅川巧によって、ウイリアム・ブレイクを知るようになったことや、浅川巧の家に金教奐（キムギョファン）という青年が世話になっていたことなどについても書いています。あとでお話しする予定ですが、浅川巧は、多くの朝鮮人学生に奨学金を与えたり、世話をしたりしてもいたのです。

浅川巧の死をめぐって、当時の朝鮮人が抱いた感懐といったものを紹介したわけですが、現在もなお浅川巧を惜しんでいる朝鮮人がいることを、次にお話しすることにしたいと思います。

一九六四年六月二十八日付の『東京新聞』夕刊に、「韓国人の心にいまも生きる一日本人」と題した記事が載っています。その内容はといいますと、浅川巧の未亡人の咲子さんが、渡韓することにな

った日韓美術協会の加藤松林人画伯に、夫の墓所の調査を依頼し、加藤画伯は、ソウル郊外の忘憂里の共同墓地を訪ねてみた。浅川巧の墓は里門里から忘憂里に移葬されていたのです。けれども、加藤画伯には墓の所在がつかめなかった。すると、このことを伝え聞いた、浅川巧のかつての同僚であった林業試験場の人たちが調査に乗りだし、六月二十日に、浅川巧の墓の修復葬が挙行されたというものです。ご承知のように、翌年の一九六五年六月には、日韓基本条約が調印されたわけで、この時期の韓国では、対日屈辱外交を糾弾する学生デモが盛んに行なわれていた。そうした緊迫した最中に、浅川巧の墓所の修復が、韓国の人々の手で実現されたことは、特筆されるべきことだと私は思います。これは、当然だったという他はありませんが、解放直後、朝鮮にあった日本人の墓は、ほとんど例外なく破壊されたといわれています。浅川巧の墓も、その時にこわされてしまったのだそうです。ただ、墓石などは、ばらばらになってはいたが、残っていた。そこで、それらのものを集めて修復したということです。

さらに、二年後の一九六六年に韓国林業試験場職員一同の名前によって、「浅川巧功徳之墓」と刻んだ石碑が建立されております。私は韓国林業試験場の方々が、どういう考え方に立って建てたのか、よくわかりません。しかし、間違いなくいえることは、浅川巧への思慕の情というものが、いまなおあるということだと思います。いずれにしても、このような形で顕彰された日本人というのは、おそらく、浅川巧と織田楢次氏の『チゲックン』という本に出てくる乗松雅休(のりまつまさやす)くらいではないでしょうか。浅川巧の墓は現在も、韓国林業試験場のもとで、大切に管理されています。

## 2

浅川巧は一八九一年、明治二十四年一月十五日に、山梨県北巨摩郡甲村(かぶと)に生まれました。甲村は現在では高根町になっていますが、いわゆる老人大学などが盛んで、文化水準の大変に高いところなんですね。この文化水準の高さは、明治維新前からそうであったようです。浅川巧の父は如作、母はけいといい、二人の間には末子である巧の上に、兄の伯教(のりたか)と姉の栄が生まれています。父の如作は小尾(おび)家から浅川家へ養子にきた人で、巧の出生する半年前に、三十一歳の若さで亡くなっています。母けいの父親は千野真道(ちのまみち)といって医者で歌人でした。

それから、父如作の実家である小尾家なんですけれども、これが大変に好学の家門なんですね。如作の父は小尾四友(おびしゆう)という人です。浅川巧はこの父方の祖父に、非常に可愛いがられて育ったようです。ところで、甲村には芭蕉の流れをくむ文化的人脈があって、これが代々、蕪庵(かぶらあん)と称してきた。この間の事情を兄の浅川伯教は次のように記しています。「芭蕉、支考、葛里、蟹守、守彦、彦貫、田彦、四友、こうした伝統が流れ流れて八ケ岳の麓のこんな田舎に落ちついた。祖父の俳名を蕪庵四友と云うた。四友は守彦の末子であった。守彦は少しは知られた学者で、自分の著書を江戸で出版して居る。本の名を人道俗説弁義と云うた」(「彼の故郷と其祖父」『工藝』一九三四年四月号)

お祖父さんの四友さんは、巧が十二歳の時に亡くなっていますが、多芸多才の人であったようです。高根町の長寿者大学では『岩ひば』というパンフレットを発行しておりますが、その中に、蕪庵の歴

史を簡単にまとめたものが載っています。「蕪庵六世四友」という項目のところがあるので、ちょっと読んでみましょう。「通称も四友と云った。高根町五丁田の人。三世小尾兵之進〔守彦〕の三男である。父の衣鉢を受け俳諧の外茶道、生花等にも造詣深く門前市をなした」と書いてあります。先の浅川伯教の「彼の故郷と其祖父」によれば、お祖父さんの四友さんは、朝起きると七部集の連歌を口ずさみながら、庭をはいたりしていた。昼食後の一時間ぐらいは、きまって七部集や白氏文集や唐詩選などを読みふけっていたといいます。そして、また、別の個所では陶器づくりのことに触れて、「物心が出てから籾殻を積んで素焼きする事や、土の出場所を教えて貰った事があった。少年のこんな一寸した事が自分等の現今に、こんなに影響するかと思うと恐ろしくなる」とも書いています。

浅川巧自身も、のちに自分の著作である『朝鮮の膳』の献辞の中でこう語っています。「敬愛する祖父よ、生れし時すでに、父の亡かりし私は、あなたの慈愛と感化とを多分に受けしことを思う。清貧に安んじ、働くことを悦び、郷党を導くに温情を以てし、村事に当って公平無私なりしその生涯は追慕するだに嬉し」。浅川巧はこの父方のお祖父さんの血を継ぎ、絵筆に勝れているなど、やはり多芸の持主だったことが伝えられています。しかし、そうした文人的側面だけを受け継いだのではなかった。むしろ「清貧に安んじ」た祖父四友の生活態度にこそ、彼は深く学ぶところがあったのだと思います。

次に、お母さんのけいさんなんですが、非常にしっかり者で、いわゆる男勝りの女性だったようです。若いうちに夫を亡くし、三人の子供たちを女手一つで育てあげたわけです。その生活はなにかと

苦労が多かったと思います。それでも、沈んだところなどはなくて、長男の浅川伯教に従って京城に移り住んでからも、世話好きであったことから、しょっちゅう人が出入りし、家族だけで食事をすることはまれだったとのことです。こうした母親けいの大らかな性格も、浅川巧の人格形成の上に、多大の感化を与えたのではないでしょうか。

さらに、浅川巧の生涯を語る上で逸することのできない人に、先ほどから何度も名前の出ている兄の伯教があります。伯教と巧とは七つ違いの兄弟なんです。この二人はとても仲がよくて、一面からみると、一心同体の観すらあった。ですから、その関係は、影響とか感化とかいった程度のものではなかった。兄の伯教によって、ある意味では、浅川巧の人生航路が定められてしまった。そういってもよいと思われるほど、同志的な兄弟愛で結ばれていたわけです。たとえば、浅川巧と朝鮮との出会い、あるいは、浅川巧と柳宗悦との親交……、これらはいずれも、兄の伯教によってもたらされているんです。そうした分かちがたい関係でもあるので、ここで浅川伯教について、大よその経歴を語っておくことにしたいと思います。

始めに、ちょっと余談になりますけれども……。去る七月十三日〔一九七九年〕付の『朝日新聞』に、浅川伯教蒐集の朝鮮陶磁器の破片類が、三百万円で売却されたという記事が出ていました。この一事でもわかるように、朝鮮の陶磁器、とりわけ李朝時代の陶磁器の研究に関しては、浅川伯教は神様みたいにいわれていた人です。彼は山梨県立師範学校を卒業して、甲府の小学校などで教鞭をとります。クリスチャンで、雑誌『白樺』を愛読する、その頃にいう典型的な白樺教師だったようです。学生時

代から美術に関心をもっていた彼は、その間、東洋美術史家の関野貞の著作を読み、友人小宮山清三の蒐集した朝鮮の陶磁器を見て、朝鮮に憧れます。それで、伯教は朝鮮へ渡り、京城の東大門小学校に、また教師として勤務することになります。これが一九一三年、大正二年の五月のことです。彼はロダンに憧れ、一時は彫刻家を志したこともありました。作品が帝展に入選したこともあります。要するに、根っからの芸術家肌の人間だったといえると思います。おそらく、青年期までの浅川巧にとって、兄伯教なる存在は、誰にもまして敬愛する対象だったのではないでしょうか。兄伯教が師範学校に進んだのに対して、弟の巧は山梨県立農林学校に入学しています。ちょうど、巧の農林学校時代、伯教は甲府の小学校で教職についていたわけで、二人は共同の自炊生活を送っているんです。この時期に、浅川巧も兄同様、キリスト教に入信しました。ちなみに、二人は終生熱心なキリスト者としてすごしております。

一九〇九年春、農林学校を卒業した浅川巧は、秋田県大館営林署小林区署に赴任。国有林の伐採や植林の仕事にたずさわることになります。しかし、兄伯教が朝鮮へ発った翌年の一九一四年五月には、巧も朝鮮へ渡ります。そして、朝鮮総督府農商工部山林課の林業試験場に、雇員として採用されます。林業試験場は京城郊外の阿峴北里にあって、前年にやっと発足したばかりだった。当時は嘱託一名、浅川巧を含めて雇員三名という陣容だったそうです。いうまでもなく、巧が朝鮮へ渡航したのは、兄伯教を慕ってのことでした。ともあれ、このような経緯で、浅川巧の朝鮮での生活が開始されるわけです。ほぼこの時期までの浅川巧は、兄伯教の後を追う形をとっており、その考え方の面においても、

兄の強い影響下にあったものとみられ、いわば一心同体といったふうに感じられるのです。ところが、両者がともに朝鮮の地に住むようになって以後、二人の人生軌道は微妙に相違してくるのではないか。もちろん、朝鮮美術への傾倒とか、重なりあう部分を多くもちながらもですが……。つまり、朝鮮の地において、浅川巧本来の個性的な思想が顕著な形をとり始める。そう考えられるわけです。けれども、このことはのちに述べることにして、兄伯教のその後の経歴を、簡略に語り終えてしまうことにしたいと思います。

先にも触れましたが、天性の芸術家タイプである伯教は、教師生活にあきたらず、彫刻家への道を志して、一九一九年には東京に出てゆきます。しかし、伯教自身の言葉をかりると、この希望は「体力の欠如の故に」断念されます。伯教は一九二二年に、ふたたび朝鮮に戻ってまいります。ただし、教師生活はやめてしまい、朝鮮陶磁器の調査と研究、あるいは茶道に没入していったわけです。家族の生活は、同じ教師職にあった妻にまかせてしまった。解放後の一九四六年に、伯教は日本へ帰り、なおも朝鮮陶磁器の研究と蒐集を続け、一九六四年に七十九歳の生涯を閉じています。奇しくも、この年に弟の巧の墓が、韓国の人々の手で修復されているわけですが……。

話がずいぶん先に進んでしまいましたが、ここで、柳宗悦をめぐるエピソードに、どうしても触れておかねばなりません。浅川巧が朝鮮に渡った年の一九一四年九月に、伯教は出張で帰国し、当時、千葉県我孫子（あびこ）に住んでいた柳宗悦を訪ねているんです。伯教が土産に持参した李朝時代の壺の美しさに、柳は感嘆の声をあげたといいます。柳宗悦は一九一六年に、初めて朝鮮を旅行しておりますが、

その直接的なきっかけをつくったのは、浅川伯教であったわけです。

ところで、青年期の浅川巧を知るためには、本来ならば、彼自身の発言なり、あるいは習作といったものを紹介すべきなのだと思います。しかし、残念なことに、浅川巧の場合、そうした原資料にあたるものがあまりないんです。というよりも、未発見状態におかれているといったほうが、より正確かもしれません。そのあたりの再発掘作業が進行中であるという事情につきましては、前もってご了解をえておきたいと思います。いずれにしても、あの当時としては、出色の教養人であり、しかも、村人たちの教導者でもあった祖父の小尾四友、世話好きで大らかな性格だった母けい、加えて、勝れた先達でもあり、かつ同志でもあった兄伯教……、こうした身近な人々の薫陶を受けつつ、浅川巧の人格形成の基礎がはぐくまれていったわけです。

一九一四年、朝鮮へ渡った浅川巧は、まだ二十三歳の青年だったわけですが、渡航直前、親しい友人に書き送った手紙があります。それは後年の浅川巧をしのばせるとともに、青年らしい客気にみちたほのぼのとした内容ですので、その一部を、以下に引いてみることにします。

「世界は出来るだけ広くしてゆっくり住むに限る。牧師にもなりたくない。画家にも小説家にも詩人にも百姓にも商人にも大工にも遊人にもなりたくない。然し随時説教もする、描きたい時は絵も描く、逆上して来たら詩人の真似をする、食えなくなったら商人にもなる、百姓もしたり、大工桶屋の仕事もやって見たい」

非常にのびやかで、自由な考え方をしていたことが、この手紙の一節によっても、充分にうかがえ

ると思います。農林学校時代の浅川巧は、トルストイに大変心酔していたといわれています。林業を学んだことも、トルストイ流の田園生活への憧憬の念が、やはりあったのかもしれません。また、国土を緑化するという使命感にも、燃えていたのだと思います。

さて、浅川巧が職についた朝鮮総督府管下の林業試験場は、前にもちょっと触れましたが、その前年に発足したばかりでした。浅川巧はこの創業期の林業試験場で、献身的に働き続けました。彼は、朝鮮人と一緒に仕事をするためには、朝鮮語を勉強する必要があるということで、朝鮮語も一所懸命学んだそうです。彼は最初、雇員としてはいり、のちに技手に昇進しています。ご存知のように、朝鮮は非常に禿山が多い。ために旱魃や洪水に、ずっと悩まされてきた。つまり、朝鮮においては、植林事業というものが、重要な意味をもっていたわけです。そうした大きな流れの中にあって、一林業技手である浅川巧は、二十年近い生活を送っているんですね。日本の植民地行政の重要な一環として、当時の朝鮮での林業が、どのように進められていったのか、その過程で、浅川巧はプラス価値、マイナス価値を含めて、いったいどのような足跡を残しているのか、別の言い方をすれば、朝鮮総督府の一官吏である浅川巧を、どう位置づけるかということがあります。ここには、大変興味深い問題が宿されているはずなんですね。けれども、林業技手としての浅川巧に関しては、当時の朝鮮での林業行政のことも調べなければならないので、私の調査は、いまだ非常に不充分な段階なんです。したがって、きょうのところは、私が調べた限りでの報告にとどめざるをえないことを、事前にお断わりしておきます。

ところで、浅川巧が林業試験場で、どんな仕事をしていたかといいますと、第一に、養苗実験というものをやっております。いろいろな種類の木の苗を育生して、どの樹木が朝鮮の風土に適合するかをためしたわけですね。これは植林事業を成功させる上での、大事な基礎作業だったのだと思います。林木の種子採集のために、浅川巧は朝鮮各道に出張したり、養苗講習会を開いて講演を行なうなど、多忙の日々を送っていたようです。同時に、朝鮮全土の巨樹老樹の調査にもたずさわっています。この時の調査記録は、同僚の石戸谷勉との共著で、総督府から『朝鮮巨樹老樹名木誌』(一九一九年刊)として出版されています。同じ年に、やはり石戸谷勉と一緒に『樹苗養成指針・第一号』という専門書も出している。この本は、一九四〇年に出版された『朝鮮の林業』の中で、林業試験場創始以来の主なる業績の一つにあげられています。その他、林業関係の浅川巧の論稿は相当な量にのぼります。たとえば、『朝鮮山林会報』一九二五年三月号に、浅川巧の「萩の種類」という論文が載っている。そこでは、朝鮮の禿山の緑化のために、荒地でもよく繁殖する萩の植付けがすすめられているわけです。こうした林業関係の残されている論稿の質量から推しても、朝鮮の近代林業に果した浅川巧の足跡は、意外に大きなウェートをもっていたのではなかろうか。それをどう評価するかは別として、まあ、そんなふうに私は考えています。

当初、林業試験場は京城郊外の北阿峴里に設けられたのですが、一九二二年に清涼里に移転します。仕事上の便利さを考えたからでしょうが、浅川巧も試験場内の官舎に居を移します。そして、この家が彼の終世の住居になるわけです。また、林業技手としての調査・啓蒙活動で朝鮮各地をめぐること

になりますが、おそらくその過程で浅川巧は朝鮮語をマスターしたものと思われます。先ほど、朝鮮在住とともに、浅川巧独自の思想的歩みが始まったのではないかと申しあげました。それはやはり、朝鮮各地を自分の足で歩いた体験が、彼に多くのものを目撃させたと思うからなんです。加えて、浅川巧の場合は、朝鮮語を習得していましたから、彼は直接に朝鮮人に向かって話しかけることができた。逆にいえば朝鮮人たちからも、さまざまな話をじかに聞かされたはずです。そうした体験が積み重なっていく中で、浅川巧の朝鮮に対する認識は深まり、みがきあげられていったのではないでしょうか。しかもそれは朝鮮人一般の生活を通してえた、いうならば血の通った認識でもあったわけです。

なお、浅川巧の家庭について述べますと、彼は渡航した翌々年の一九一六年に、友人の浅川政歳の姉であるみつえと結婚し、翌年に長女園絵をもうけています。一九二一年にみつえが病死し、四年後に大北咲子と再婚しています。戦後、夫人と娘さんは柳宗悦の世話で、東京の駒場にある日本民芸館で働くようになります。一九七六年、夫人と娘の園絵さんが相次いで亡くなられました。園絵さんは結婚されなかったため、浅川巧の家系は絶えてしまっております。

それでは次に、浅川巧と柳宗悦との出会いについて語ることにしたいと思います。柳との出会いは浅川巧にとって、その後半生を決められてしまったともいうべき、大きなエポックを画す事件だったといえそうです。それは柳宗悦にとっても、同様の作用を及ぼしたことは前に紹介した柳の感動的な追悼文によっても、明らかだろうと思います。兄伯教の影響もあって、浅川巧の朝鮮の美術工芸に対する興味は、一応の下地があったものとみられます。しかし、柳宗悦を知ることによって、その本当

の価値を明示されたのではないでしょうか。柳宗悦と浅川巧の関係は、勝れた研究者と、同じように勝れた報告者との出会いとして、当初は出発したように思われます。柳は浅川巧を通して、朝鮮の美術工芸品の背後にある、朝鮮人の現実の生活感覚を教えられたのでしょう。そして、浅川巧は柳を通して、朝鮮の民芸品や工芸品に対する眼を、換言すれば、方法論といったものを学んだといえるように思います。またこれは、副次的要素だったわけですけれども、柳宗悦のもっていた幅の広い交友関係が、浅川巧をして、もっと広い世間に身を置かせるきっかけとなったことも、存外に大きな事柄だったのかもしれません。

浅川伯教からの強い慫慂（しょうよう）もあって、一九一六年八月に、柳宗悦は初めての朝鮮旅行を行ないます。現地で柳の案内役を勤めたのは、いうまでもなく浅川伯教でした。伯教は釜山まで赴き、柳を出迎えています。そして、兄の紹介によって、浅川巧と柳宗悦との出会いが京城の地で生まれたわけです。この最初の朝鮮旅行について、柳自身は後年、次のように述べています。

「私が朝鮮に関心をもったのは、学生の時からであった。私の姉は日露戦争時代に、仁川の総領事をしていた加藤本四郎氏に嫁ぎ、私の妹はのちに内務局長〔朝鮮総督府〕になった今村武志氏に嫁いでいた。そういう因縁もあったが、何より朝鮮のものを知る機会を得たのは、浅川伯教、巧両兄弟を知ってからだった。京城の阿峴里にあった巧さんの家に泊めてもらった時から朝鮮の民芸の美へ大きく眼を開いた」（「朝鮮民芸のこころ」『親和』一九五四年三月号）

それで、柳宗悦が泊ったという浅川巧の家のことですが、これは単に、朝鮮の民芸品や美術品がた

くさんあった、そういうことではなかったろう、と私には思われてなりません。浅川巧という人間に出会ったことによって、朝鮮を愛し、朝鮮人を愛してやまない一人の日本人の姿が、柳の眼前にはあった。その結果として、集められた朝鮮の民芸品や美術品に、柳宗悦は感動したのではないでしょうか。くり返しになりますが、そのような勝れた作品を生みだした朝鮮民族という存在を、柳は浅川巧を通して肌で実感した。そこに、柳宗悦における朝鮮民芸の美、そして朝鮮への開眼があったのだ、と私は考えているわけです。もちろん、朝鮮の民芸品に感動する柳の姿は、浅川巧にとっても、大変に嬉しいことだったでしょう。敬愛できる一人の同志を発見できただけでなく、自己の鑑賞眼の正しさを保証する、これ以上の美の判定者はいなかったともいえるからです。

柳宗悦との交友関係が始まった三年後の一九一九年、朝鮮では有名な三・一独立運動が起こるわけです。浅川巧は朝鮮の地で、これを目撃することになります。彼がどのような視点から、この三・一独立運動をとらえていたのか、もし、それがわかれば、浅川巧の朝鮮を植民地化したことに対する批判、あるいは姿勢というものが、うかがえることになります。しかし、残念なことに浅川巧の政治問題に触れた発言、その直接的な資料をいまのところ私は見つけだせないでいます。しかし、間接的な資料として、この三・一独立運動直後に、柳宗悦にあてた手紙が残されているんです。柳はその著書『朝鮮とその芸術』に収めた「彼の朝鮮行」という文章の中で、浅川巧の手紙を引用しているわけです。もっとも、その名前は伏せられた形になっております。けれども、この時期、浅川伯教は彫刻修業のため東京にいましたから、朝鮮から柳にこの種の便りを送る人間は、浅川巧以外にちょっと考え

られません。この手紙は、間違いなく彼のものだと思われます。浅川巧はこう語っています。
「私は始め朝鮮に来た頃、朝鮮に住むことに気が引けて朝鮮人に済まない気がして、何度か国に帰ることを計画しました。……朝鮮に来て朝鮮人にまだ親しみを深く感じなかった頃、淋しい心を慰めて朝鮮人の心を語って呉れたものは矢張り朝鮮の芸術でした。私はいつもの祈りに、私が朝鮮に居ることが何時か何かの御用に立つ様にという事を加えて淋しい心に希望を与えられていました」
すぐにわかるように、この手紙には、三・一独立運動に直接触れたところはありません。しかし、「朝鮮に住むことに気が引けて朝鮮人に済まない気がして」という言葉から、浅川巧自身の苦しんでいる様子が察せられます。気がひけた、すまないという感性的な言葉が、具体的にどのような内実をもっていたのか、また、それがどの程度まで意識された表現だったのか、実際のところは、私にも判然としません。とはいえ、浅川巧の朝鮮人に対する日常の付き合い方から推せば、淋しさを強調した表現の内には、かなりの強い批判の姿勢が読みとれるようにも思えます。
それから、私が非常に浅川巧を偉いなあと感じるのは、「何時か何かの御用に立」ちたいと、ひそかに決意をもらしていることです。彼は朝鮮から日本へ帰ることも考えた。そして、朝鮮にとどまる限りは、朝鮮人のために役立ちたいと思い続けていた。私はこうした点が、他の在朝日本人と浅川巧が大変に違っていたところだろうと思うんです。そのような彼であったからこそ、三・一独立運動が起こって、ほとんどの日本人が朝鮮人から白眼視された時にも、例外でありえたのでしょう。柳宗悦は先に引用した「彼の朝鮮行」で、「彼〔柳自身をさす〕はこの友達に愛と敬意とを感じていた。殆ど全

ての日本人が憎しみの的である時も、この友達ばかりは彼が住む町の凡ての朝鮮の人達から、愛せられ慕われて、その名を知らない者はなかった」と証言しているのです。浅川巧の朝鮮人に向かってのすまないという気持が、真摯なものであったこと、朝鮮人のために役立ちたいという決意が、実践をともなった自覚の念に支えられていたこと、おそらく、それを朝鮮人の側もよく理解していたのでしょう。だから、浅川巧に対しては、白眼視することがなかった。そう私には思われるのです。

三・一独立運動に際して、柳宗悦は日本の朝鮮における武断政治を批判した論文を発表しています。それは「朝鮮人を想う」と題して『読売新聞』に掲載され、大変に大きな反響を呼びました。柳はその中で、日本が正しい人道を踏んでいないと指摘しています。そうであれば、独立が朝鮮人の理想となるのは必然だと、日本の朝鮮政策の転換を鋭く迫りました。当時の政治状況を考慮するならば、この柳宗悦の発言は、非常に勇気のある行為だった。同時に、この事実は柳宗悦の朝鮮に対する識見の確かさを例証するものでもあったと思います。しかし、柳がなにゆえ、この確信にみちた勇気ある発言ができたのか、こう設問する時に、私は浅川巧の姿を連想せざるをえないのです。柳が「朝鮮人を想う」を書く際、まず念頭においたのは、浅川巧だったのではなかったろうか。柳宗悦の、浅川巧だけが「朝鮮の事を内から分っていた」とする言葉が正しいとすれば、柳宗悦の勇気ある発言の核心部には、浅川巧の意見がまぎれもなく投影していたに違いないと思います。二人の友情の深さ、朝鮮問題に取り組んだ時の結束力の固さ、これらを考えた場合、私の推定はたぶん間違っていないと思っています。

いま述べましたように、三・一独立運動の際、柳宗悦は日本の朝鮮政策を批判しましたが、彼は批判するだけではなく、積極的に活動にものりだそうとします。その活動自体は、いかにも柳宗悦らしい文化活動だったわけですが……。柳は、三・一独立運動を朝鮮人の暴動ととらえ、これを不逞の徒の妄動だとした、日本人一般の風潮に対して、これを正そうと考えました。また、朝鮮人に向かっては、日本人の中にも自分のように積極的な姿勢をもって、朝鮮と朝鮮人に愛情を抱いている人間がいることを、なんとかして訴えようと考えました。

三・一独立運動のあった翌年、一九二〇年五月に、柳宗悦は兼子夫人とバーナード・リーチを同行して、京城へ赴きます。声楽家であった妻による音楽会と、彼の講演会を開くためでした。柳ら一行は、朝鮮人から大変な歓迎を受けております。予定をはるかに越えて、七回の音楽会が開催され、講演会と歓迎会とが、おのおの四回ずつもたれているわけです。柳宗悦はこうした実践活動を通して、いくつかの計画を考えるようになります。その一つとして、彼は自分が在職していた東洋大学の分校を、朝鮮に開校しようとしたと伝えられています。ただし、この計画は実現にはいたりませんでした。そして、柳が考えたもう一つの計画が、朝鮮民族美術館の設立だったわけです。いうまでもなく、柳の朝鮮での活動には、浅川兄弟がかげになりひなたになり協力しております。浅川巧は柳から朝鮮民族美術館設立のプランを打ち明けられ、もう一も二もなく賛成したということです。それだけではなく、柳宗悦のたのもしい片腕となって、その実現に邁進することになるんですね。

柳宗悦が朝鮮民族美術館をつくろうとした目的は、次のようなことだったと思います。朝鮮民族固

有の美術品や工芸品を蒐集し、これを展示することによって、それらの作品を生みだした民族の心というものを、広く人々に知らせること、すなわち、そのことによって、日本人に朝鮮民族の真の姿を理解させること。同時に、朝鮮人には自民族が生みだした美の世界を、再認識させる契機とすること……。柳はその双方を合流させることによって、日本人と朝鮮人の相互理解を深めたいと考えたのでしょう。実行力のある柳は、設立計画を着実に進行させていきます。一九二一年一月号の『白樺』誌上に「『朝鮮民族美術館』の設立に就て」を発表しました。柳はこの中で、美術館を設置する場所は、京城とすることを決めております。また、同じ『白樺』誌上では、寄付金の募集も呼びかけています。その送り先は、日本では柳宗悦、朝鮮では浅川巧となっているんです。この事実からただちにわかることは、朝鮮民族美術館設立計画の推進者として、浅川巧は柳に次ぐ重要な役割を担っていたということです。

問題の朝鮮民族美術館の正式な開館は、一九二四年四月ですが、事実上の活動は一九二一年に始まっています。この年の一月、京城に向かった柳宗悦は、時の朝鮮総督斎藤実と面談し、景福宮内の一角にある観豊楼を、美術館の建物として借り受けているわけです。観豊楼は総督府の所有物だったのですが、その使用許可が下った背景には、いくつかの事情が推測されます。柳宗悦は、浅川巧らとともに、美術館の敷地探しをしたという資料がありますから、自力で美術館の建造を予定したが、力及ばずしてやむなく観豊楼の使用許可を求めたということになるのでしょうが、そのあたりの経緯を伝える正確な資料が、実はないんです。逆の側からの資料、つまり、斎藤実が柳宗悦に使用を許した理

由も、はっきりしたところがわかりません。おそらく、双方にそれぞれの思惑があったのだけれども、美術館設立の件では、各自に妥協できる合意点があったのだと思います。

といいますのは、先ほども触れましたように、三・一独立運動後、日本の朝鮮政策は武断政治から文化政治へと転換がはかられたのですが、その政策転換の総責任者として、斎藤実は朝鮮総督に赴任しているわけです。斎藤実の思惑としては、朝鮮人の政治への関心を文化の方面に向けさせて、独立運動の気運を鎮静化したい意向があった。ですから、美術館の設立計画には利用価値があると考えたと思います。他に伏線として、柳宗悦の私的コネクションも働いたと思われます。柳の父は海軍少将であり、海軍畑から政治家に転じた斎藤実にとっては、先輩にあたっていた。柳の妹がのちの総督府内務局長の今村武志に嫁いでいたことは、前に触れたとおりです。この義弟の今村武志が、斎藤実とは同郷で親しい間柄なんです。さらに、柳の姉はのちの海軍大将谷口尚美に嫁いでいるんです。たぶん、そのへんの人間関係が、柳にとって有利に作用したのではないでしょうか。いずれにしても、朝鮮民族美術館が総督府の援助によって成立をみていることは、見逃してはならない事柄だろうと思います。

ところで、朝鮮民族美術館は観豊楼から緝慶堂に場所を変え、浅川巧はその実質的な管理運営者になっています。民族美術館は、原則として春秋に催し物を行ない、それ以外の時期には公開されませんでした。とくに見学を希望する客があった場合は、浅川巧が案内してコレクションを観覧させていたようです。朝鮮民族美術館が企画した催し物としては、泰西名画展覧会、李朝陶磁器展覧会、木喰

仏写真展などがあります。泰西名画展覧会は、複製画によるものでしたが、ヨーロッパ近代絵画を朝鮮に紹介した最初の試みだったのだそうです。輯慶堂は現在も、ソウルの景福宮にあります。民族美術館のコレクションは韓国国立博物館に移管され、そこの大切な展示物の一部となっています。

ここで、一つだけ付け加えておきたいのは、総督府との折衝の過程で、美術館に付せられた「民族」という二字をめぐってトラブルが起きたということです。やはり、朝鮮民族美術館と公式に謳うことは、朝鮮人の民族意識を覚醒させ、ひいては独立思想の鼓吹にもつながるということで、総督府側としては、これを避けたかったのでしょう、民族という二字を削除するよう、交渉の際に要求したけれども、柳宗悦は頑として譲らなかった。この事実については、浅川巧の友人である浜口良光が『民藝』の一九六一年十二月号で証言しています。したがって、朝鮮民族美術館にはさまざまな問題点があるわけですが、柳や浅川巧が切望した、朝鮮民族の心を広く知らせるという根本の姿勢だけは、妥協の中でも貫かれたとみなしてよいと思います。

これは補足的な事柄になりますが、浅川巧も創立者の一人であった「朝鮮趣味を語る会」について、少し話しておくことにします。安倍能成の追悼文のところでも、ちょっと触れておきましたが、この会が結成されたのは、一九二八年頃ではないかと思います。メンバーは安倍能成、速水滉、上野直昭、浜口良光、渡部久吉、土井浜一らです。当時の京城で、文字通り比較的ですが、朝鮮文化に理解のあった文化人の集団だったわけです。どんなことをしていたかというと、だいたい一月に一度ぐらい集まって、朝鮮の美術工芸、あるいは、食べ物や遊びなどについて話しあっていた。その道の朝鮮人を

呼ぶこともあったらしくて、その場合には、浅川巧が通訳をやったということです。彼は会の幹事役も務めていたんですね。朝鮮人の立場からすれば、植民者である日本人に、朝鮮を趣味で語られてたまるか！　そういう感情が当然あったろうと思います。いずれにせよ、先に話した朝鮮民族美術館の設立や、柳宗悦の朝鮮での活動は、こうしたバックグラウンドに支えられて行なわれたわけです。

話の最初のほうで、浅川巧についてのいくつかの評価を紹介し、朝鮮人の評価についても、一、二、とりあげてみました。しかし、それらの朝鮮人の評価は、浅川巧の業績とか、著作とかに関して論じたものでした。浅川巧の人柄について記したものは、ごく狭い範囲に限られていました。それはそれで、貴重な証言なのですが、私自身が関心を強くひかれるのは、もう一歩踏みこんだ浅川巧への評価なんですね。つまり、浅川巧が勤務していた林業試験場で、日常的に顔をあわせていた朝鮮人同僚と、彼がいったいどういう付き合いをやっていたのかということなんです。一九六四年に浅川巧の墓が修復されたことは、先にお話ししましたが、その紹介記事によると、次のようなことであったようです。

「浅川さんはつねひごろ、パジ・チョゴリの朝鮮服をつけ、食事もいっさい韓国式。ことばもなめらかな韓国語だった。酒は韓国人のどぶろく『マッカリ』しか飲まなかった。官舎は韓国人の同僚たちのクラブのようだったという。当時の同僚の一人、方鐘源（パンジョンウオン）さん（六八）は『浅川さんは男のコジキに会うとかならず村役場に連れていってなにか仕事を見つけてやりました。女のコジキに会えばポケットにはいっているお金をみんなあげてしまいました。浅川さんはそんな人でした』と遠いむかしのお

もかげをしのんでいた」(『東京新聞』一九六四年六月二十八日付夕刊)

それから、現在、韓国林業試験場の顧問になっておられる方の浅川巧についての思い出話を、私は伝え聞いています。この方は金二万(キムイマン)さんといい、韓国林業試験場の前身である朝鮮総督府林業試験場に一九一九年に入所し、浅川巧の同僚として、ずっと一緒に働いていた方です。金二万さんはいまもご健在で、浅川巧の墓の修復葬が行なわれてのちは、春秋二回、欠かさずに墓所を訪れているのだそうです。以下に、金二万さんのお話をご紹介いたします。

——朝鮮人同僚に対する浅川巧の態度は、どのようなものだったのでしょうか。

浅川巧さんは、韓国語が非常に上手で韓国人とは主に韓国語で話しました。日本人同僚から、あなたは韓国人か、というふうにいわれるほど、いつも韓国人の側に立って仕事をなさっていました。その結果、日本人からは迫害されているようにもみうけられました。

——浅川巧は、朝鮮の服装でいることが多かった、と聞いているのですが……。

そうです。浅川さんはパジ・チョゴリを好んで着ておられました。韓国の木履(木製のあしだ)や韓国の長いキセルを愛用していました。縄でつくったズタ袋をぶらさげて、そういう格好で、市場へ買い物にでかけたりしていたものですから、怪しまれて警察の取調べを受けたこともあったようです。

——浅川巧の家には、朝鮮人がたくさん出入りしていたとのことですが……。

そのとおりです。浅川さんは平素韓国人に親切で、韓国人を愛していましたから、正月とか、節気

の時には、韓国人の同僚がたくさん浅川さんの家に集まりました。

――朝鮮人の学生に、浅川巧は奨学金を出していたと聞いていますが……。

浅川さんは林業試験場の職員の子弟たちに、お金を出してくれました。中学生で援助を受けた人も、二、三人はおりました。

この間の事情を少し説明しますと、浅川巧の林業試験場での地位は技手だったわけで、それほどの高給を食んでいたのではないんですね。あまり裕福ではない家計から奨学金を出していたのだと思います。金二万さんの語るところによると、彼が亡くなった時、葬式代さえなかった。もちろん、墓石を建てる金もなかったということです。それから金二万さんは、浅川巧の遺言についても話してくれたとのことです。自分は死んでも朝鮮にいるだろう、朝鮮式に埋めてくれ、そういい残して、浅川巧は死んだそうです。

そしてさらに、金二万さんは、こんなエピソードを告げたというのです。浅川巧が死んだのは、一九三一年四月二日のことですが、その次の日の四月三日に、林業試験場では、なにか植樹祭の行事が予定されていたのだそうです。浅川巧がそれを金二万さんに語ったのは、おそらくは、死ぬ少し前だったのでしょう。「浅川巧さんは、この植樹祭が終わったら、自分は林業試験場をやめるつもりだと話していました。浅川さんは朝鮮人の味方に立ったため、日本人と非常にそりがあわなくなっていたのです」。私は金二万さんがふと漏らされたという、このエピソードを聞いて、やはりそうだったの

かと思いました。彼は表立った形での総督府批判は、なにもやっていません。けれども、朝鮮人との付き合いを深めていく中で、総督府の役人であり続ける自分に、強い矛盾を感じるようになっていたのではないでしょうか。そこで辞職の決意を固めたのではないか、そう思います。

これまでの話で、浅川巧の大体の事跡に関しては語り終えたつもりです。そこで彼の書いた書物について、簡単に触れておくことにします。林業関係のものを除きますと、浅川巧が生涯に残した単行本は二冊だけです。その一冊は『朝鮮の膳』、もう一冊が『朝鮮陶磁名考』です。後者は、彼の遺書になったわけですが……。長い間、この二冊の本は絶版状態にありましたけれども、最近になって、八潮書店から覆刻出版されました。当時の雑誌『工藝』『アトリエ』『大調和』などに発表された、美術工芸関係の論稿を新たに編んだ『浅川巧小品集』が同時に出版され、全体で浅川巧著作集と題されています。

浅川巧の書いたこの二冊の本は、その分野における大変な名著だといわれています。韓国では、だいぶ前に『朝鮮陶磁名考』の影印本が出されております。『朝鮮の膳』には、柳宗悦が跋文を寄せているので、その一部を読んでみましょう。

「挿絵に入れた膳の大部分は実に君と僕とが『朝鮮民族美術館』の為に集めたものだった。なけなしの金でお互にこまり乍らも、是等のものを保存したいばかりに力を協せてきたのだ。否、君の理解と情愛と努力とがなかったら、何も成就しはしなかったのだ。……外にはこまかい雪がしきりなく戸を打っている。いつにも増して寒い京の夕べだ。君のいる京城の郊外は零度以下どれ程下っている事か。

だが今頃はあの温突（オンドル）の室で朝鮮の膳を囲み乍ら、朝鮮の食器で一家団欒の食事をとっておられる頃かと思う。斯く云う僕の一家も三度々々朝鮮の膳を離した事がない。どう云う廻り合せか、君も僕も一生朝鮮とは離れられない結縁がある様だ」

柳宗悦の文章からもわかるように、浅川巧の二冊の本は、彼の綿密な調査記録ともいえるものです。近代化の波が押し寄せる中で、失われていく朝鮮の民衆の生活器具であった、木製の膳や陶磁器類を蒐集し、後世にこれを記録として残そうとしたのでしょう。当時はまだ、それらの工芸品の名称や製作工程などを知っている古老たちが多くいましたし、浅川巧は朝鮮語が大変に達者であったので、この労作をものすることができたのだと思います。現在ではすでに、この本によらずにはわからなくなった器物の名称や事項などもあるようです。だから、いまの韓国においても、この分野の仕事をする人たちにとっては、必読の本の一つになっているということです。

さて、浅川巧は『朝鮮の膳』の末尾のところで、こう記しています。

「又或人は云う『我が朝鮮の文化は遅れた。遅れたからこそ今頃首都鍾路の真中に旧式の膳屋が店を張って居れるのだ』と、しかもそれ等の人達は他国の物質文明を謳歌し機械工業を礼讃して盛にその真似を企てている。その心持には大いに同情出来るが然しブレイクは云った『馬鹿者もその痴行を固持すれば賢者になれる』と。疲れた朝鮮よ、他人の真似をするより、持っている大事なものを失わなかったなら、やがて自信のつく日が来るであろう。このことは又工芸の道ばかりではない」

私は「このことは又工芸の道ばかりではない」という浅川巧の言葉に、強くひかれるものを感じま

す。彼はこの言葉に托して、言外に朝鮮の独立を願っているような気がしてならないのです。朝鮮人自身が、自国の固有なものに誇りをもち、どこまでもそれを大事にしていくならば、独立はなしとげられるのではないか、そう浅川巧は、静かな口調で、訴え続けているように思われるのです。

3

A　三・一独立運動ののち、四年後に起こった関東大震災の朝鮮人虐殺事件についてですが、この事件に対する浅川巧の発言が、なにかありますか。

いままで調べたところではありません。といいますのは、浅川巧は、たんねんに日記をつけていた形跡があるんです。その日記帳は、日本敗戦後、咲子夫人が日本へ引揚げる時、知合いの朝鮮人にあずけてきたらしいのです。この件に関しては、証人もいます。けれども、問題の日記帳は行方がわからぬままになってしまった。浅川巧があの事件に対して、なんらかの感懐を抱かぬはずはないので、この行方不明の日記帳が発見されれば、さまざまな事柄が判明するに違いないのですが……。現在、活字になっている浅川巧の論稿に限っていうと、関東大震災についての言及はみあたりませんね。しかし、震災後、柳宗悦夫妻が京城にきて、朝鮮人被災者救援のための音楽会を開いているんです。おそらく、浅川巧はこれに、協力していると思います。

B　お話を聞いていて、大正期における白樺派の影響力、とくに、その裾野の広さみたいなものを感じました。現在からみると、白樺派の活動は、有産者階級の子弟たちによる啓蒙運動といった側面が鼻につき、とかく軽視しがちになるようです。けれども、当時の地方文化に及ぼした影響力という点では、予想外に大きな功績を残しているらしい。信州白樺派はその例証といってよいわけですね。同じような視点から、浅川巧たちの朝鮮における文化面での活動を考えると、これを仮りに〝京城白樺派〟と名付けることはできませんか。つまり『白樺』の同人であった柳宗悦は、朝鮮と中央とを結ぶ仲介者だったのだと……。

それは非常に重要な問題だと思います。白樺派の運動というのは、大ざっぱにいえば、大正デモクラシーを代表する思想活動の一つであり、雑誌『白樺』は、あの時代の主流をなした文芸思潮の一つでもあったわけです。白樺派に対しては、そうした運動を歓迎する気運が、全国的に生まれてきていたんですね。地方都市を含めての教育水準の向上、あるいは、小市民層の大規模な台頭といった、そうした社会的変動の波に、自我の確立、個性の尊重を謳った白樺派の主張が、ぴたり呼応する面があったわけですね。いわゆる『白樺』の衛星誌が、全国各地で次々に発行されていった。新しい時代の流れに、身を投じようとしていた地方の青年にとって、白樺派は一つの活動の場を提供することができた。朝鮮では、さらに活動の場は少なかったとみられますから、在朝日本人にとって、白樺派の果した役割は、いっそう貴重なものだったのではないでしょうか。先に述べた「朝鮮趣味を語る会」の

同人の多くは、武者小路実篤の主宰した「新しい村」の会員でもありましたし、浅川兄弟ももちろんそうだったわけです。だから、これらを〝京城白樺派〟と名付けることは、可能だと思われます。また、朝鮮民族美術館を中心とした、浅川巧たちの朝鮮における民芸運動も、広い視野からみれば、やはり白樺派の運動の一端を担っていたといえますね。これは余談になりますが、先頃物故した社会学者の有賀喜左衛門も、信州白樺派の一人だったわけですね。有賀は一九二一年夏に朝鮮を訪れ、浅川巧を訪問しています。

C 白樺派の運動が、朝鮮人に与えた影響というものもありますか。

あります。具体例をあげると、白樺派の影響をうけて、『廃墟』という雑誌が創刊されています。この雑誌は、柳宗悦と親交のあった廉想渉や詩人の南宮璧（ナムグンビョク）が、中心メンバーになってつくられたものです。三・一独立運動の翌年、柳夫妻が京城を訪問したわけですが、柳兼子の音楽会を主催したいろいろな組織のうちの一つが、この『廃墟』のグループでした。廉想渉は柳の「朝鮮人を想う」を、最初に朝鮮語に訳していますし、南宮璧は一九二一年、柳の朝鮮旅行の時には、その案内人を務めています。余談になりますが、彼らの間で柳兼子が大変な人気であったことが、『廃墟』の一九二〇年四月号に掲載された閔苔原（ミンテウオン）の「音楽会」という小説に、よく描かれています。そんなわけで、柳宗悦や浅川巧の背後には、白樺派の影響を強くうけていた朝鮮人文学者たちがいて、こうした基盤のもとで、

柳や浅川巧らが活躍したということにもなりますね。ただ、個人的な接触はあっても、白樺派と朝鮮人文学者とが、相互に交流するところまではいかなかったようです。『白樺』誌上には、朝鮮人が登場していませんから。

B　浅川巧は総督府の下級官吏だったわけですね。それほど多額な給料をとっていないとしますと、家庭生活を維持しながら、朝鮮人の学生に奨学金を出せるような、経済的余裕があったのかどうか。また、彼の場合は、林業試験場に勤めていて、朝鮮民族美術館設立運動などに奔走したという。そうした暇があったことにも、ちょっと疑問を感じるのです。私自身が国家公務員のはしくれなので、現在ですと、とても不可能なようにも思われます。もっとも、昔はのんびりしていたんでしょうが。

浅川巧の給料は、中学校教員の初任給程度であったということです。いまと違って、あの頃の教員は、相対的には給料がよかったようですが……。それから、朝鮮の官吏ですと、植民地加俸というのが、六割加算されております。次に、浅川巧が林業試験場の勤務と民芸運動という、いわば〝二足のワラジ〟をはいていたことですね。そういう余暇があったのかどうかという問題ですが、いまのところは、どうもよくわかりません。今後の私の宿題にして、具体的なデータを集めていきたいと思っています。

D　浅川巧は四十歳の若さで世を去っている。ために、総督府の役人であったことの矛盾など、浅川巧自身による結論が出されぬままに終わってしまった。けれども、表現されたものは残されていなくとも、浅川巧には、ある種の可能性が読みとれるような気がするのです。簡単にいってしまえば、白樺派の限界を越えるといった……。いま、朝鮮に対する日本人のあり方という問題を考える場合、そのあたりが、柳宗悦と浅川巧とを分かつ、一つのポイントのようにも思えるのですが、いかがでしょうか。

浅川巧は先にもお話ししたように、一度、日本に帰ろうとして、けっきょく朝鮮に残ったわけですね。その彼が新しい状況のもとで、日本に帰ろうと、もう一度思ったかどうか、いまのところは資料がないのでわかりません。いずれにしても、彼は総督府の役人はやめたと思います。浅川巧が死んだ一九三一年には、満州事変が勃発しており、日本は十五年戦争への道を歩み出しますが、その後の朝鮮においては、日本語の強制、創氏改名という、いわゆる〝皇民化政策〟が強行されたわけですね。民族固有のものをあくまでも尊重する、民芸運動の基本姿勢からいっても、浅川巧の立場は、相当に深刻な状況におかれたはずです。表立った形での発言を行なわなくとも、浅川巧の日常的な朝鮮人に対する態度が、当然、状況との間に葛藤を生じることになったでしょう。そして、私の推測としては、浅川巧は自己の信念を曲げずに、襲いかかってくる運命に殉じたような気がします。しかし、これ以上の可能性を論じると、それは仮説になってしまいますから……。

ところで、柳宗悦の朝鮮に対する強い関心は、一九二四年の朝鮮民族美術館の開館で終わっていると思います。柳の関心の中心は、その後、木喰仏に移り、さらに、沖縄・アイヌ・台湾……といったふうに、その対象を変化させていきます。ところが、浅川巧の場合には、朝鮮を離れることはなかったわけです。だから、その時点で、二人の友情は続きながらも、朝鮮に対するかかわり方は、少し違ってきていたと思います。換言すれば、朝鮮について、浅川巧独自の考え方が発酵し始めていたのではないかということなんですが。しかし、そうした視点からの両者の比較に、私はまだ手をつけておりません。今後、二人の民芸論についても、綿密な読み直し作業をしてみたいですね。そういう形で、調査をもっと深く続けていけば、浅川巧という存在は、まだまだ多くの可能性を秘めている人間だと思います。

（文中の引用文は、旧仮名づかいを新仮名づかいに改めた）

（一九七九年九月七日）

## ≪人名注≫

**金教臣**（一九〇一〜四五）咸鏡南道咸興出身。愛国的キリスト者、朝鮮無教会派の祖といわれる。日本へ渡り、正則英語学校、東京高師に学ぶ。在学中内村鑑三に師事。一九二七年咸錫憲らと『聖書朝鮮』を発刊し、民族的キリスト教の立場から愛国を訴えた。その間、養正高等普通学校、第一高等普通学校などで教鞭をとり多くの人材を育てた。一九四二年独立運動の容疑で一年間投獄。出獄後に病死した。著作は『金教臣全集』全六巻がある。

**金貞植**（?〜一九三七）黄海道海州出身。李朝末期開化派の重鎮として活躍。一九〇二年頃キリスト教に入信。一九〇六年から一六年にかけ、在日本東京朝鮮キリスト教青年会初代総務を務め、その間に内村鑑三と知合い終生親交を結んだ。矢内原忠雄が朝鮮への関心をもつようになったきっかけの一つは、内村集会における金貞植との出会いであったといわれる。日本文の「内村鑑三氏を追憶す」がある。

**白南薫**（一八八五〜一九六七）黄海道長連出身。明治学院、早大に学び、在日本朝鮮留学生学友会会長、在日本東京キリスト教青年会第二代総務を務めた。この間、吉野作造らの知遇を受け、武断統治下にあった朝鮮の現状を批判。帰国後教育界に身を投じ、晋州一新高等普通学校、協成実業学校校長などを歴任。解放後は民主党・新民党幹部として韓国の政治界で活躍した。

**廉想渉**（一八九七〜一九六三）ソウル出身。本名は尚燮(サンソプ)。普成中学中退後に日本へ渡航、京都府立二中、慶大予科に学んだ。一九一九年三月、大阪天王寺公園で行なわれた朝鮮人の独立運動を指導して逮捕。在日中に柳宗悦や吉野作造らを識る。翌年帰国して『東亜日報』に入社。文学同人誌『廃墟』創刊に参加。二一年処女作「標本室の青ガエル」を発表して注目され、以後活発な創作活動にはいった。写実主義の立場から心理分析的手法を最初に導入した作家といわれる。のち『東明』『毎日申報』などに転じ記者生活を続けた。一九三六年満州に赴き、一時満鮮日報主筆兼編集局長を勤めたこともある。解放後、満州の安東から帰国、ソウルの『京郷新聞』編集局長などの任についたが、終始旺盛な執筆活動を継続。一九五四年韓国芸術院の終身会員に推され、その死は韓国最初の文壇葬をもって遇された。

**南宮璧**（一八九四〜一九二二）平安北道出身。号は草夢。父は『皇城新聞』『朝鮮日報』社長を務めた南宮薫。漢城高等学校を卒業して日本で修学。この間、日本の雑誌『太陽』に「朝鮮統治政策に就いて」などの論稿を書く。帰国後は一時五山中学で教鞭をとり、文芸雑誌『廃墟』の同人として活躍した。浪漫主義風の詩作により天才詩人と謳われたが、二十七歳で夭折。朝鮮の美術工芸にも造詣が深かった。

# 〃抵抗の作家〃の生涯
## ——金史良とその時代

安　宇植

### 1

きょうは、金史良(キムサリヤング)という一人の作家について語るわけですが、私はこの作家については、一応バイオグラフィーのようなものを、岩波新書ですでに書きました。ところで、金史良という作家の位相といったものを、いま端的に規定するとすれば、どうなるのか。現在日本では、ご承知のように日本語を使って、さまざまな文学活動にたずさわっている朝鮮人作家がいます。金史良とは、そうした作家たちの、いわば先駆的存在ではなかったのかと……。これが要するに、きょうの私の話の総論になると思います。ただし、先駆的ということは、なにも時代的に順序だてて、その一番最初であるという意味ではありません。金史良よりも早く日本へきて、日本語で文学活動を始めた朝鮮人には、張赫宙(チャンヒョクチュ)という作家がおります。けれども、張赫宙については、朝鮮人の側からみて、どうも先駆的とはいえないのではないか。そのように私は思っています。つまり、どうしてもそこには、民族的な問題がからんでくるわけです。詳しくは触れえませんが、張赫宙について簡単に結論しますと、彼は民族

的な意識を喪失していった、あるいは、させられてしまった朝鮮人作家、ということになるだろうと思うからです。野口赫宙と名を改め、彼がいち早く帰化してしまっている事実もそのことと無関係ではありますまい。

さて、金史良の創作活動をふりかえって、みてゆきますと、その中心的な活動の時期は、一九三〇年代後半から、四〇年代の初めにかけてであることがわかります。そして、この時期に文学的活動期をもったということが、実はさまざまな意味をはらんでいるように、私には思えるのです。少し大袈裟に大状況というものを考えてみますと、一九三〇年代後半には、スペイン戦争がありましたし、日中戦争が全面戦争にはいっていった時期でもあります。これはやがて、太平洋戦争、第二次世界大戦というふうに拡大していくわけですが……。このいわば激動を反復した時代のただ中で、金史良の文学活動が、それも日本語でもって行なわれている。そのことが、プラスの意味とマイナスの意味を含めて、きわめて興味深い問題を投げかけてくるわけです。

さきほど話の初めに、金史良という作家は、現在の在日朝鮮人作家の先駆的存在として、位置づけることができそうだ、と私は申しあげました。この仮定に関連させ、さらに正確にいうと、日本語を真正面から駆使し文学活動を行なった、おそらくは、朝鮮人としての最初の人間であったと……。たぶん金史良にとって、日本語の使用は意識的になされたものであり、したがってそこには、託すべきある明白なる意図が秘められていたのではないか、ということになります。そこで、もう少し焦点をしぼっていくと、金史良より以前の作家たちの文学的活動というものが、やはり問題になってきます。

つまりそれは、朝鮮における近代文学がおかれた著しい特殊事情、いやもおうもなく引き受けさせられた植民地統治下の現実に、どうしてもぶつかってしまうわけです。端的にいえば、それぞれの作家たちは、さまざまな努力を重ねて、現実的にも意識のうえでも日本の植民地状態からの脱出を計った。なんとかして、そこを突き抜けようとしたんですね。

こうした朝鮮近代文学が持つ独自の形成過程を踏まえていたいために、私は金史良のバイオグラフィーを書きました時、その比較すべき対象として、二人の文学者をとりあげました。一人は、金史良よりも少しばかり早い時代に登場した、後期朝鮮プロレタリア文学の中心メンバーの一人であった林(イム)和(ファ)という詩人。この詩人については、松本清張の小説『北の詩人』の主人公ということもあり、日本でもわりあい知られているように思います。もう一人は、金史良にとっても林和にとっても、いわば大先輩にあたる李光洙(イーグヮンス)という作家です。彼は植民地統治時代に民族反逆行為を犯したということで、朝鮮戦争中、人民軍によって朝鮮民主主義人民共和国へ連れ去られたと一般にいわれております。

ともあれ、一九〇〇年代にはいると、日本の明治文学と同じように、朝鮮でも言文一致の新しい文学が起こります。李光洙はその先駆を担った作家、ということになっています。李光洙の作品を読んでみますと、そこには、非常に濃厚な民族主義思想というものが流れている。彼はこの民族主義なるものをテコに、創作活動にはいります。そして、植民地状態にありながらも、なおかつ日本がたどりついた近代化への道を、朝鮮においても切り拓こうとして、思想的に努力し続けた作家でもある。私は、そのように李光洙をとらえています。李光洙の民族主義的な思想と行動の軌跡をたどってみます

と、一九一九年の三・一独立運動の際、彼は学生の分野でのリーダーになっているのです。三・一運動の前年、神田の猿楽町にあった、これはいまもありますが、朝鮮YMCAを拠点に、朝鮮人留学生たちの独立運動組織が生まれています。翌年、この留学生たちは、三月一日よりも一カ月ほど早い二月八日、東京から「朝鮮青年独立団宣言書」を発表するわけです。宣言書の起草にあたったのは李光洙であり、彼はその直後に上海へ潜行し、やがて大韓臨時政府に加わっていく。要するに、初期の李光洙の作家活動は、独立運動と手をたずさえて進められているわけですね。李光洙は十三歳で日本へ渡り、明治学院に学びます。その後、朝鮮へ帰り、平安道の五山学校で一時教鞭をとっております。これはちょっと余談になりますが、五山学校は、現在の韓国で民主化運動を進めている咸錫憲（ハムソクホン）の母校でもあります。それからこのあいだ（一九七五年七月十七日）ソウルで亡くなった張俊河（チャンジュンハ）もそうですが、李光洙も含めて、この人たちはすべて平安北道、あるいは南道生まれの同郷人なんですね。同時に、キリスト教（長老派）の影響を非常に強く受けた人たちでもあります。話をまた戻しますと、李光洙はその後、ふたたび日本へ渡り、今度は早稲田大学で哲学を勉強する。この過程で、さきに述べたような独立運動へ走るということが、生じているわけです。

　ですから李光洙の場合、日本への留学過程で、日本の近代化を目撃する。ここでいう近代化という言葉には「　」を付けなければならないと思いますが……。とにかく、朝鮮の近代化という目標が、日本留学を通して、意識の内に強く焼きつけられたのではないか。そして、その具体的な表われが、政治的な面では独立運動への参画という民族的行動をとらせたのだ、と私は思っています。ところが、

李光洙はその時点で挫折してしまうのです。上海に密航して大韓臨時政府に参加するけれども、ほどなく李光洙は、そこを離れていきます。この間のいきさつには、個人的事情もいろいろあったようですが、けっきょくは挫折するわけです。当時、上海に集まった独立運動家たちというのは、熱狂的な民族主義思想を抱いていたことに間違いありません。しかしながら、それは思想というよりも、むしろ民族的感情という面がかなり強かったようですね。したがって、派閥争いが絶えず、なかなかまとまった運動としての形をとりえなかった。さらにいえば、共産主義者と民族主義者の対立もそれを阻んだようです。李光洙は失望して帰国し、日本官憲に逮捕される。その後は思想的に転々とし、転向を重ねていくうちに、ついには日本の御用文学者にまでなりさがってしまいます。こうした李光洙の個人史というものは、やはり民族主義が、植民地のわく内ではどうにもならない、その出口を見つけだすことができなかったという、一つの証左となっているように、私には思えます。

李光洙の創作活動が始まるのは、一九一〇年代からですが、林和の場合にはこれに一サイクル遅れて、一九二〇年代も後半に登場してくるわけです。最近、金允植（キムユンシク）著『傷痕と克服』という本が朝日新聞社から出版されましたが、この本の中で、林和についてはいろいろと言及されております。お読みになれば即座にわかることですが、一九二〇年代といいますと、朝鮮の地にようやくマルキシズムがはいってくる時代なんです。これは日本においてもそうですが、当時の学生や若い知識人に及ぼしたマルキシズムの影響力というものは、新生ソビエト・ロシヤの存在とあいまって、大変に大きかったわけです。ですから、それ以前の独立運動にみられた民族意識とは、少しおもむきを異にした思想状

況が生じてくるのですね。つまり、一言でいってしまえば、李光洙のあとを継ぐ形で、林和が出てくると……。そうして林和には、李光洙が持ちえなかった抵抗の理論があり、それがマルキシズムと表裏をなすものであったということになります。

林和は、そうした転形期にソウルで中学校を終え、文学活動にはいっていきます。ただ初期の林和は、ダダイストと呼んだほうがあたっているようです。非常にデカダンスな傾向に走っております。もっとも、頽廃的傾向というのは、なにも林和だけに限られるわけではありません。二〇年代の朝鮮の詩人、小説家たちのかなりの部分が、デカダンスの影響を受け、アナーキーな傾きを呈していたといえるようです。たとえば、金芝河(キムジハ)が抵抗詩人として挙げている李相和(イーサンファ)なども、はっきりとデカダンスの時期をもっています。このことは、一九二〇年代の日本について言及すれば、すぐに判明することでもあります。大正末期には、まだアナ・ボル論争が盛んに行なわれている。同時に、ダダイズム、表現主義、構成主義といった第一次世界大戦後、ヨーロッパに起こった新しい芸術運動が、目まぐるしいくらいに流れこんできた時期なのですね。それが、大正デモクラシーの時代といわれている、この頃の一側面でもありました。そして、朝鮮の詩人や作家たちは、もちろんその影響を大いに受けるわけです。けれども、影響を受けながらも朝鮮の文学者の場合、やはり民族的な思念が底流にあって、そこからはどうしても離れられなかった。植民地統治がその思念を持続させました。林和にしても、李相和にしても、初期の詩というのは、大変アナーキーな傾向の勝った作品なんです。李相和の代表的な詩で、現在でも抵抗詩といわれているもの、「奪われた野にも春はくるか」なども、たんねんに

作品の基調をたどっていくと、アナーキーな側面がぬぐいきれないまま残っている感じがします。要するに、朝鮮の文学者にとっては、アナーキーであること、デカダンスであることもまた、民族的立場に立ちうると。抗日的姿勢に共通するものとして、理解できるということですね。

ところで、朝鮮にプロレタリア文学団体が正式に発足するのは、一九二四年の八月です。普通これは、カップ（ＫＡＰＦ・朝鮮プロレタリア芸術同盟）と呼ばれています。この初期の段階では、林和はまだ中心勢力になっていませんが、詩作と評論活動によって、しだいに頭角を表わします。一九三二年にはカップ書記長となり、朝鮮プロレタリア文学運動の理論的指導者として活躍するわけです。カップはやがて、日本官憲のあい次ぐ弾圧にあって、三五年に解散をよぎなくされております。松本清張の『北の詩人』では、書記長であった林和が、日本の特高のところへ出向いて、自分の転向声明書と引き換えに検挙、投獄をまぬがれ、カップを解散することになっている。そして、この転向声明書が尾を引いて、朝鮮が解放されて後、米軍情報部のスパイになったという具合に描かれています。私にはこれは、フィクションのように思われてなりません。なるほどカップ解散後の林和は、宿痾の肺結核ということもあり、屈服を強いられ日本の御用雑誌に執筆するなどして、四五年の日本敗戦を迎えております。そして最後には、ご存知のように、一九五三年に朝鮮戦争が休戦となった直後、共和国において、アメリカ帝国主義のスパイと断罪されて死刑にされるわけですけれども……。

とにかく、一九三五年の時点で、朝鮮のプロレタリア文学活動は、一応終息させられてしまう。林和はこの運動に根を置きながら、民族主義にプロレタリア階級という視点を重ねて、李光洙とは別の

方向から、やはり朝鮮の近代化を進めようと努力した、と私は考えています。その作品で詩集『玄海灘』などを読んでみるとよくわかるのですが、林和の意識の中には、かなり前衛的な近代化への道程がプランニングされていたように思います。しかし、一九三〇年代の朝鮮では、林和の努力は実現するはずもなく、敗れ去るよりほかはなかったと……。

金史良が日本人に広く知られるようになるのは、一九三九年に『文芸首都』十月号に「光の中に」を発表し、これが翌年、芥川賞候補作に推されたことによります。その後、四一年十二月九日、太平洋戦争開始にともなう予防検束で、鎌倉警察署に二月あまり拘禁されるまでの期間が、金史良の日本文壇で活躍した時期にあたるわけです。もっとも、彼の創作活動は佐賀高校時代からでして、一九三三年にひそかに「土城廊」という習作をものにしています。この作品はのちに手を入れて、同人誌『堤防』に発表されますが……。

いずれにしても、金史良の先輩たちはさまざまな形で抵抗を試み、その結果は転向、あるいは挫折していきました。林和たちが行なったプロレタリア文学運動は壊滅し、李光洙の場合は転向にまでいたる。そういう一種の閉塞状況と踵を接する形で、金史良の文学的出発があったということです。それも日本語を目的意識的に、あえて使うことによって、始められているわけです。この目的意識的という表現は、実は金史良自身が語っていることです。これは弁解になりますが、私が書いた金史良に関する論は、日本にある資料をもとにしてまとめたものです。朝鮮に帰ってからの部分に対しては、いまだに不充分にしかおさえきれていません。そのおさえきれずにいる状態でも、少しだけわかって

いることがある。一九四五年、日本敗戦と朝鮮での一応の解放を迎えた時点で、金史良は自己批判をやっているんですね。彼はそこで、自分は目的意識的に日本語を使った。すなわち、強要される日本語の使用を、いわば逆手にとって、朝鮮人の世界を日本人に知らしめたかった。そこに朝鮮人文学者の一つの生き方をみつけ、民族的なもののバネと化したかった。いってみれば、開き直りみたいなことですが、そんな具合に語っているわけです。したがって、「光の中に」「無窮一家」「光冥」「虫」といった、在日朝鮮人社会の悲惨な現実を描いた作品群には、金史良の意図がはっきりとこめられていました。換言すれば、日本語の使用を決心した時点で、当時は移住朝鮮人と呼ばれていた在日朝鮮人の世界というテーマは、ごく自然な形で、金史良の目前に浮上してきたはずだ、と私は思っています。さきほどからくりかえしている、金史良のある〝先駆性〟という問題は、こういう地下水の形で現在につながってくるのです。その点からいえば、時代の閉塞状況とも関連して、いささか皮肉な〝先駆者〟といえるかもしれません。

これまでは、在日朝鮮人の問題から、金史良の文学活動をみてみました。となると当然のことながら、「光の中に」とか「虫」とかいう作品が、大きな意味をもってくるということです。それでは、朝鮮全体という視点から考えるとどうなるのか。これは私の個人的見解ですが、「太白山脈」という作品に注目しているわけです。この未完の長篇小説は、いままであまり評価されてこなかったし、またた評価が難しいとされているものです。書かれた時期は一九四三年で、ソウルで発行されていた『国民文学』に、日本語で連載されたものです。内容をちょっと紹介してみましょう。

一八八四年に、朝鮮では金玉均（キムオクキュン）ら開化派によって、甲申政変と呼ばれるクーデタが行なわれます。これは清国の圧力で、わずかに三日天下で終わった政変ですが……。このクーデタに参加し、逃れて太白山中の火田民部落に潜み、再興を期している尹天一（ユンチョンイル）という武人が主人公なんです。天一の二人の息子、日童（イルドン）と月童（ウォルドン）は、火田民たちの悲惨な境遇を知り、彼らの安住の地を捜し求めて旅立ちます。二人の息子からの朗報を待ちわびている間に、天一は密告によって捕吏に追われ、格闘中負傷して崖下へ転落する。そして、ようやく帰還した二人の息子に見守られながら、尹天一は息を引きとります。安住の地、理想郷を見つけだしたものの、つかのまの生命だったわけです。ただしこの理想郷は、開拓して創りださなければ、手に入れることができないものでもありました。この理想郷を建設することで朝鮮の夜明けを確信し、新たな決意に燃える日童と月童のもとへ、亡命中の金玉均が逮捕されてソウルへ護送されてくる、という風聞が伝わってきます。また二人の胸中には、旅の途上で出合った老僧の示唆が、いまだ深い謎として残されておりました。東学党に着眼せよと……。すでにおわかりのように「太白山脈」は、第一部で終わっている未完の作品なんです。金史良自身は文中にこう記しています。〝作者は第二部において東学乱を中心に徐々に見究めて行きたいと考える〟と。ただし、続編は書かれませんでした。

私が「太白山脈」に注目するゆえんは、金史良がこの作品で、金玉均らの開化派と東学党との結合を、訴えている点に惹かれるからです。さきほど、韓国における民主化運動のことで、咸錫憲の名を挙げましたが、同じようにこの運動に加わっている白基琓（ペクキワン）は「抗日民族論」という本を書いている。

それから、張俊河たちが抗日民族学校で出した「抗日民族詩集」というものもあります。そこでいわれているのは、金玉均の行動は、いわゆるブルジョワ開化路線であり、日本を頼った親日的開化路線にすぎないと……。相当に手厳しい批判が行なわれております。しかし、その指摘自体はもっともだとしても、金玉均の近代化路線がはらんでいた全部が思想的に否定されるとは、私には思えないのです。いわゆる学界では、韓国でも共和国でも、金玉均の近代化路線を、最近わりあい高く評価しているようです。ともあれ、開化派の近代化路線と、民衆路線に違いない東学党とを結合する方向で、朝鮮のナショナリズムを主張しようとした、金史良のこの「太白山脈」における思想は、朝鮮史全体からみても、ユニークな発想ではなかったのかと。ひょっとすると、今日でも生かすことのできる発想ではないかと、そんな具合に私は思うんです。ただし作品としての「太白山脈」はかならずしも成功作とはいえません。失敗作といったほうがあたっているかもしれない。けれども、金史良がそこでかいま見せた歴史意識、追求は不充分であったにしても、朝鮮近代の源にまで遡って可能性を模索した姿勢。それは、四三年という困難な時代に、金史良が試みたぎりぎりの文学的抵抗だったように考えるのです。そして、金史良がかいま見たらしい、金玉均と東学党とが結んだ朝鮮近代化の可能性。その可能性をすくいあげることによって、私は「太白山脈」という未完作を、高く評価したいわけです。

話がだいぶ先走りすぎたようですから、また前へ戻ります。太平洋戦争勃発直後に、金史良が予防検束を受けたことについては、こんな裏話があります。彼を留置場から出すことにあずかったのは、どうやら久米正雄だったらしいと。いまとなっては確認をとることができませんが、いろいろな事情

を考えあわせていくと、そういうことになる。それに、久米には昭和十年に書かれた「内鮮二題」という作品がありますから、まんざら朝鮮と因縁がなかったわけではない。久米を動かしたのは島木健作でした。当時の島木は転向作家ということでしたから、要注意人物であり、金史良の釈放には直接タッチができない。そこで、軍部に受けのよかった久米正雄に頼んだ、というようないきさつがたどれるわけです。釈放後、金史良は文字どおりあたふたと郷里の平壌へ帰っていきます。この時点で金史良は、日本文壇ではもう筆がとれないと、状況判断をしたように私は思います。執筆禁止といった外側からの圧力も、あるいはあったのかもしれません。

朝鮮に帰ってほどなく、金史良は「ムルオリ島」という短篇小説を書き、『国民文学』に載せています。失われた少年時代への追憶が綴られ、ほのぼのとした感じを与える作品です。翌年には『国民文学』に「太白山脈」の連載が始まる。『国民文学』という雑誌は、いうまでもなく朝鮮総督府の御用ジャーナリズムです。しかし、そうした場を通さなければ、作品はほとんど発表できない。状況が切迫していた点では、朝鮮も同様だったはずですから。同じ四三年の夏、金史良は海軍見学団に加わり、日本にある海軍基地をめぐっています。朝鮮に施行された海軍特別志願兵制度を喧伝するよう、狩り出されたわけですね。そういう中にあっても、なんとしても書きたかったテーマがあった。そこで金史良は「太白山脈」を書き続けたと……。私には、そんな感じがするのです。四三年暮れから翌年の十月にかけて、金史良は同じく歴史小説「海への歌」を、今度は『毎日申報』に朝鮮語で連載します。この「海への歌」と「太白山脈」とを比較してみると、金史良の内面世界が、ある程度うかが

えるように思えるのです。というのは、ありていにいって、「海への歌」はまったくの駄作といってよいほどに、ズサンなものになってしまっている。それほど、彼は追いつめられていたんですね。四四年の段階での金史良は、日本語で書いても、朝鮮語で書いても、もうどうにもならない。それが、四五年五月の延安めざしての脱出へとつながった。厳密にいえば、脱出とはいいえないかもしれませんが……。

ところで、朝鮮へ帰還して以降、いまいったような過程で書かれた、金史良の行動や諸作品について、別の解釈を下す文学者もいます。大阪に住む詩人の金時鐘（キムシジョン）は、「太白山脈」に対しても金史良の転向だとする、非常に厳しい評価をしています。私は転向ではなく、挫折の中で試みられた抵抗だという意見なわけです。なぜ私が転向とみないかといえば、朝鮮人の場合には転向にいたるまでに、クッションが二つあったと考えるからです。コミュニズムからの転向者を例にとれば、この関係はもっとはっきりするように思います。日本人にとって転向が問題になる場合、ごく単純化していえば、それは天皇制への転向、天皇主義者となることを意味しました。天皇制を軸に転向か非転向かが問われてきました。ところが、朝鮮人の場合はコミュニズムを放棄しても、もう一度民族主義の立場から抵抗しうる可能性をもっていた。林和の思想なり行動なりをたどることによって、そのことが裏付けられるのではないか、と私は思うのです。彼は一九三五年に、プロレタリア文学運動をともかく放棄する。以後は一般の転向作家なみの活動をしますが、屈服したようにみえながらも、民族的なもののわくは越えていない。その一線を、懸命になって維持しようとしたものと判断されるのです。

金史良の場合は、もともとコミュニストではなかった。そういえば、金史良と共産主義の問題に関しては、いろいろと論議の多いところですね。その点について、少し説明しておきます。実は『沖縄島』を書いた作家の霜多正次から、直接うかがった話があるのです。一九三六年頃、東大生だった金史良は、霜多正次や梅崎春生と一緒に、本郷森下町の下宿に住んでいました。この時分、朝鮮人学生に対しては、毎月一回、ことによると週に一回ぐらいずつ、特高警察が臨検と称して持ち物や書物を調べてまわりました。ある日、金史良が風呂へいくといって外に出たけれども、あたふたと戻ってきた。臨検にきた特高の姿をみかけたんですね。そして、隣室の霜多正次に、この本をそちらに移してくれといったという。襖越しに持ちこまれた本はというと、マル・エン全集だったんだそうです。こういう話もあって、金史良はすでに共産主義者だったという説が一方にあります。作家の李恢成(イーホエソン)や金(キム)石範(ソクポム)などは、金史良をはっきり共産主義者だと断定しているようです。ただしこれは、解放後にそうなったと……。私はまだそこまで断定ができないので、金史良をコミュニストとしては扱っていません。しかし次のような事実はあります。

これについてはいずれ書くつもりですが、解放地区へ脱出してからの金史良はスパイの疑いをかけられて、どうやら軟禁状態にあったらしい。彼の同郷人で東京帝大の後輩の記録にそれが書かれている。解放後も小地主出身ということで、かなり風当たりが強かったらしい。これも目撃者の記録があります。だが、『駑馬万里』をふくめ私の知る限り、彼はそういった事実を書きとめていません。新しい社会体制への期待がそうしたことへのこだわりを忘れさせたものと想像されます。したがって解

放後に共和国へ帰って、彼が朝鮮労働党に加入したということは考えられますが、これも確認ができませんので、それ以上のことはなにもいえません。

とにかく、金史良がコミュニズムに非常に近いところにいたのは、たしかだと思います。でも、そのことはなにも特別の事柄ではない。当時の日本の学生や知識人にとって、マルキシズムはある意味からいえば、一種の教養といってよい面もありました。それほどに一般化された影響力をもっていたわけですから。まして、植民地朝鮮の知識人の場合、民族主義という基底に立つ限り、一方で左翼に大変近いところにいたのは当然のことです。したがって、金史良がマルキシズムの書籍を読んだことは、充分に考えられるし、むしろ読まなかったほうがおかしいくらいです。しかし、だからといって、そのことをもって、さっそく彼が共産主義者であったと断定することも、そう簡単にはできないだろうということですね。

金史良が作家活動を行なった、一九三九年から四五年、あるいは朝鮮戦争の最中に死んだ五〇年まで……。状況が異なりますから、四五年以後のことはひとまずおくとして、あの時代というのは、朝鮮の知識人にとって、きわめて生きのびることの難しい時代だった、と私は思います。これが庶民の場合ですと、徴兵とか徴用とかいう、物理的な形での危害が加えられたわけですが、知識人の場合には、物理的以外の危害がさまざまにあったからです。極端にいえば、獄にはいるか、屈服するかという、いわば背中合わせの日常生活だったからです。四二年に朝鮮に帰ってからの金史良には、投獄された事実はありません。金史良はなんとか生きのびようともがいた。しかも、作家であることを放棄

しないで生き続けようとした。沈黙することも、彼は考えたと思います。私は、これは資料がなくて沈黙したと判断しましたが、戦争文学の研究をなさっている高崎隆治から、ごく最近になって教えられたところでは、かならずしもそうではなかったようです。短い小説が一篇発見されている。それも変節の証とみなされてもやむをえない作品が。しかし私は、基本的には沈黙状態と変わらなかったと判断しています。自分から進んで作品を書いたのかどうか、疑わしいからです。侵略戦争への協力をよぎなくされるプロセスをつぶさに書きとめたうえで、自らを「民族の罪人」と断罪する小説を書いた蔡万植（チェーマンシク）の例に照らしてもそういえると思います。四四年には短期間、金史良は平壌の大同工業専門学校で教鞭をとったこともあります。だがそれも、一時の方便にすぎなかったようです。けっきょくは追い詰められた末に、金史良の目はおのずと中国大陸へ向けられていった、ということになります。

ただ、中国への脱出が可能であったというのは、やはりめぐまれた状況にあった、といえるようです。なぜなら、多くの知識人たちは、自分の意志とはかかわりなく、朝鮮の地に釘づけにされていて、脱出の可能性などはほとんどなかったわけですから。金史良との比較という意味でいえば、蔡万植の例もありますが、李泰俊（イーテジュン）という作家の抵抗の姿勢があります。彼が書いた「解放前後」という小説を読むと、どのような圧迫がその周辺に生じていたかがよくわかります。李泰俊は時局に協力したくなかった。そこで、故郷の鉄原（チョルウオン）に引きこもって沈黙しようとするのです。ところが、当局からの呼び出しがしょっちゅうある。警察の監視の目は休みなく続くのですね。つまり、日本のかつての軍国主義者は、朝鮮人の作家たちに書くなとはいわなかった。自由に書くことさえ弾圧しているのは、現在

の朴政権かもしれません。植民地統治下の朝鮮では、沈黙する自由さえなかったのです。作家たちは、こういうものをお書きなさいという形で強要される。そのほうが苦痛は大きかったと思います。別の例をあげれば、火野葦平の『麦と兵隊』といった作品が、朝鮮の作家たちによって、かなり翻訳されているんです。そのうえ、翻訳させられた『麦と兵隊』は、朝鮮においても「　」つきのベスト・セラーになっているわけです。このように、書くことへの圧力は、金史良にとっても、もとより例外ではなかった。前に駄作だといった「海への歌」は、行き詰り状態にあった金史良の姿を、そのままさらけ出した作品だったといえます。

金史良は抵抗の姿勢を、最終的には中国への脱出という行動で完結させますが、彼の他にもさまざまなレジスタンスが、むろんあったわけです。私は岩波新書で少し触れました尹東柱（ユンドンジュ）とか兪鎮五（ユジンオ）などのケースも、その一つだといえます。尹東柱については、太平洋戦争下の日本で独立運動を行なったというふうにいわれていますが、これには少しく誇張があるように思われてなりません。彼は立教大学に学ぶ途中から、京都の同志社大学に移りました。一年後には下鴨警察に検挙されます。そして、四五年の二月、福岡刑務所で病死するわけです。いったい、尹東柱の抵抗の内容はどんなものだったのかを、かなり長期間にわたって調べてまいりましたが、要するに徴兵拒否だったようですね。四二年になると戦局の逼迫ということから、日本の軍部は、まず学徒出陣という形で朝鮮人の徴兵にも踏みきりました。尹東柱はこれを拒絶したようです。だから、尹東柱が独立運動を行なったというのは、彼の抵抗の姿勢を通して、結果からそういいうるのであって、実態はといえば、決して勇ましいもの

ではない。むしろ、非常に目立ちにくい抵抗だったように判断されます。けれども、それがすこぶる勇気を要する行為だったのもたしかです。もう一人の兪鎮五ですが、私には忘れることのできない抵抗詩人です。彼は南朝鮮労働党に関係があり、李承晩(イースンマン)に銃殺されたためか、韓国の民主化運動をやっている人たちの間でも、いまのところは、まったく問題にされていないようにみえます。彼は日本留学中には、アテネ・フランセでフランス語を学んでいます。彼もまた尹東柱と同じように、徴兵を拒否するのですが、それは逃走してしまうんですね。朝鮮南部の山々を放浪して歩く。兪鎮五の家族が書いたものによれば、八月十五日の時点で、ほとんど餓死寸前に救い出されたのだという。兪鎮五の場合は、書いたものも少ないし、詩人としての仕事も、解放後に李承晩政権との闘いの中で残したものが、ようやく、抵抗詩人としての面目をうかがわせるにすぎません。

知識人の抵抗というものは、その実態をおさえていくと、なにが抵抗だったのかを決めるのは、なかなか難しい。爆弾を投げつけて死んでいったテロリストたちに較べれば、文学者の行動などは、はかなくて微々たるものかもしれない。しかし、作家的良心を持ち続けて生きることも、やはり大事な抵抗ではなかったかと……。今年(一九七五年)亡くなった詩人の金子光晴は、以前お会いしたことがありますが、こんなことを語っていますね。おれは息子を兵隊にとられたくなかった。だから、醬油を飲ませたりフケを食わせたりして、意識的に病気にしちまおうとしたんだよ。金子光晴のような、そういう生き方もあり、これも抵抗であった、と私は思うんです。文学者のスピリットとして、どういう姿勢を貫き通したかということですね。知識人の場合には、それぞれが担わされた状況での、抵

抗のビヘービアということがあるわけです。金史良に関していえば、その中でも、たまたま陽の当たる場所を与えられたというか、わりあいはなやかな行動を示しえたと。……けれども、実際をいえば、そうともいえないのです。大陸への脱出について、彼は『駑馬万里』というルポルタージュを書いていますが、その中で、はっきり現実逃避だったと記しています。朝鮮の地を離れずに、みんなが生きている困難な状況の中に踏みとどまって、ともに闘うべきであったと……。金史良の目的地は延安でしたが、その途中から、当時太行山脈中にあった朝鮮人義勇軍の根拠地にたどりつく。それから、一カ月もすると日本敗戦の報が届き、先遣隊として朝鮮へ帰ってくるわけです。脱出の実態がどうであれ、当時の朝鮮の知識人にとって、金史良のようなケースはきわめて稀でした。植民地であった朝鮮半島に閉じこめられている以上、それに真っ向うからあらがおうとしない限りは、金史良が追いつめられていったと同様のことが起こりえます。つまり、なんらかの形で、たといそれが擬態のつもりにせよ、時局への協力の姿勢をとらざるをえなかった側面は否定できないように思われるのです。

朝鮮の知識人の抵抗、あるいは挫折の問題については、実はいまもって明白になっていないことが少なくありません。尹東柱や兪鎮五のように、残した作品も少なく、その実態を見きわめにくいという事情もあります。この点からいえば、幸いにして金史良はたくさんの作品を残している。彼は書くことを通して、朝鮮の知識人の抵抗と挫折、もしくは転向の実相を明示しえた。その意味では、おそらくもっとも代表的な作家といえるかもしれません。ところで、抵抗と挫折の問題が明白とならない理由には、もう一つ逆の原因があるようです。簡単にいえば、植民地統治下における抵抗、あるいは

闘争については語るけれども、挫折や屈服については口ごもると……。そのために、いわゆる〝暗い過去〟ないしは〝うしろめたい事実〟が、隠されたままになりやすいということです。例をあげますと、たとえば「金日成将軍のうた」というのをつくった李燦という詩人がいます。解放後に彼はソ連にも行っていますし、よい作品も書いている。ところが解放直前には、太平洋の戦場に向かう友人へのはなむけの言葉ということで、一人一人の朝鮮人が一発の砲弾、飛行機、軍艦となり、鬼畜米英を倒さねばならぬといった、はなはだ勇ましい詩を書いているんですね。別の例では、プロレタリア作家で現在でも、共和国の代表的な長老作家である李箕永のことがあります。「故郷」「豆満江」など、彼の作品は日本でも多数翻訳されています。その李箕永も、当時朝鮮でも盛んに行なわれた国防献金に協力しているのです。踊り子で有名だった崔承喜の場合には、もっと無惨で、時局への全面的協力とさえ判断されかねない過去を残しています。こうした挫折や屈服の事実は、金史良にしても、林和にしても同様です。というよりも、一つ一つの例をあげていけば枚挙にいとまがないくらい、そうした例は多かったわけです。

もちろん、基本的なことをいえば、協力せざるをえなかった人たちも、屈服せしめられた文学者たちも、すべてがすべて内面まで腐りきっていたとは、私は思いません。なかには、腐れはててしまった文学者もいたでしょうが……。でも、やはり挫折は挫折であり、屈服は屈服なんですね。堅持すべき立場を守り抜けなかった弱さは、朝鮮人自身が、自己の問題として受けとめなければならなかった。だが、そういう具合にはならなかったのです。日帝統治下の強圧、日本軍国主義の悪辣さということ

のほうへ、いっさいを押しつけてしまう傾向が強かった。全面的に自分を被害者に仕立てたんですね。したがって、一九三〇年代、四〇年代における朝鮮の知識人の生きざまは、検証もされずに清算されてしまい、ほとんどなんらの結着もつけられなかったのです。戦後の朝鮮文学には、そうした内面的な弱さを、南北を問わずもっていたように私は思います。要するに、四五年に〝解放〟ということで、次いで反共か容共かという尺度ですべてが推し測られ、やみくもに押し流されてしまったわけです。

この問題との関連でいえば、四八年秋に、反民族行為調査特別委員会が生まれ、日本の軍国主義者に協力した人たちを処罰する法律がつくられました。李光洙は、この時に召喚を受けています。また、歴史学者の松尾尊兊が吉野作造の朝鮮問題に触れて、しばしば取り上げている金雨英も、民族反逆者として逮捕されています。日本人の側からみれば、金雨英は彼なりに、朝鮮民族の立場を擁護した人物ということになるのでしょう。金雨英の経歴をみると、吉野作造の口ききで、満鉄関係の機関に就職し、さらにその後は朝鮮総督府の外務官僚になっています。金雨英の内面がどうであれ、外面に表われた行動を追う限り、民族反逆者とみなされてもやむをえない過去があったわけです。こうした金雨英のような知識人のケースも、事実に基いて、検証しなければならない問題だと思います。ところで、四八年という段階では、朝鮮はすでに南北間の激しい角逐状態が生じていました。他にも理由はありますが、ともあれこうした理由から、特別委員会はたいした仕事もできないまま、うやむやのうちに、一年ほどで法律そのものが廃止されてしまったのです。

一九四五年の解放の時点で結着がつけられなかった問題は、引き続いて現在にまで持ち越されてい

る。そう私は思っています。アメリカの占領、あるいはソ連の占領を経て、南には李承晩政権がつくられ、北には人民政権が生まれました。これに、国際的冷戦構造が相乗作用して、南北間の対立がすべてに優先してしまったんですね。その結果が朝鮮戦争だったわけです。韓国に限っていえば、いわゆる容共的な知識人、詩人や作家たちのほとんどは、北へ移っていた。その後、日本帝国主義下で行なわれた諸々の過去は免罪となり、代わって強調されたのが反共思想だったといえます。加えて、李承晩による独裁政治が進行した。思想状況は日本の植民地時代に優るとも劣らない閉塞状態となる。この閉塞状態が、現在まがりなりにも続いていることは、説明するまでもないでしょう。くり返すことになりますが、今日の金芝河を含めた韓国の民主化運動の精神の中には、放置されたままになっている植民地統治下時代の過去に対して、なんらかの結着をつけたいという強い願いがある、と私がみるのはこうした流れからです。そういう重いマイナスの部分を背負った闘いなんですね。

今年（一九七五年）の三月まで、『東亜日報』の編集局長であった宋建鎬（ソンゴンホ）の評論集を読むと、彼はこんな具合に語っています。日本帝国主義時代のほうが、韓国の知識人はよきにつけあしきにつけ、民族主義のバック・ボーンを持ってしっかりしていた。だが、解放後の韓国の知識人については、ホワイト・カラーという代名詞しか浮かばないと……。これはまあ、大変皮肉な現象だと思います。かつては、絶えず日本からの圧力があった。知識人たちは、せっかく学んだ知識も能力も生かす道がなかった。それを皮肉った蔡万植の「レディメード人生」という作品は有名ですが、そうした歴然たる現実があったために、ナショナリストになりえた、ならざるをえなかった。けれども、解放後の韓国の

知識人には、外圧というわく組みが一応取り除かれた。知識があり能力があれば、そのうえカネがありコネさえあれば、それなりの地位につくことができる。だからもう、ナショナリズムは必要ではなくなった、忘れましたと……。宋建鎬の嘆きは、四・一九学生革命が終息し、朴正熙(パクチョンヒ)政権が基礎固めを始めた頃に吐かれているんです。

この宋建鎬のナショナリズム不在の指摘は、私がいままで話してきた朝鮮の知識人の生きざま、そのプラスとマイナスの両方をおさえていく上で、非常に大事な意味をもつように思います。金史良に視点を移せば、彼が日本語で書いたことは、たえず自己の民族意識をうずかせた、ということになる。抵抗という意識が念頭になければ、日本語は使えなかったろうと……。むろんのこと、金史良は朝鮮語で、植民地統治下においても、解放後においても、作品を書いています。その作品にはあまり高く評価できないものもありますが、とにかく、二つの民族の言葉で、文学活動を行なっている。この事実は大変重要なはずです。にもかかわらず、金史良は日本語をもって、おのれの文学的出発点となした。このことは、現在の在日朝鮮人作家の先駆者として、金史良を位置づける時、ある種の象徴的な意味が生じるように、私は思います。朝鮮人が日本語を使うこと自体が、すでにパラドックスなんですね。おそらく、金史良は二つの言語のどちらを選択するかということで、つねに内面で葛藤していたに違いない。金史良が葛藤の最中で夢みたものは、はたしてなんだったのだろうか。悪夢だったかもしれないし、そうではなかったかもしれない。いずれにしても、それは朝鮮と日本との関係を考える上では、いまだ未解決のテーマとして、私たちの前に残されていると考えます。

話のしめくくりとして、金史良の死のことに触れておきます。実は、解放以後の彼の動向については、いまもなおよくわからない点が多いのです。共和国には、金史良が書き残した作品が、まだ相当数あるはずですが、そのすべてにまだ目を通す機会を与えられてはおりません。解放後すぐに金史良は、ソウルを訪れています。そして、たまたまソウルにいた村山知義と会い、中国の解放地区で書いた戯曲を、徹夜で村山に読んで聞かせたといいます。村山知義のほうは、舞台装置やコスチュームを大急ぎでつくって、金史良に手渡したのだそうです。この戯曲はその後ソウルで舞台化されたようですが、翌年に金史良は郷里の平壌に帰り、平安南道芸術連盟の結成に加わって委員長になっています。はっきりしているのはその程度の消息といえるようです。五〇年の朝鮮戦争で、金史良は従軍作家となって南下します。ところが、米軍の仁川(インチョン)上陸という事態になり、人民軍が総撤退します。その時、金史良は持病の心臓病が重く、落伍してしまうのですね。要するに、置き去りにされたということです。その場所は、江原道原州(ウォンジュ)付近だといわれています。以後、金史良が生きている痕跡はなにもありません。だから、死んだということになるわけです。

もっとも、金史良の死については、別の話があることはあるんです。落伍した金史良を、追撃してきた韓国軍がみつけて逮捕した。こうして、金史良はソウルに連行され、刑場へ引ったてられた。銃口が突きつけられた瞬間、おれは作家の金史良だ、射つな! と叫んだ。けれども、非情なる銃弾は……。という出来すぎた話が、一部には伝わっているようです。この話は、ある大学教授に伝わったもので、彼はソウルでその話を聞いたんだそうです。ただし、活字で書かれたことはまったくないし、

目撃者があるわけでもありません。どうにも確認のしようがない話です。そんな噂話があるということだけを、最後にお伝えしておきます。

## 2

A　金史良を共産主義者とみるか、みないかということなんですが、転向か挫折かという問題とからめて、もう少し説明してほしいのですが……。

金史良を共産主義者だとする、そのもっとも公式的な見解というものを紹介すれば、わかりやすいかと思います。つまり、彼は学生時代からマル・エン全集をよんでいた。そのうえ延安をめざして大陸へ渡った。その後も朝鮮民主主義人民共和国へ帰った。ゆえに金史良は共産主義者であると。そういうことなんですね。初めに公式を立てておいて、あとはこれに当てはめて解釈していく。私にとっては、金史良が共産主義者であったか、なかったかということは、ある意味では、どうでもいい問題なんです。彼が一人の朝鮮の作家として、植民地支配の状況下で、どのように生きたのか、また生きようとしたのか。そこのプロセスをはっきりさせたいわけです。プロセスが明らかになれば、おのずから結論は出てくるはずです。それに、解放後に彼が共産主義者になったとしても、植民地下とは事情が異なりますから。さきほどもいいましたように、金史良については、未知の部分がいくつか残っている。だから、私としてはまだ結論をくだせない段階である、ということですね。

転向か挫折かに関していえば、「光の中に」をお読みになられてもおわかりのように、金史良はきわめて民族的な作家として出発している。ところが、その軌跡をたんねんにたどっていくと、抵抗性が非常にうすれた時期がある。四二年以降がそうなわけです。この時代の作品や行動から、金史良は転向したと断定するか、あるいは偽装転向とするかに、見方がわかれるわけです。しかし、日本帝国主義時代における朝鮮の知識人の生き方というのは、なかなか機械的には割り切れないように思うのです。李光洙のケースならば、彼は香山光郎という日本名に改名し、禊(みそぎ)などまでやっている。いわば、きわめて徹底した天皇主義者みたいになってしまう。金史良の場合はこれとは違っていました。朝鮮人社会の現実が描けなくなってくると、今度は「太白山脈」にみられるように、歴史小説を書き、民族主義の源に立ち戻って抵抗をこころみようとしている。だが、さらに状況は切迫し、戦争協力を強いられ、もうどうにもならなくなる。そこで金史良は、在支朝鮮出身学徒兵慰問団に参加する形で、北京から大陸へと脱出した。だから関係を逆にして、極端なことをいえば、もし大陸へ逃げていなければ、金史良は転向したということになるかもしれない。状況としては、極限にまで追い詰められていたと思います。彼は最終的な形での屈服をしないために、必死のおもいで大陸への逃走を考えたということですね。したがって、私は金史良が転向したとはみないわけです。この場合、前に説明したように、転向と天皇制の問題とが、やはりキー・ポイントになります。植民地統治に対する直接的な批判は放棄しても、朝鮮民族としての立場まで棄てるわけにはいかない、ということですね。

私としては、金史良を検証することで、植民地統治下時代に、レジスタンスの姿勢をもった作家の

生き方とは、どんなものだったろうか。そこのところを、大摑みに理解できれば、いまはそれでいいと思っているんです。こうした面倒な問題については、朝鮮人の書いたものがあまりないようなので、『金史良』を書いたわけですから。でもその点では日本の場合もそうですね。日本の知識人の戦争責任、戦後責任といった問題を、とことんまで掘り下げて書いたものは、大変少ないのではないですか。お互いに痛いところは触れたくないというのが、どうやら本音ということでしょうね。

B　岩波新書の『金史良』の中で、金史良が日本人の友人に向かって、大風呂敷を拡げる場面がありました。家の財産かなにかを、どんどんオーバーにしゃべっていくといった……。私の狭い朝鮮人とのつき合いの中で、実はそれと同じような感じをもつことがよくあるのです。率直にいわせていただければ、親の財産とか地位、あるいは社会的な地位、そういう事大主義的なものにもたれかかる傾向が、韓国人の場合には強いのではないか。それで、金史良を考える時、民族主義者として立つ基盤の問題で、少なからぬ疑問をもつのですが、そういうことについては、いかがでしょうか。

朝鮮の知識人には、プチブル出身が少なくないようですね。ことに、東京へ留学して苦学せずにすんだとなれば、なおさらそうでしょう。金史良が生まれた平壌は、北部朝鮮では穀倉地帯にあたります。そこには、経済力を持った地主も多くいました。金史良は、そうした地主の次男坊です。だから、大風呂敷を拡げたことは、一面うそではないわけです。一般的にも戦前の植民地下で、朝鮮人が子供

を中学へ通わせるというのは、それはもう大変なことでした。貧しい人たちは、田や畑を売らなければ、学校へはやれなかった。しかし、知識をもたなかったから朝鮮は国を失ってしまったんだし、知識があれば、ひょっとして役人になれるかもしれないと。出世ということもやはり前提にあって、親たちは無理をしても、子供を上級学校へ通わせたんです。そういう意味では、封建時代の意識が尾を引いていたといえるでしょう、科挙に合格して出世するという……。ところで、金史良の場合は大学を出て、しかも小説家になってしまったわけでしょう。作家なんていうのは余計者ですよ、朝鮮の社会でも。まったくの非生産的存在ですからね。そういう生活を貫けたというのは、一つには彼の家がブルジョワだったからでしょう。それに、金史良の兄は、京都帝大を卒業し、日本帝国主義末期の朝鮮総督府の官僚で、黄海道庁(県庁)の局長の地位にまで昇っています。妹さんも高等教育を受けました。それから、金史良の甥にあたる人が、いまカナダの大学で教授になっています。そういった事実を考え合わせますと、経済的にはめぐまれすぎる条件にあったといえます。だからこそ金史良は、風呂敷も拡げたし、作家生活なんぞという好き勝手なことがやれたのだと思います。皮肉な見方をすれば、そういう地位なり財産がバックにあったために、彼は、民族主義からもう一つ向こう側に出られなかったのかもしれません。もし条件が悪ければ、もっと左翼的になりえたのではないかと……。

朝鮮人が引きずっている事大主義については、残念ですが否定しません。そして、端的にいえば、それは後進性の表われでしょう。なにせ解放後三十数年間、朝鮮半島は政治とイデオロギーにふりまわされ、基本的には統一した状況のもとでの国家建設に取り組めなかったわけですから。そのことは

同時に、朝鮮人が戦前の痛みをどう受けとめたか。その結着をキチンとやれなかったことと、重なりあっているように思います。朝鮮人が精神の内面で引きずっている植民地主義の残りかすが、形を変えて、いまいわれたような場合に顔をのぞかせる、ということでしょうね。

D　八月十五日の解放後、金史良はソウルを訪れて演劇活動をやったといわれましたが、他に政治的な活動はなかったんですか。それから金日成との関係は、どういうふうになっていたんですか。

金史良が延安をめざして脱出した時、北京で手引きをしてくれたのは、建国同盟の人間だったようです。そして、華北朝鮮独立同盟との連絡がとれ、金史良は太白山脈中にあった、独立同盟の義勇軍基地にたどりついているわけです。建国同盟というのは、一九四三年頃、呂運亨（ヨーウンヒョン）が朝鮮国内につくった非合法組織です。華北朝鮮独立同盟の義勇軍は、金日成が指導したゲリラ部隊とは、当時は直接の関係はなかったようです。別個の場所で、それぞれ闘っていたということでしょうね。金史良がソウルへやってきた目的、これは裏話ですが、当時、独立同盟の中には深刻な派閥抗争が生じていたらしい。朝鮮戦争の際に粛清された金武亭（キムムジョン）という将軍がいますが、この金武亭派と別の派とが争っていた。そのため、派閥争いに敗れた派の幹部が、迫害されるという事情があったそうです。その救出を依頼するため、呂運亨への特使として、先遣隊の一員に加えられてソウルへ金史良は派遣されたという具合にいわれております。

（一九七五年十二月五日）

≪注≫

**李相和**（一九〇一〜四三）慶尚北道大邱生まれ。ソウル中央学校卒業。三・一運動に参加。一九二二年日本へ留学、アテネ・フランセに学ぶ。この頃から詩作を発表する。二五年カップに加入。カップ解散後は一時中国へ渡り帰国後検挙さる。後年は主に教育活動に従事した。

**金玉均**（一八五一〜九四）忠清南道公州に上層両班の子として出生。若くして李朝の高官につく。清国の藩属を脱し、朝鮮の独立を望んで開化党（独立党）を結成。一八八〇年来日、福沢諭吉らを知りともに朝鮮の改革をはかる。八四年クーデターを起こすが失敗して日本へ亡命。翌年大井憲太郎らの大阪事件に連座し小笠原島へ流さる。九一年東京に戻り親隣義塾をおこして朝鮮人子弟の教育にあたる。しだいに日本の朝鮮政策に絶望をきたし、九四年清国李鴻章の招きに応じて上海に渡るもあざむかれて暗殺された。

**甲申政変**　一八八四年十二月四日ソウルでの郵政局開業披露宴の際、日本の援助を受けた金玉均ら開化派がくわだてたクーデター。開化派の政権奪取は清国と結んだ保守派（事大党）の反撃で三日間で覆った。

**火田民**　焼畑農業を営んで山地を放浪生活する農民。李朝末期には困窮した多くの民衆が逃れて火田民と化したという。

**東学党の乱**　一八八三年から九四年にかけ南朝鮮に起こった農民反乱。一八六〇年崔済愚によって創始された東学の教義（儒仏道を合したという）が反乱農民を支えた思想であり、一種の宗教革命でもあった。九四年全琫準指揮のもと全羅道に起こった反乱に端を発し、李朝支配の根底をゆさぶった。この時の反乱を甲午農民戦争ともいうが、日清戦争を誘発させた。

**白基琓**　前『大韓日報』論説委員。民主守護青年協議会会長。白凡（金九）思想研究所代表。七四年大統領緊急措置第一号違反の罪に問われ、張俊河らとともに検挙された。

**蔡万植**（一九〇二〜五〇）全羅北道沃溝生まれ。ソウル中央高等普通学校を経て早稲田大学予科（英文）中退。綜合誌『開闢』社記者生活を除いては創作に従事。初期にはプロレタリア文学の同伴者的傾向の「レディメード人生」などを書いたが、のちに諷刺文学に移った。前記のほかに「濁流」「太平天下」が名高い。戦争協力を強いられる過程を記し、自らを裁いた「民族の罪人」（一九四六）を残している唯一の作家でもある。

**李泰俊**　一九〇四年江原道鉄原生まれ。早稲田大学に一時学んだことがある。『中央日報』学芸部長、『文章』編集発行人となる。自然主義風の小説を多く書いた。四一年第二回朝鮮芸術賞受賞。解放後は共和国へ移り朝鮮作家同盟副委員長を務めたが、五三年林和らの粛清事件に連座し以後の消息は不明。

**尹東柱**（一九一七〜四五）北間島明東に生まれる。詩人。四二年渡日し立教大学へ入学。のちに同志社大学に転学。四三年七月十日逮捕さる。四五年二月福岡刑務所で獄死。遺稿

集に「空と風と星と詩」がある。

**兪鎮五**　一九四三年東京お茶の水のアテネ・フランセに在学。同年十一月朝鮮に学徒兵制が施行されるや郷里に帰り、ほどなく朝鮮半島南端の山岳地帯に身をひそめ徴兵を拒否。解放後は南朝鮮労働党に参加。一九四六年九月一日の国際青年デーに自作の詩「誰がために高鳴るわれらの若さぞ」を朗読したかどで逮捕され、一年間の懲役処分を受けた。その後も南労党の政治路線に従って活動。一九四九年十二月金台俊ら五名とともに李承晩政権により処刑。

**李燦**　一九一〇年咸鏡南道北青生まれ。詩人。立教大、早大中退。カップ中央委員。詩集「待望」「焚香」がある。解放後「金日成将軍のうた」などを作詞。

**李箕永**　一八九五年忠清南道牙山生まれ。一九二二年日本に留学し正則英語学校に入学したが翌年関東大震災後に帰国。カップ中央委員を務める。解放後は共和国に移り、現在文学芸術家総同盟委員長。

**宋建鎬**　一九二七年忠清北道沃川の出身。五六年ソウル大法科卒業。『朝鮮日報』外信部をへて、六〇年『韓国日報』論説委員。六五年『京郷新聞』編集局長。六六年『朝鮮日報』論説委員。七三年『東亜日報』首席論説委員となり翌年編集局長となる。韓国民主化運動の同伴者的役割をはたしてきた。南北会談の際は南側ジャーナリストとしてピョンヤンを訪問。著書には「スチューデント・パワー」「東アジアの挑戦」（共著）「評伝ドゴール」「民族知性の探究」「断絶時代の架橋」その他がある。

**華北朝鮮独立同盟**　一九四二年七月、延安に集まった朝鮮独立運動家たちによってつくられた団体。その前身は前年の一月に組織された華北朝鮮青年連合会。

**金武亭**（一九〇四〜五〇?）咸鏡北道生まれ。河南軍官学校砲兵科卒。閻錫山部隊に勤務、砲兵中尉。一九二六年中国共産党入党。三一年瑞金中華ソビエト政府樹立に参加。瑞金から延安への長征に加わり、延安中共軍砲兵隊総司令に就く。蘆溝橋事件勃発後抗日義勇軍を組織。四三年七月朝鮮独立同盟幹部、朝鮮義勇軍総司令。四五年十二月ピョンヤンに帰る。四六年二月北朝鮮人民委員会中央委員。五〇年朝鮮戦争当時は第二軍団長、のち粛清されたという。

# あとがき

本書に収録されている四篇の論稿は、いずれも「金鉄佑・喆佑兄弟を救う会」（略称金兄弟を救う会）が主催した「韓国（朝鮮）問題研究会」の講演記録である。

一九七三年六月、韓国陸軍保安司令部（ＫＣＩＣ）により、当時韓国の浦項総合製鉄所技術担当理事の任にあった金鉄佑（キムチョルウー）氏（兄）と、北海道大学理学部助手の金喆佑（キムチョルウー）氏（弟）が、いわゆる〝北朝鮮スパイ〟容疑の件で逮捕された。両者はともに日本での永住権をもつ在日韓国人であり、前者は日韓経済協力の渦中の人、後者は日本の現職国家公務員という、身近な対象としての側面も働いて、金兄弟逮捕という突然の報道は、日本の社会に大きな衝撃を与えずにはおかなかった。事件発生後すぐに、東大生産技術研究所、北大理学部内に救援会が組織され、同時に、東京と札幌に市民レベルの救援会が生まれた。この東京での市民組織が「金兄弟を救う会」である。

韓国の反共法と国家保安法違反の罪に問われた金兄弟の裁判は、七三年十月に開始され、差戻し審を含めた五回に及ぶ裁判を経て、七五年春、兄鉄佑氏は「懲役十年・公民権停止十年」、弟喆佑氏は「懲役七年・公民権停止七年」の量刑がそれぞれ確定した。その後、両氏は服役生活を過ごすこととなった。

裁判中「金兄弟を救う会」は、あいつぐ渡韓者の派遣、韓国政府ならびに司法当局への嘆願活動などに専念。両氏の無罪判決を願って、微力なりに全力をあげた。そしてこの間、救援会の内部には、ひそかに痛感され続けてきた一つの反省があった。それは、在日韓国人問題を含めた韓国認識（あるいは朝鮮認識）が欠如しているのではないか。つまり、必要条件を欠いたままに、救援活動を行なってきたのではないか。そうしたジレンマをともなった不安が生じていたのである。この内的不安状態を少しでも解消していこうという試みが、「韓国問題研究会」を生む契機となった。

「韓国問題研究会」は、両氏服役後の七五年から七九年にかけ、全部で十六回行なわれた。参考のため、各研究会の内容を列挙しておく。

第1回*／長　璋吉氏「現代韓国小説一夕話」
第2回*／安　宇植氏「金史良とその生きた時代」
第3回*／金　三奎氏「個人史の中の朝鮮と日本」
第4回／三橋　修氏「人間の関係と差別語」
第5回*／金　三奎氏「個人史の中の朝鮮と日本・2」
第6回／桜井　浩氏「韓国と北朝鮮の農業」
第7回／橋川文三氏「西郷隆盛と征韓論」
臨　時／古野喜政氏「維新体制下の韓国を語る」
第8回／高　史明氏「危機の現代と人間」
第9回／佐藤勝巳氏「在日朝鮮・韓国人現況ノート」
第10回／李　三郎氏「なぜパンソリなのか」
第11回／田中　明氏「私と朝鮮とのあいだ」
第12回／姜　舜　氏「李朝のパンソリについて」
第13回／大島幸夫氏「ふだん着のままの日韓関係」
第14回／黒田勝弘氏「韓国留学体験録」
第15回*／高崎宗司氏「朝鮮の土になった日本人」

（*本書収録。高崎宗司氏のものを除く三篇の論稿は会報『かちそり』に掲載された）

なお、金鉄佑、金喆佑両氏は、七九年八月十五日、韓国の光復節（解放記念日）特赦により仮釈放され、同年十二月十日に日本へ帰還した。両氏の日本帰還によって救援目標の達成をみた「金兄弟を救う会」は、本年四月に会を終結させた。

六年有半の歩みをきざんだささやかな市民組織の終息を告げる意味も含めて、本書の刊行を喜び、金三奎氏はじめ四氏に深く感謝申しあげたい。

一九八〇年四月

旧金鉄佑・喆佑兄弟を救う会（文責　元事務局長／山下恒夫）

金　三奎<キム・サムキュウ>
1903年韓国生れ。
東京大学文学部卒。
〔主著書〕『今日の朝鮮』（河出書房）
『朝鮮現代史』（筑摩書房）

高崎宗司<たかさき・そうじ>
1944年水戸市生れ。
東京教育大学文理学部卒。
〔主著書〕『分断時代の民族文化』
（共訳・社会思想社）

長　璋吉<ちょう・しょうきち>
1941年東京生れ。
東京外国語大学卒。東京外国語大学講師。
〔主著書〕『私の朝鮮語小辞典』（北洋社）

安　宇植<アン・ウシク>
1932年東京生れ。
早稲田大学文学部に学ぶ。作家。
〔主著書〕『金史良』（岩波書店）
『駑馬万里』（訳書・朝日新聞社）

朝鮮と日本のあいだ　　朝日選書 157

1980年5月20日　1刷発行　　定価760円

著者　金三奎ほか
発行者　藤田雄三
発行所　東京・名古屋 大阪・北九州　朝日新聞社
〒100 東京都千代田区有楽町 2-6-1
03(212)0131(代)　振替東京 0-1730
印刷所　共同印刷株式会社



製噸・多田 進
0322-259257-0042